

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告137

- I 西郡廃寺(第4次調査)
- II 郡川遺跡(第10次調査)
- III 美園遺跡(第8次調査)

2012年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



# は し が き

八尾市は、大阪府の東部に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡る人々の生活の痕跡が点在するほか、生駒山地西麓には全国的にも知られる古墳時代後期の群集墳「高安古墳群」が形成されています。また平野部には、古大和川水系が運んだ土砂が厚く堆積しており、その中に、縄文時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は平成18・22年度に行った民間の開発に伴う3件の発掘調査の報告をまとめたものです。主な成果としては、西郡廃寺第4次では古墳～鎌倉時代、郡川遺跡第10次では弥生時代後期と奈良時代、美園遺跡第8次では平安時代後期～鎌倉時代の居住域を検出しました。

本書に収めた資料は、遺跡の解明や地域の歴史を明らかにして行く上で貴重な研究材料であります。今後本書は、学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 西 浦 昭 夫

# 例 言

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成18・22年度に実施した発掘調査の報告を収録したものである。
1. 内業整理及び本書作成業務は、各現地調査終了後に着手し、平成24年3月までに終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I - 西村公助、II・III - 高萩千秋である。全体の構成・編集は高萩・西村が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（平成8年7月編纂）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成22年度改訂版）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び日本測地系(第VI系)の座標北を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。  
掘立柱建物 - SB、井戸 - SE、土坑 - SK 溝 - SD 小穴 - SP 落ち込み - SO 自然河川 - NRの分類記号の後に通し番号を付している。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪 - 白、須恵器・陶磁器 - 黒、木器・瓦・石・金属製品 - 斜線
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目 次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 西郡廃寺 第4次調査 (NK T2006-4).....	1
II 郡川遺跡 第10次調査 (KR 2010-10).....	51
III 美園遺跡 第8次調査 (MS 2010-8).....	57

I 西郡廃寺第4次調査 (NK T 2006 - 4)

# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市泉町二丁目52、55-2、三丁目68-1、68-7で実施した店舗建設に伴う西郡廃寺第4次調査(NKT2006-4)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会の西村公助が担当した。
1. 現地調査は平成19年1月22日に着手し平成19年3月14日に終了した。調査面積は約1,804㎡である。
1. 現地調査には、青山洋・飯塚直世・岡真也・垣内洋平・小西寛明・関野佑城・鷹羽侑太・永井律子・中浜輝志・中村百合・橋本黄士・村井厚三・村井俊子の参加を得た。(敬称略、五十音順)
1. 内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成23年12月をもって終了した。(敬称略、五十音順)  
遺物実測-赤松英幸・市森千恵子・岩沢玲子・中野一博・永井・中村・村井(俊)、図面トレース-市森・木村健明・西村、遺物写真撮影-木村・西村
1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。

# 本 文 目 次

1. はじめに	1
2. 調査概要	5
1) 調査に至る経緯と経過	5
2) 層序	7
3) 検出遺構と出土遺物	9
3. まとめ	48

# 挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡位置図(八尾市埋蔵文化財分布図－平成22年度版－を参考にして作図)……	1
第2図	調査地周辺図……	4
第3図	調査区設定図……	6
第4図	壁面図……	8
第5図	S K1003平面・断面図……	9
第6図	S P1004平面・断面図……	9
第7図	第1面平面図……	11-12
第8図	S K1003、S P1001・1002・1004・1040、S D1008・1010出土遺物実測図……	13
第9図	S P1007・1008・1010・1037出土遺物実測図……	15
第10図	S B1001平面・断面図……	15
第11図	S K1076・S P1041出土遺物実測図……	16
第12図	S K1015 平面・断面図……	17
第13図	S K1015、S P1065・1068・1081・1082出土遺物実測図……	19
第14図	S E1053平面・断面・見通し図……	22
第15図	S E1053枠内遺物出土状況平面図……	23
第16図	S E1053出土遺物実測図(1)……	27
第17図	S E1053出土遺物実測図(2)……	28
第18図	S E1053出土遺物実測図(3)……	29
第19図	S E1053出土遺物実測図(4)……	30
第20図	S E1053出土遺物実測図(5)……	31
第21図	S E1053出土遺物実測図(6)……	32
第22図	S E1053出土遺物実測図(7)……	33
第23図	S E1033平面・断面図……	34
第24図	S E1033出土遺物実測図(1)……	35
第25図	S E1033出土遺物実測図(2)……	36
第26図	S E1098平面・断面図……	38
第27図	S E1098・S K1056・S D1005・S D1011・1013出土遺物実測図……	39
第28図	S E1014平面・断面図……	42
第29図	S D1001・1002・1004出土遺物実測図……	43
第30図	S K2001平面・断面図……	44
第31図	S K2001・S D2001・N R2001出土遺物実図……	44
第32図	第2面平面図……	46
第33図	4・3・0層出土遺物実測図……	47

# 表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	3
表2	古墳時代後期小穴一覧表	10
表3	古墳時代後期溝一覧表	10
表4	出土遺物観察表(1)	10
表5	出土遺物観察表(2)	13
表6	古墳時代後期～奈良時代小穴一覧表	14
表7	出土遺物観察表(3)	14
表8	古墳時代後期～奈良時代溝一覧表	15
表9	出土遺物観察表(4)	17
表10	奈良～平安時代土坑一覧表	18
表11	出土遺物観察表(5)	18
表12	奈良～平安時代小穴一覧表	20
表13	出土遺物観察表(6)	24
表14	出土遺物観察表(7)	25
表15	出土遺物観察表(8)	26
表16	出土遺物観察表(9)	36
表17	出土遺物観察表(10)	37
表18	平安時代後期～鎌倉時代土坑一覧表	38
表19	平安時代後期～鎌倉時代小穴一覧表	39
表20	出土遺物観察表(11)	40
表21	鎌倉時代～室町時代土坑一覧表	40
表22	鎌倉時代～室町時代小穴一覧表	41
表23	鎌倉時代～室町時代溝一覧表	42
表24	近世小穴一覧表	42
表25	近世溝一覧表	43
表26	出土遺物観察表(12)	43
表27	古墳時代初頭～前期溝一覧表	45
表28	出土遺物観察表(13)	45
表29	出土遺物観察表(14)	47

## 写真目次

写真1	調査前(南東から).....	5
写真2	東区機械掘削状況(南東から).....	5
写真3	東区4層上面調査状況(南から).....	5
写真4	西区5・6層上面調査状況(北東から).....	6

## 図版目次

図版1	調査地遠景(西から) 調査地遠景(北西から)
図版2	調査地周辺(南西から) 調査地周辺(南から) 調査地周辺(南から)
図版3	西区北壁[0～4層](南から) 西区西壁[0～4層](東から) 西区西壁[4～6層](南東から)
図版4	東区北壁[0～4層](南から) 東区北壁[4～6層](南から) NR2001断面(南東から)
図版5	西区第1面〔4層上面〕全景(南から) 西区第2面〔5・6層上面〕全景(南から)
図版6	東区第1面〔4層上面〕全景(南から) 東区第2面〔5・6層上面〕全景(南東から)
図版7	SK1003(南から) SK1003遺物出土状況(南から) SP1004(南から)
図版8	SP1004遺物出土状況(南から) SK1076(南西から) SK1015(南から)
図版9	SE1053上部全景(南から) SE1053上部断面(南から) SE1053上部遺物検出状況(西から) SE1053上部遺物出土状況(南から) SE1053上部調査状況(南西から)
図版10	SE1053下部全景(南から) SE1053下部断面(南から) SE1053下部遺物検出状況(西から) SE1053下部遺物出土状況(南から) SE1053下部調査状況(東から)
図版11	SE1033(南から) SE1033遺物出土状況(南から) SE1033断面(南から)
図版12	SE1098(南から) SE1014断面(南から) SK2001(南から)
図版13	SK1003、SP1001、SP1004、SD1010、SK1076出土遺物
図版14	SK1076、SK1015出土遺物
図版15	SP1081、SP1082、SE1053出土遺物
図版16	SE1053出土遺物
図版17	SE1053出土遺物
図版18	SE1053出土遺物
図版19	SE1033出土遺物
図版20	SE1033出土遺物
図版21	SE1033、SD1001、SD1004出土遺物
図版22	SK2001、SD2001、NR2001、4層、0層出土遺物

# I 西郡廃寺第4次調査 (NKT2006-4)

## 1. はじめに

西郡廃寺・西郡遺跡<sup>註1</sup>は、大阪府八尾市北西部に位置する泉町、桂町、幸町に広がる東西約400m、南北約500mの範囲に及ぶ弥生時代後期から室町時代に至る複合遺跡である。

当遺跡は、地理的には大阪府の中東部に広がる河内平野の中央部に立地し、この平野内を北西方向に流れる楠根川の右岸に位置している。同平野には数多くの遺跡が存在し、当遺跡周辺に限って言うと、南に萱振遺跡、西に山賀遺跡、北に若江遺跡がある。

当遺跡内では、八尾市教育委員会(以下市教委)と(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近世の遺構・遺物が検出されている。以下、隣接する萱振遺跡、山賀遺跡の調査成果も含めて、周辺の歴史的環境について時代ごとに記述する。

現時点では、周囲で最も古い遺構・遺物が検出された場所は、第2図の山賀3(第2図内の番号は表1の番号に一致する。以下同じ)である。ここからは弥生時代前期後半の遺構の存在を確認し、多くの土器が出土していることから、居住域の存在が明らかになった。また、山賀3では



第1図 周辺の遺跡位置図 (八尾市埋蔵文化財分布図—平成22年度版—を参考にして作図)

弥生時代中期前半の遺物も出土し、前期から引き続き居住していた可能性が考えられる。山賀3のほか、周辺では大阪府文化財センターが行った近畿自動車道山賀その3の調査や下水道の調査<sup>註2</sup>、および東大阪市域の同遺跡内で行われた調査<sup>註3</sup>からも弥生時代前期の遺構・遺物が検出されていることから、同時期の集落は東西600m以上、南北500m以上の範囲に存在していると推測できる。

後期になると、遺構・遺物の検出される地点は、西郡廃寺推定範囲内のほぼ中央部(③・萱振(市教委Ⅰ)・萱振1・萱振6)に移動し、後期後半の竪穴住居や井戸などを確認している。特に萱振6では焼失した竪穴住居を2棟発見した。

古墳時代初頭～前期の遺構・遺物は、⑤で土坑・落込み、萱振7で井戸や土坑、萱振16で井戸・溝などを確認している。中でも、萱振16の溝内からは吉備・山陰・東海などから搬入品された土器が多く出土しており、これらは他地域との交流を盛んに行っていたと推測できる資料である。前期後半には当遺跡の南の萱振遺跡内に萱振1号墳<sup>註4</sup>が築かれ、河内平野内における出現期の古墳として注目されている。⑥では、古墳時代初頭に埋没した河川を確認している。

古墳時代中期には萱振1で溝から須恵器杯身などと共に土師器の竈が出土しており、当遺跡の南東部に居住域が存在していた可能性が考えられる資料を得ている。

古墳時代後期には、萱振7で井戸や土坑が検出され、井戸は6世紀後半に廃絶したと推測されている。また、萱振16でも同時代の掘立柱建物を検出していることから、6世紀代の居住域が当遺跡の西部と南西部に存在してことが明らかになっている。

奈良時代に入ると、⑤・⑥・萱振1・萱振7・萱振16で当該期の瓦が出土し、当遺跡の中央部には、西郡廃寺が存在していたと推定される<sup>註4</sup>。その他、⑪では、飛鳥～奈良時代初め頃の遺物が出土しており同廃寺に関連する集落が存在していることが考えられる。

平安時代の前期には、萱振遺跡<sup>註5</sup>で集落の存在が明らかになった。同時代後期には、⑦・萱振1・萱振(市教委Ⅱ)・萱振6・萱振16で遺構が検出されている。また、⑥・⑦・萱振1・萱振6・萱振16では、平安時代後期～鎌倉時代の遺構の検出や遺物が出土している。これらから、同遺跡の中央部～北側に集落が展開していると推測できる。

室町時代は萱振16で溝を検出し、これ以外に同遺跡内においては遺構の検出は乏しく、遺跡の南東部に集落が展開していた可能性が考えられる。

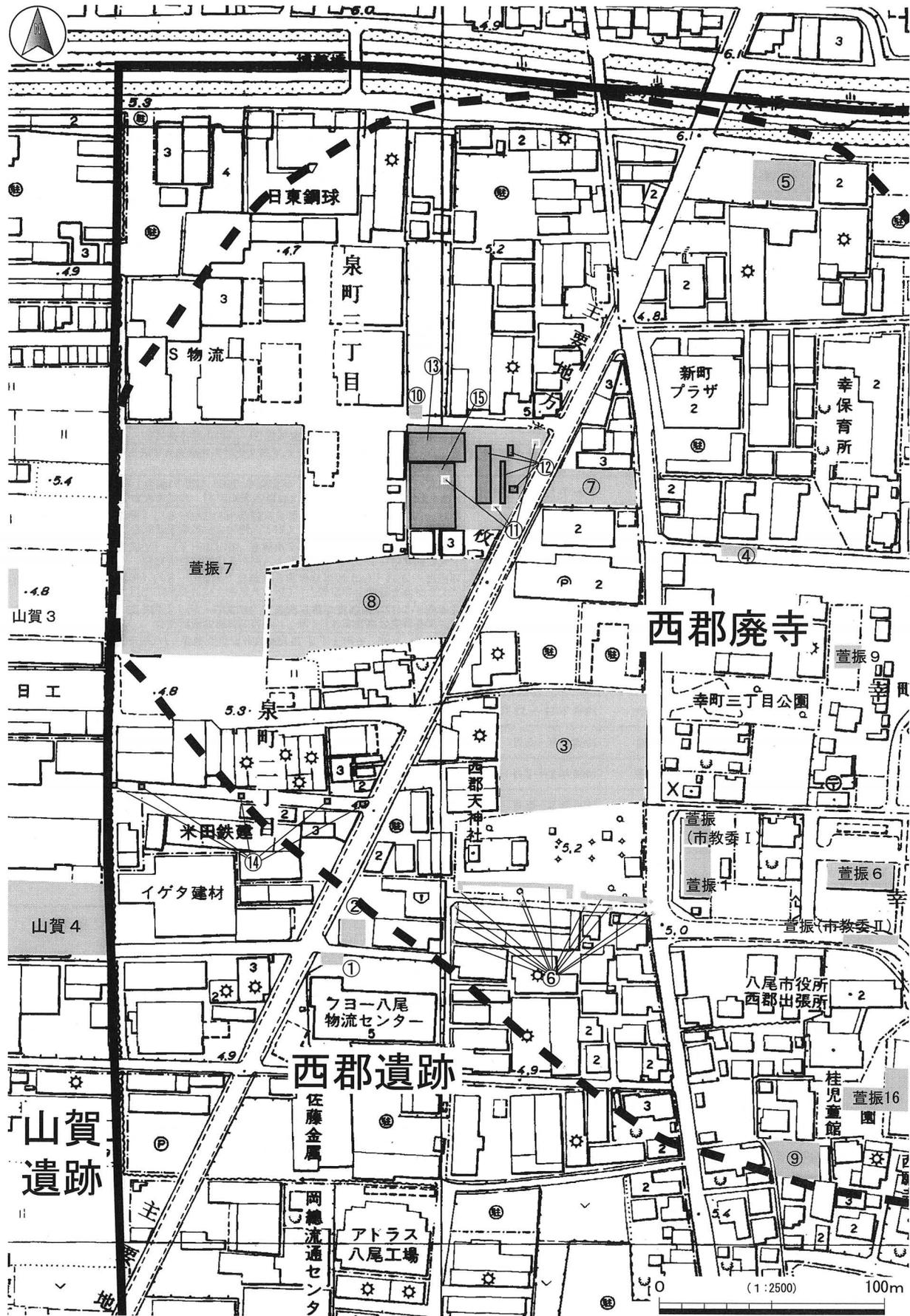
表1 周辺の調査一覧表

遺跡名	番号	調査名	調査主体	調査年月	文献
西郡廃寺	①		市教委	1980年2月	米田敏幸他 1983『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会(一覽表に記載)
	②		市教委	1980年3月	米田敏幸他 1983『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会(一覽表に記載)
	③	90-005	市教委	1990年6月	吉田野乃 1991「6 西郡廃寺(90-005)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会
	④	92-414	市教委	1993年1月	みなもと齋 1994「9 西郡廃寺(92-414)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30 八尾市教育委員会
	⑤	99-146	市教委	1999年7月	渚 斎 2000「8 西郡廃寺遺跡(99-146)の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42 八尾市教育委員会
		NKT99-1	研究会	1999年10～11月	高萩千秋 2000「Ⅲ 西郡廃寺遺跡第1次調査(NKT99-1)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告1』八尾市教育委員会・財団法人八尾市文化財調査研究会
	⑥	NKT2005-2	研究会	2005年9～11月	河村恵理 2007「Ⅱ 西郡廃寺遺跡第2次調査(NKT2005-2)」『(財)八尾市文化財調査研究会95』財団法人八尾市文化財調査研究会
	⑦	2006-190	研究会	2007年1月	西村公助 2008「1-6 西郡廃寺(2006-190)の調査」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57 八尾市教育委員会
		NKT2006-3	研究会	2007年1～2月	高萩千秋 2009「Ⅵ 西郡廃寺遺跡第3次調査(NKT2006-3)」『(財)八尾市文化財調査研究会127』財団法人八尾市文化財調査研究会
	⑧	2006-314	研究会	2006年11月	島田裕弘 2007「2-18 西郡廃寺(2006-314)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55 八尾市教育委員会
		NKT2006-4	研究会	2007年1～3月	本書
	⑨	2008-289	研究会	2008年10月	西村公助 2009「14 西郡廃寺(2008-289)の調査」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告59 八尾市教育委員会
	⑩	NKT2008-5	研究会	2008年12月～2009年1月	坪田真一・木村健明 2009「(財)八尾市文化財調査研究会平成20年度事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
	⑪	2008-420	研究会	2009年1月	坪田真一 2010「I-3-9 西郡廃寺(2008-420)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告61 八尾市教育委員会
	⑫	NKT2009-6	研究会	2009年7～8月	西村公助 2010「15 西郡廃寺第6次調査(NKT2009-6)」『平成21年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑬	NKT2010-7	研究会	2010年5月～6月	樋口薫 2011「(19) 西郡廃寺第7次調査(NKT2010-7)」『平成22年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会	
⑭	NKT2010-8	研究会	2010年9月～10月	坪田真一 2011「(20) 西郡廃寺第8次調査(NKT2010-8)」『平成22年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会	
⑮	NKT2011-9	研究会	2011年4月～7月	成海佳子 2012「西郡廃寺第9次調査(NKT2011-9)」『平成23年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会	
萱振遺跡	萱振(市教委Ⅰ)		市教委	1985年3月	米田敏幸 1985「幸町1丁目76埋蔵文化財調査概要」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会
	萱振(市教委Ⅱ)		市教委	1986年9～10月	米田敏幸 1987「萱振遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
	萱振1	K F 86-1	研究会	1984年11～12月	原田昌則 1987「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度(財)八尾市文化財調査研究会報告13(財)八尾市文化財調査研究会
	萱振6	K F 88-6	研究会	1988年6～8月	原田昌則 1996「Ⅰ 萱振遺跡第6次調査(K F 88-6)」『萱振遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告52』(財)八尾市文化財調査研究会
	萱振7	K F 88-7	研究会	1998年2～3月	原田昌則 1996「Ⅱ 萱振遺跡第7次調査(K F 88-7)」『萱振遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告52』(財)八尾市文化財調査研究会
	萱振16	K F 94-16	研究会	1994年5～8月	原田昌則 2007「Ⅰ 萱振遺跡第16次調査(K F 94-16)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告95』(財)八尾市文化財調査研究会
山賀遺跡	山賀3	YMG94-3	研究会	1995年1～2月	原田昌則 2004「Ⅰ 山賀遺跡第3次調査(YMG94-3)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告81』(財)八尾市文化財調査研究会
	山賀4	YMG96-4	研究会	1996年7月	原田昌則 1998「Ⅸ 山賀遺跡第4次調査(YMG96-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会

※ 調査主体凡例 市教委-八尾市教育委員会 研究会-(財)八尾市文化財調査研究会

## 註

- 註1 遺跡の名称の変更は時期を追って下記の文献の註1に記載されているので、そちらを参照されたい。なお本書では報告書に記載されている遺跡名をそのまま使用し記述した。  
・原田昌則 2007「Ⅰ 萱振遺跡第16次調査(K F 94-16)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告95』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 ・中西靖人他 1984『山賀遺跡(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター  
・本間元樹 2007『山賀遺跡』大阪府文化財センター
- 註3 ・芋本隆裕 1981「山賀遺跡発掘調査概報-昭和54・55年度-」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市教育委員会  
・阿部嗣治他 1981「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市教育委員会
- 註4 ・吉岡 哲1988「考古編 第五章」『八尾市史(前近代)』本文編 八尾市役所
- 註5 ・広瀬雅信他 1992『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書 第39輯 大阪府教育委員会



第2図 調査地周辺図

## 2. 調査概要

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪府八尾市泉町二・三丁目に所在し(第1図、写真1)、店舗建設の予定地に当る。2006年度に申請者から店舗建設の届け出が市教委文化財課にあった。この予定地は周知の遺跡である西郡廃寺に位置することから、2006年11月15日～17日にかけて埋蔵文化財の遺存状態を確認するため試掘調査を行った。その結果、古墳時代～中世の遺構および遺物が確認され、特に奈良～平安時代にかけての集落が存在している可能性が高いことが判明した。これを受けて申請者と市教委は発掘調査の協議を行い、研究会が発掘調査を受託した。

今回の調査は、研究会が西郡廃寺遺跡内で行った第4次調査にあたる。市教委の指示に従い、工事予定地に東西55.5m×南北32.5mの面積約1804㎡の調査地を設定した。なお調査は、掘削土の置き場の都合上、西区と東区に分け、西区、東区の順に行った(第3図)。

機械掘削は2007年1月22日から開始した。機械掘削(写真2)は現地表(T.P. +5.0m)下約0.5～0.8mまでに存在する近世の耕作土までとし、これ以下の約0.15mを人力で掘り進め遺構や遺物の検出に努め、記録や写真撮影作業を適宜行った(写真3)。また4層上面の調査終了後、調査地のほぼ中央部に東西40m、南北12mの調査範囲を設定し5・6層上面の調査を行った。4層上面調査終了面から0.3～0.7mを機械と人力を併用し掘削し、これ以下の約0.15mを人力で掘削しながら、遺構や遺物の検出に努め、記録や写真撮影作業を適宜行った(写真4)。現地調査および埋め戻しの作業は同年3月14日に終了した。

調査区全体の地区割は、座標のX = -150, 190・Y = -36, 075を起点に南へ50m、東へ60mの範囲に設定した。区割は10m毎に

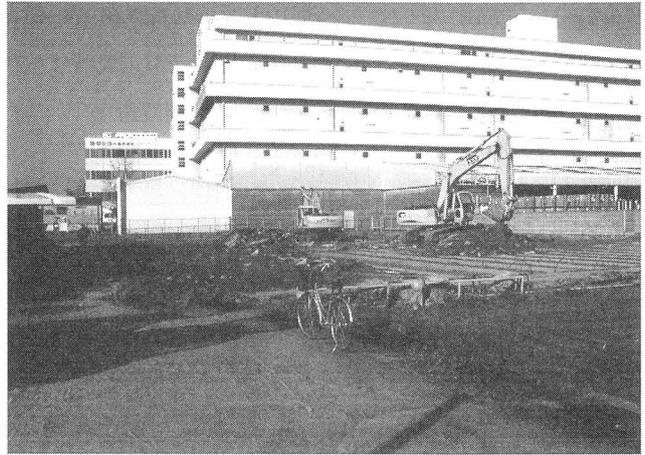


写真1 調査前(南東から)

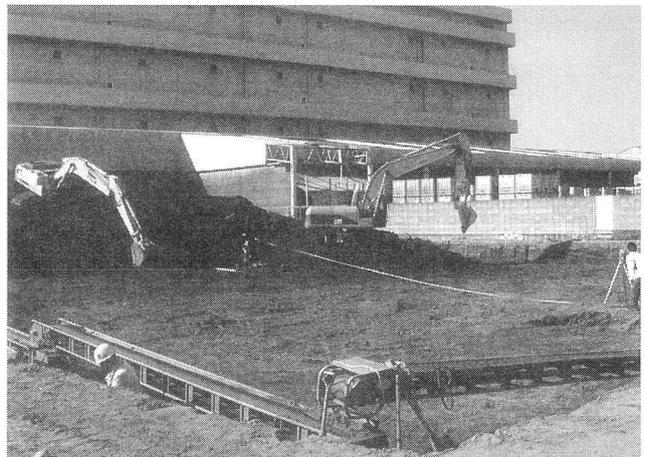


写真2 東区機械掘削状況(南東から)



写真3 東区4層上面調査状況(南から)

南へ算用数字の1～5、東へアルファベットのA～Fを付け、南東隅の交点から北西側を1区画の単位とした。区画は1A～5F地区と呼称することにした(第3図)。また、遺構番号の数字は、右の一～三桁目が遺構番号、四桁目は検出面番号を示している。

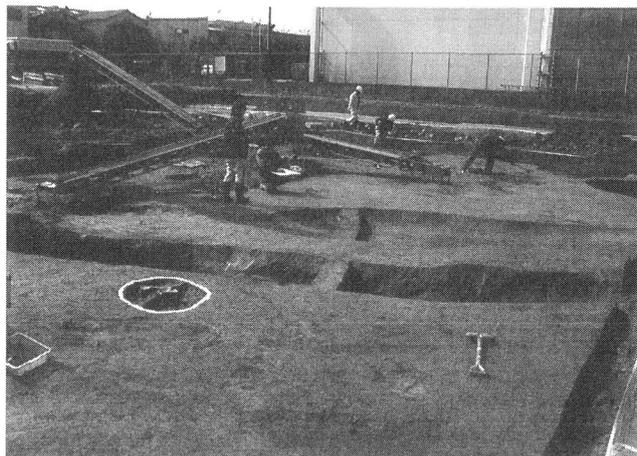
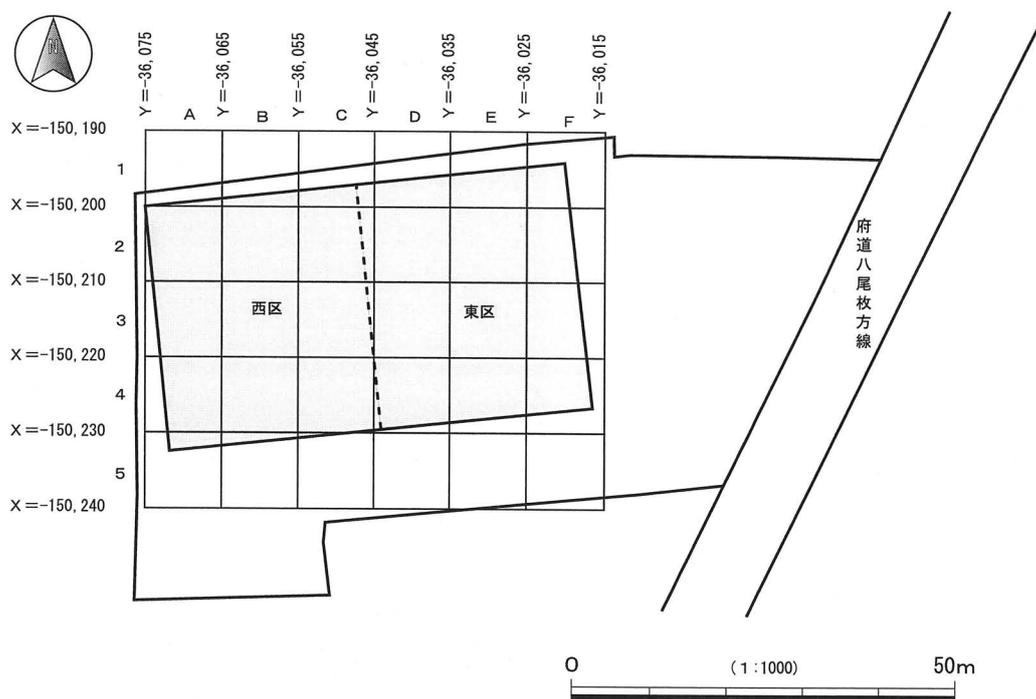


写真4 西区5・6層上面調査状況(北東から)

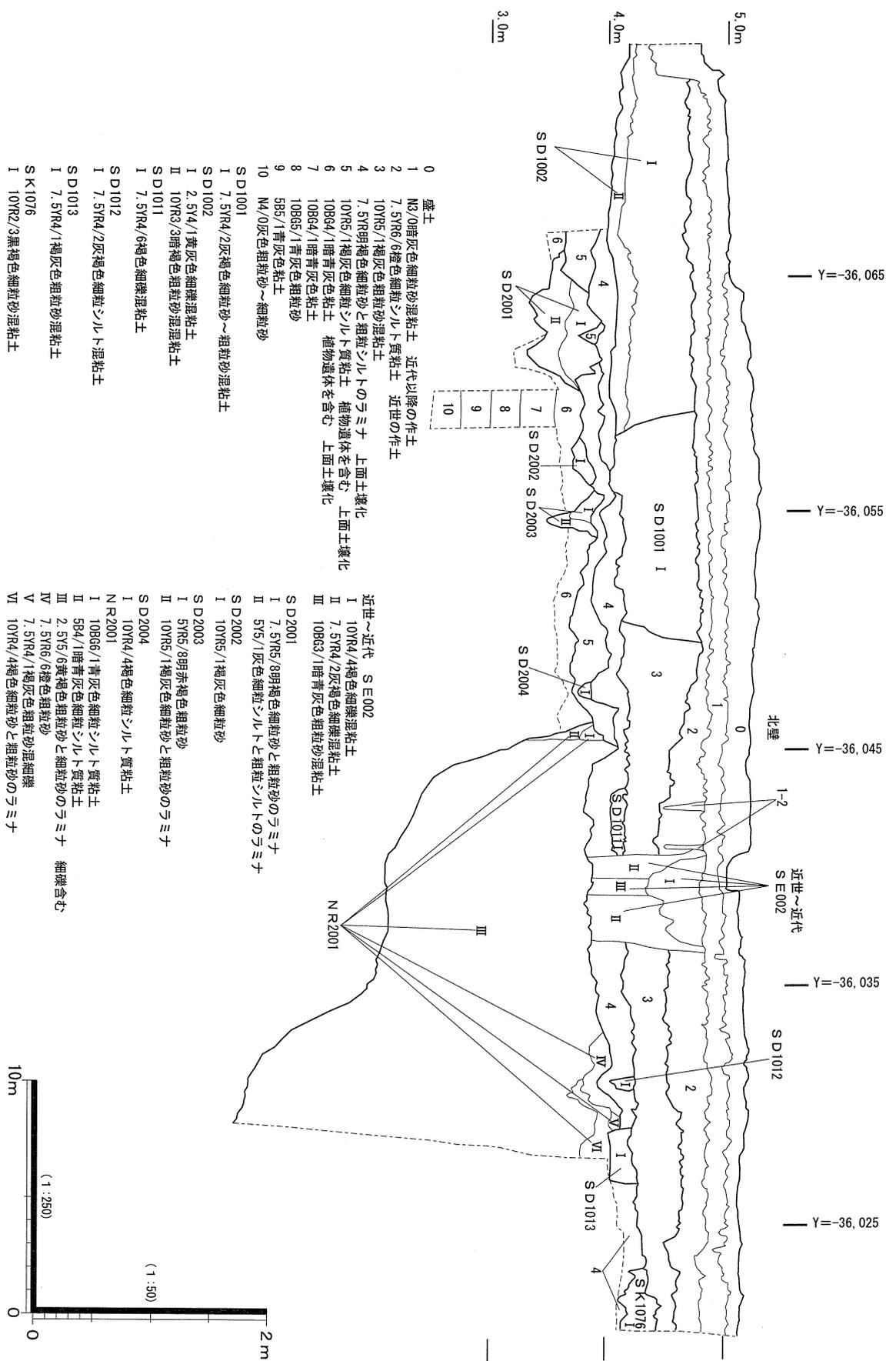


第3図 調査区設定図

## 2) 層序

現地表面の高さはT.P. +5.0m前後で、現代の盛土および近世の作土および近代以降の作土を除去すると、近世以前の地層が良好な状態で確認できた。調査では、深さ約4.35mのT.P. +0.9mまでの地層を確認し、以下では各層の特徴について述べる。

- 0層 現代の盛土および攪乱で、層厚は0.1~0.3mを測る。
- 1層 N3/0暗灰色細粒砂混粘土からなる近代以降の作土層で、層厚は0.1~0.5mを測る。
- 2層 7.5YR6/6橙色細粒シルト質粘土からなる近世の作土で、層厚は0.1~0.4mを測る。
- 3層 10YR5/1褐灰色粗粒砂混粘土からなる中世~近世の整地土で、層厚は0.1~0.7mを測る。
- 4層 7.5YR明褐色細粒砂と粗粒シルトからなる河川堆積で、斜交ラミナが顕著であった。上部は植物遺体を含む地表面で、土壌化している。層厚は0.1~0.3mを測る。上面(第1面)で、古墳時代後期、古墳時代後期~奈良時代、奈良時代、奈良~平安時代、平安時代前期、平安時代後期~鎌倉時代、鎌倉~室町時代、近世、近世~近代の遺構を検出した。
- 5層 10YR5/1褐灰色細粒シルト質粘土からなり、上部には植物遺体を含み、攪拌を受ける土壌化層である。層厚は0.1~0.3mを測る。
- 6層 10BG4/1暗青灰色粘土からなり、上部には植物遺体を含み、攪拌を受ける土壌化層である。5層と6層の上面(第2面)では、弥生時代後期と古墳時代初頭~前期の遺構を検出した。層厚は0.25mを測る。
- なお、5層上面から切り込む河川(NR2001)は、調査地東部のほぼ全域に存在していることが明らかになり、この河川の河床が移動した結果、今回の調査地の東部には、微高地が形成されたことが判明した。このことから、古墳時代以降近代まで、この微高地の上で生活を営んでいたことが判った。
- 7層 10BG4/1暗青灰色粘土からなり、泥状の堆積であった。層厚は0.3mを測る。
- 8層 10BG5/1青灰色粗粒砂からなり、ラミナを確認した。層厚は0.2mを測る。
- 9層 5B5/1青灰色粘土からなり、泥状の堆積であった。層厚は0.25mを測る。
- 10層 N4/0灰色粗粒砂~細粒砂からなり、ラミナを確認していることや湧き水が多量にあったことから、河川堆積と考える。層厚は0.25m以上を測る。
- なお、7~10層は弥生時代後期以前に流れていた河川である。

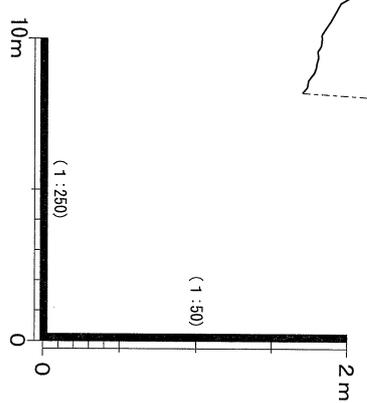


- 0 盛土
- 1 N3/0暗灰色細粒砂混粘土 近代以降の作土
- 2 7.5YR6/3褐色細粒シルト質粘土 近世の作土
- 3 10YR5/1褐色粗粒砂混粘土
- 4 7.5YR明褐色細粒砂と粗粒シルトのラミナ 上面土壌化
- 5 10YR5/1褐色細粒シルト質粘土 植物遺体を含む 上面土壌化
- 6 10B64/1暗青灰色粘土 植物遺体を含む 上面土壌化
- 7 10B64/1暗青灰色粘土
- 8 10B65/1青灰色粗粒砂
- 9 5B5/1青灰色粘土
- 10 M4/0灰色粗粒砂～細粒砂

- SD1001 I 7.5YR4/2灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土
- SD1002 I 2.5Y4/1黄灰色細礫混粘土
- II 10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土
- SD1011 I 7.5YR4/6褐色細礫混粘土
- SD1012 I 7.5YR4/2灰褐色細粒シルト混粘土
- SD1013 I 7.5YR4/1褐色粗粒砂混粘土
- S K1076 I 10YR2/3黒褐色粗粒砂混粘土

- 近世～近代 S E002
- I 10YR4/4褐色細礫混粘土
- II 7.5YR4/2灰褐色細礫混粘土
- III 10B63/1暗青灰色粗粒砂混粘土
- SD2001 I 7.5YR5/8明褐色細粒砂と粗粒砂のラミナ
- II 5Y5/1灰色細粒シルトと粗粒シルトのラミナ
- SD2002 I 10YR5/1褐色細粒砂
- SD2003 I 5YR5/8明赤褐色粗粒砂
- II 10YR5/1褐色細粒砂と粗粒砂のラミナ
- SD2004 I 10YR4/4褐色細粒シルト質粘土
- NR2001 I 10B66/1青灰色細粒シルト質粘土
- II 5B4/1暗青灰色細粒シルト質粘土
- III 2.5Y5/6黄褐色粗粒砂と細粒砂のラミナ 細礫含む
- IV 7.5YR6/6褐色粗粒砂
- V 7.5YR4/1褐色細粒砂混細礫
- VI 10YR4/4褐色粗粒砂と粗粒砂のラミナ

第4図 壁面図



3) 検出遺構と出土遺物

第1面

4層上面で、古墳時代後期の土坑1基(S K1003)、小穴6個(S P1001・1002・1004~1006・1040)、溝2条(S D1008・1010)、古墳時代後期~奈良時代の小穴11個(S P1007~1011・1021~1025・1037)、溝2条(S D1006・1007)、奈良時代の土坑1基(S K1076)、小穴1個(S P1041)、奈良~平安時代の土坑5基(S K1015・1026・1079・1087・1088)、小穴31個(S P1016・1027・1042・1043・1058~1075・1077・1078・1080~1086)、平安時代前期の井戸1基(S E1053)、小穴2個(S P1055・1057)、平安時代後期~鎌倉時代の井戸1基(S E1033)、土坑5基(S K1034~1036・1050・1054)、小穴15個(S P1012・1013・1029~1032・1038・1039・1045~1049・1051・1052)、鎌倉~室町時代の井戸1基(S E1098)、土坑2基(S K1044・1056)、小穴21個(S P1017~1020・1092~1097・1099~1109)、溝6条(S D1003・1005・1009・1011~1013)、近世の井戸1基(S E1014)、小穴4個(S P1028・1089~1091)、溝3条(S D1001・1002・1004)、近世~近代の井戸2基(S E001・002)を検出した。以下では時代の古い遺構から順に記述する。

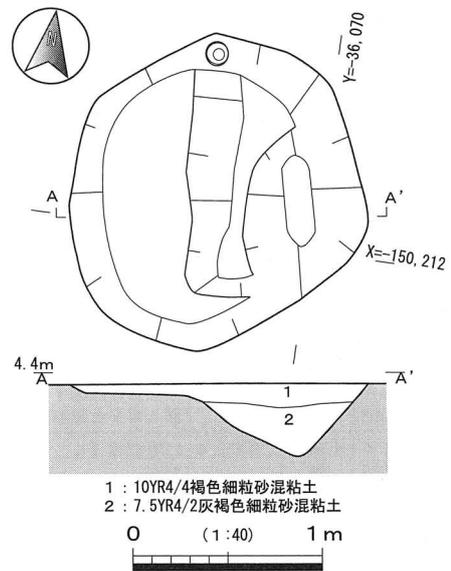
古墳時代後期

S K1003

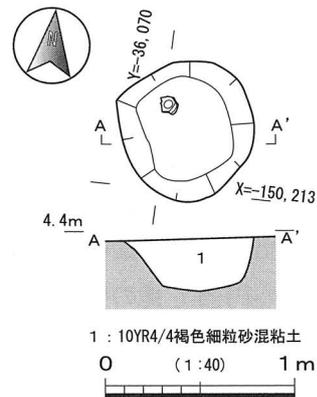
S K1003は3A区で検出した。平面形状は円形で径1.5mを測る。断面形状はV字形を呈し、西側には段があり、深さ0.4mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/2灰褐色細粒砂混粘土で、土師器や須恵器が出土した。このうち図化したものは土師器杯(1)、土師器甕(2)、須恵器杯身(3)である。1の口縁端部は短くつまみ出す。2の口縁部は「く」の字に曲がり、端部は面をもつ。3の口縁部は内傾して伸び、端部は尖りぎみに丸く終わる。

S P1001・1002・1004~1006・1040

S P1001・1002・1004~1006は西端で検出した。平面形状は円形(S P1004・1005)と楕円形(S P1001・1002・1006・1040)のものに分けることが可能である。S P1001は平ら面が4面確認できる石を水平に置かれた状態で検出したことから、建物などの構築物を構成するものであったと推測される。各小穴からは土師器・須恵器の破片が出土した。この内図化したものはS P1001の須恵器杯蓋(4)、須恵器杯身(5)、礎石?(6)、S P1002の須恵器杯蓋(7・8)、須恵器杯身(9)、S P1004の須恵器高杯(10)、S P1040の須恵器杯蓋(11)である。8の天井部の外面には「×」印の記号がある。



第5図 S K1003 平面・断面図



第6図 S P1004 平面・断面図

表2 古墳時代後期小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SP1001	10D	円形	0.6	0.4	-	逆台形(東に段あり)	0.2	10YR4/4褐色細粒砂混粘土 N3/0暗灰色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
SP1002	10D	円形	1.0	0.65	-	逆台形(東に段あり)	0.2	10YR4/4褐色細粒砂混粘土 7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
SP1004	10D	楕円形	-	-	0.68	逆台形	0.27	10YR4/4褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1005	10D	楕円形	-	-	0.38	逆台形	0.17	10YR4/4褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1006	10D	円形	1.0	0.82	-	逆台形	0.33	10YR4/4褐色細粒砂混粘土 7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
SP1040	2D	楕円形SK139に切られる	0.8	0.63	-	逆台形	0.23	2.5Y5/6黄褐色細粒シルト質粘土	土師器・須恵器

表3 古墳時代後期溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD1008	2・3A・B 4A	南西-北東に直線 SP1008~1011、SD1002~1004に切られる	3.3~6.0	逆台形	0.4	7.5YR6/1褐灰色細粒砂混粘土 2.5Y3/1黒褐色細粒シルト質粘土	土師器・須恵器
SD1010	1~4D	南北に直線 SK1033・1036・1039・1041・1042・1048・1049・1057、SD1011に切られる	1.2~2.5	逆台形	0.36	5Y4/1灰色細粒砂混粘土	土師器・須恵器

表4 出土遺物観察表(1)

遺物番号 図版 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
1	SK1003	土師器 杯	口径15	口縁部は内湾する。端部は外側に短くつまみ出し丸く終わる。内面ミガキと思われるが表部磨耗の為調整不明瞭。外面ナデ。	7.5YR8/6浅黄橙	1~3mmの砂粒含む	良好	
2	SK1003	土師器 甕	口径32.4	口縁部は「く」の字に曲がり、端部は面をもつ。内外面はナデを施す。	5YR7/6橙	1~3mmの砂粒含む	良好	
3 13	SK1003	須恵器 杯身	口径10.8	口縁部は内傾して伸び、端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナデ、体部の内面は回転ナデ、外面の上位は回転ナデ、下位は回転ケズリを施す。	N6/0灰	1~2mmの砂粒含む	良好	

SD1008・1010

SD1008は、西部で検出した。南西-北東に直線に伸びる。埋土からは古墳時代後期の須恵器の破片が出土した。この内図化したものは高杯(12)である。12の脚部には横方向の沈線文と方形のスカシ孔を施す。

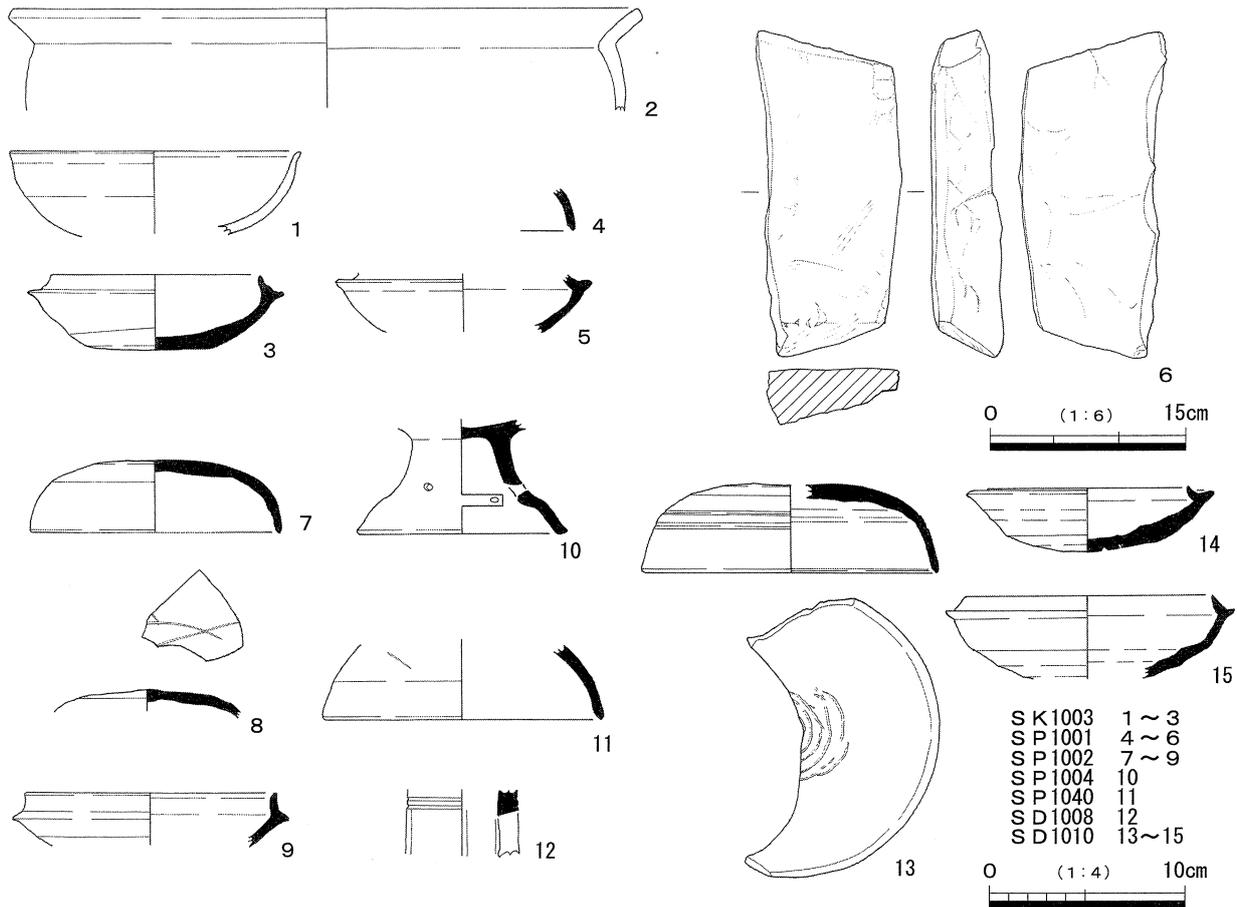
SD1010は、中央部で検出した。南北方向に直線に伸びる。埋土からは古墳時代後期の須恵器の破片が出土した。この内図化したものは須恵器杯蓋(13) 杯身(14・15) である。13の天井部内面には同心円当て具の痕がある。



第7図 第1面平面図

表5 出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
4	S P 1001	須恵器 杯蓋		口縁部は内傾して伸び、端部は凹線状にくぼむ。内外面は回転ナデを施す。	7.5Y6/1灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
5	S P 1001	須恵器 杯身	受部径13.4	口縁部は内傾して伸びる。内外面は回転ナデを施す。	5Y7/1灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	
6	S P 1001	礎石?		平面形状は長方形、断面形状は台形である。平らな面が4面ある。				
7	S P 1002	須恵器 杯蓋	口径12.8 器高3.7	口縁部は内傾して伸び、端部は丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナデ、体部の内面は回転ナデ、外面は回転ケズリを施す。	10Y6/1灰	1~2mmの砂粒含む	良好	
8	S P 1002	須恵器 杯蓋		天井部の内面は回転ナデ、外面は回転ケズリを施す。天井部の外面には『×』印の記号がある。	N5/0灰	1~2mmの砂粒含む	良好	
9	S P 1002	須恵器 杯身	口径12.8	口縁部は内傾して伸び、端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部および体部の内外面は回転ナデを施す。	N6/0灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
10	S P 1004	須恵器 高杯	裾径10.6	裾部は屈曲した後「ハ」の字にひらき、端部は面をもつ。裾部に3方向のスカシ孔がある。また、屈曲部には貫通しないスカシが3方向にある。内外面は回転ナデを施す。	内面N6/0灰 外面N5/0灰	1~4mmの砂粒含む	良好	
11	S P 1040	須恵器 杯蓋	口径13.5	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。内外面は回転ナデを施す。天井部外面にヘラ記号あり。	内面N4/0灰 外面N5/0灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
12	S D 1008	須恵器 高杯		直線状に外側へひらく。脚部の内外面は回転ナデを施す。凹線2条と3方にスカシ孔がある。	5B5/1青灰	1~2mmの砂粒含む	良好	
13	S D 1010	須恵器 杯蓋	口径15.2器 高4.7	口縁部は直線的に外側へひらく。端部は凹線状にくぼむ。口縁部の内外面は回転ナデ、天井部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを施す。天井部内面に同心円当て具の痕がある。	N7/0灰白	1~3mmの砂粒含む	良好	
14	S D 1010	須恵器 杯身	口径10.2器 高3.4	口縁部は内側に伸び、端部は尖って終わる。口縁部の内外面および体部の内面は回転ナデ。外面の上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリを施す。体部に下位にはヘラ記号あり。	N7/0灰白	1~2mmの砂粒含む	良好	
15	S D 1010	須恵器 杯身	口径12.6	口縁部は内側に伸び、端部は尖って終わる。受け部は水平方向に伸びる。口縁部の内外面および体部の内面回転ナデ、外面の上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリを施す。	内面5B6/1青灰 外面5B5/1青灰	1~2mmの砂粒含む	良好	



第8図 SK1003、SP1001・1002・1004・1040、SD1008・1010出土遺物実測図

古墳時代後期～奈良時代

S P 1007～1011・1021～1025・1037

S P 1007～1011・1021～1025・1037は中央から西部で検出した。このうち小穴6個(S P 1007～1009・1022～1024)が掘立柱建物(S B 1001)を構成する柱穴である。

S B 1001は東西2間、南北1間あり、柱間は東西2.2m、南北2.0mの間隔をもつ。S P 1022～1024はS D 1002に切られ上部の平面形状は不明で、柱穴の底が部分的に残存していた。

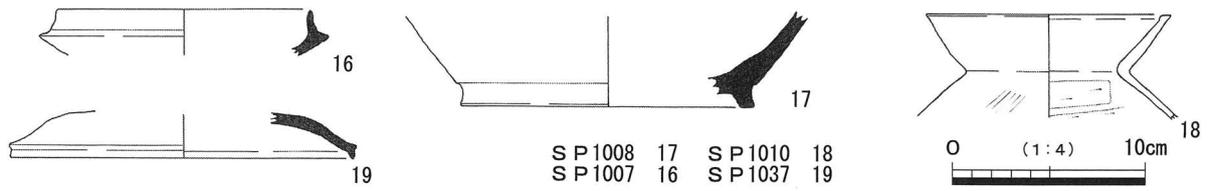
S P 1007～1010からは須恵器・土師器の破片が少量出土した。このうち図化したものはS P 1007の須恵器杯身(16)、S P 1008の須恵器壺(17)、S P 1010の古式土師器甕(18)、S P 1037の須恵器杯蓋(19)である。

表6 古墳時代後期～奈良時代小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S P 1007	2 A	楕円形	0.87	0.7	-	V字形	0.33	10YR4/6褐色粗粒砂混粘土 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土 N3/0暗灰色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
S P 1008	2 A・B	隅丸長方形	1.2	1.0	-	逆台形	0.33	10YR4/6褐色粗粒砂混粘土 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土 N3/0 暗灰色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
S P 1009	2 B	楕円形	1.0	0.81	-	V字形	0.27	10YR4/6褐色粗粒砂混粘土 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土 N3/0暗灰色細粒シルト混粘土	土師器
S P 1010	2 B	円形	-	-	1.05	逆台形	0.14	10YR4/6褐色粗粒砂混粘土 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土	古式土師器・土師器
S P 1011	2 B	楕円形	0.9	0.68	-	逆台形	0.08	10YR4/6褐色粗粒砂混粘土 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土	なし
S P 1021	2 A	円形	-	-	0.35	V字形	0.09	N3/0暗灰色細粒シルト混粘土	
S P 1022	2 A	楕円形 S D 1002に切られる	0.78	0.6	-	皿形状	0.11	N3/0暗灰色細粒シルト混粘土 7.5YR6/2灰褐色細粒砂	
S P 1023	2 A	楕円形 S D 1002に切られる	0.34	0.25	-	逆台形	0.1	N3/0暗灰色細粒シルト混粘土 7.5YR6/2灰褐色細粒砂	なし
S P 1024	2 B	円形 S D 1002に切られる	-	-	0.48	皿形状	0.08	N3/0暗灰色細粒シルト混粘土 7.5YR6/2灰褐色細粒砂	
S P 1025	2 B	円形	-	-	0.45	皿形状	0.12	N3/0暗灰色細粒シルト混粘土 7.5YR6/2灰褐色細粒砂 N3/0暗灰色粘土	なし
S P 1037	2 D	楕円形	0.7	0.57	-	逆台形	0.11	5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混粘土	須恵器

表7 出土遺物観察表(3)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
16	S P 1007	須恵器杯身	口径13.2	口縁部は内傾して伸び、端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部および体部の内外面は回転ナデを施す。	N5/0灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
17	S P 1008	須恵器壺	底径15.0	底部には「ハ」の字にひらく高台が貼り付く。体部の内面と高台部は回転ナデ、外面は回転ケズリを施す。	内面2.5GY4/1暗オリーブ灰 外面5Y4/1灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
18	S P 1010	古式土師器甕	口径12.6	口縁部は内湾し、端部は肥厚する。体部の外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。	7.5YR8/3浅黄橙	1mm程度の砂粒含む	良好	
19	S P 1037	須恵器杯蓋	口径16.0	口縁部は平らな天井部から屈曲し下方へ伸びる。端部は丸く終わる。内外面は回転ナデを施す。	N6/0灰	1～4mmの砂粒含む	良好	



第9図 SP1007・1008・1010・1037出土遺物実測図

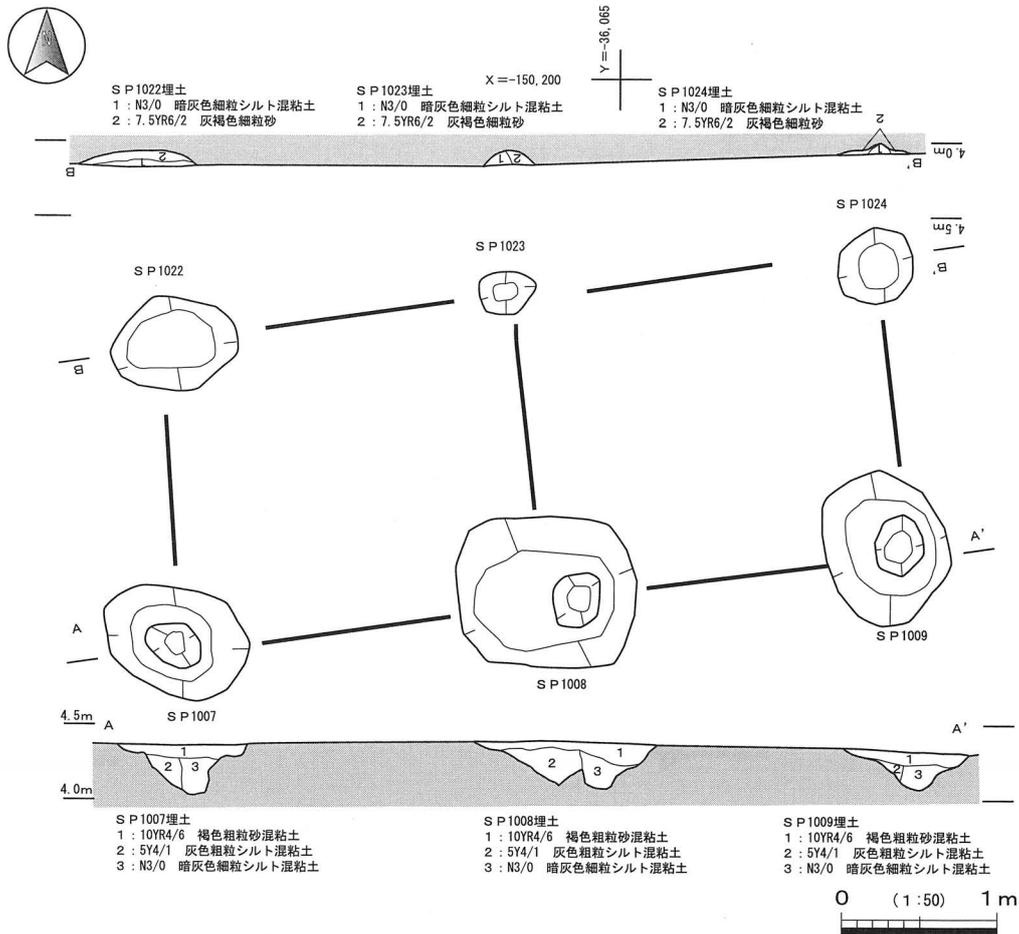
表8 古墳時代後期～奈良時代溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD1006	2・3B 4B・C	南東-北西に蛇行して伸びる	0.4～1.0	皿形状	0.13	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土 5Y5/1灰色細粒シルト ベース層	なし
SD1007	2B 3B・C	南東-北西に直線SD1001に切られる	0.45	皿形状	0.07	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土 5Y5/1灰色細粒シルト ベース層	なし

なお、各小穴の詳細は表6、出土遺物の詳細は表7にまとめた。

SD1006・1007

SD1006・1007は南東-北西方向に伸びる。これらの2条の溝はやや蛇行するがほぼ平行に伸びている。遺物の出土はなかった。



第10図 SB1001 平面・断面図

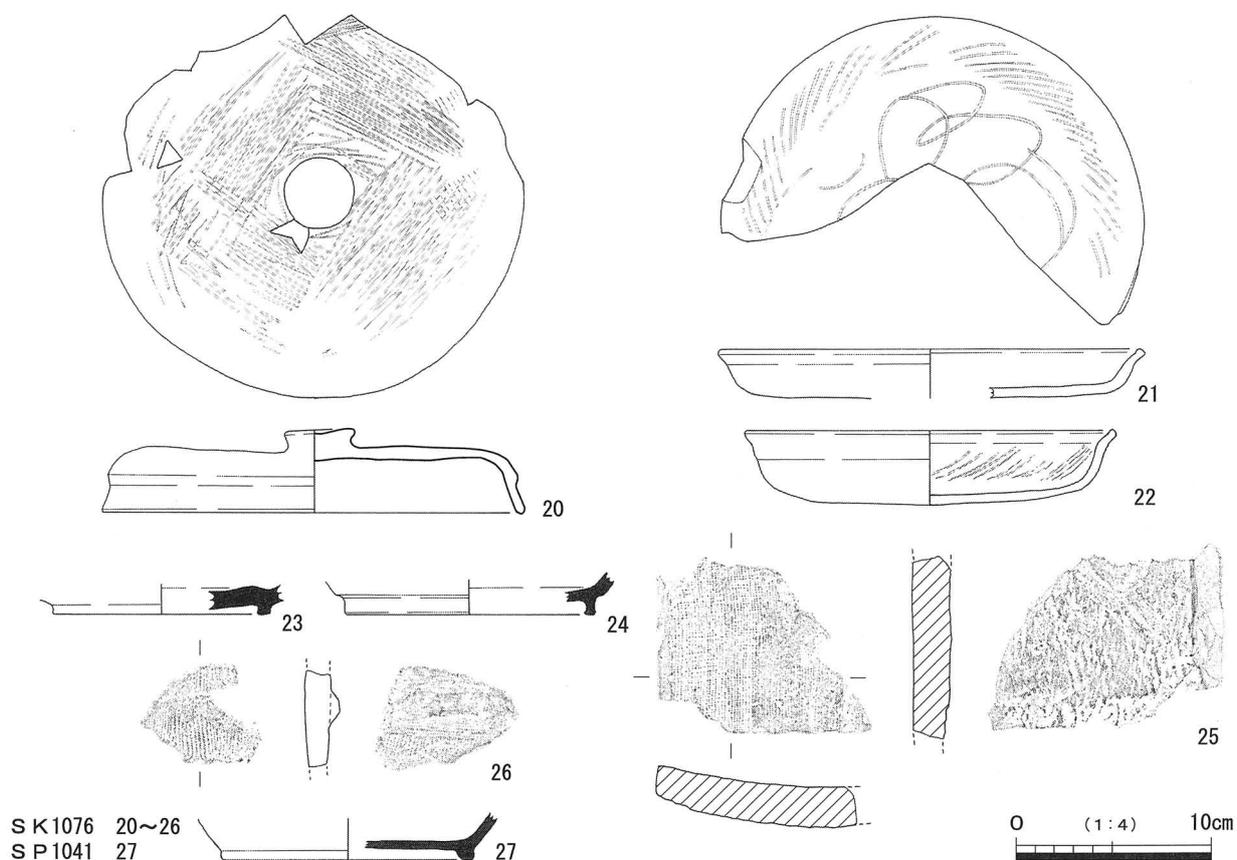
奈良時代

S K 1076

S K 1076は奈良時代中頃の土坑で、北東端の1・2 F 地区で検出した。平面形状は南北に長い不定形で、長径18m以上、短径4.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.7mを測る。埋土は10YR2/3黒褐色細粒砂混粘土で、奈良時代の土師器・須恵器・瓦等の破片および、古墳時代の埴輪の破片が出土した。このうち図化したものは土師器皿蓋(20)、土師器皿(21・22)、須恵器杯身(23・24)、平瓦(25)、円筒埴輪(26)である。20は外面に四分割されたヘラミガキを施す。21の見込みには螺旋状暗文を施す。22の内面には放射状ミガキを施す。

S P 1041

S P 1041は調査地ほぼ中央の2 D 地区で検出した。平面形状は円形でS D 1010を切る。径0.33mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土、5YR4/6赤褐色細粒砂混粘土で須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは須恵器杯身(27)である。27の底部には断面台形の高台が貼り付く。



第11図 S K 1076・S P 1041出土遺物実測図

表9 出土遺物観察表(4)

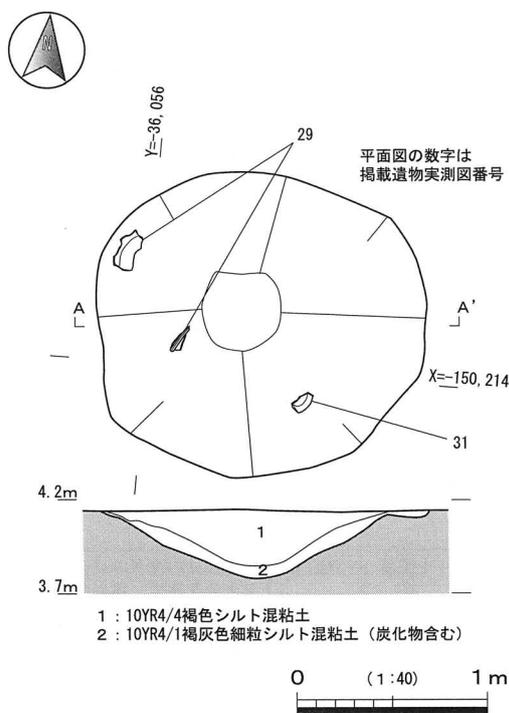
遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
20 13	S K 1076	土師器 皿蓋	口径21.8 器高4.4	天井部は平らで、中央につまみが付く。ゆるやかに曲がり外側に広がる口縁部で、端部は内側に肥厚する。天井部の内面はナデ、外面はナデ後4分割のヘラミガキを施す。	内面2.5YR7/3淡赤橙 外面2.5YR7/4淡赤橙	1mm程度の砂粒含む	良好	
21 14	S K 1076	土師器 皿	口径19.2 器高3.9 底径11.0	底部は平らである。口縁部はゆるやかに曲がり内湾ぎみにひろがる。端部は内側に肥厚する。体部の内面は放射状ミガキを施し、見込みには螺旋状暗文を施す。外面はナデ後ヘラケズリを施す。	内面5YR8/1灰白 外面7.5YR8/2灰白	1~3mmの砂粒含む	良好	
22 14	S K 1076	土師器 皿	口径21.8	底部は平らである。口縁部はゆるやかに曲がり外反してひろがる。端部は内側に肥厚する。体部の内面は放射状ミガキ、外面はナデ後ヘラケズリを施す。	内面2.5YR7/4淡赤橙 外面2.5YR7/6橙	1~2mmの砂粒含む	良好	
23	S K 1076	須恵器 杯身	底径11.2	断面台形の高台が貼り付く。内外面回転ナデ。	N7/0灰白	1~2mmの砂粒含む	良好	
24	S K 1076	須恵器 杯身	底径12.8	断面台形の高台が貼り付く。内外面回転ナデ。	N7/0灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	
25	S K 1076	平瓦		凹面は布目が残り、凸面は縄目タタキを施す。	凹面7.5Y6/1灰 凸面7.5Y5/1灰	1~4mmの砂粒含む	良好	
26 14	S K 1076	円筒埴輪		断面台形のタガが貼り付く。内外面ハケ。タガ部ヨコナデ。	10YR8/2灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	
27	S P 1041	須恵器 杯身	底径13.1	平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。底部に断面台形の高台が貼り付く。内外面回転ナデ。	N7/0灰白	1~3mmの砂粒含む	良好	

奈良～平安時代

S K 1015・1026・1079・1087・1088

調査区南部で検出した。平面形状が円形のものと同丸方形のものに分けることができる。

S K 1015・1079・1087・1088からは土師器・須恵器等が出土した。このうち図化したものはS K 1015の2層から出土した土師器杯身(28)、土師器羽釜(29)、須恵器杯蓋(30)、須恵器杯身(31・32)である。31の底部の外面には粘土接合痕があり、ヘラ状工具による圧痕が円を描くように押し付けている。



第12図 S K 1015 平面・断面図

表10 奈良～平安時代土坑一覽表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S K 1015	3 B・C	円形	-	-	1.72	V字形	0.37	10YR4/4褐色細粒シルト混粘土 10YR4/1褐色細粒シルト混粘土 (炭化物含む)	土師器・須恵器等
S K 1026	3 B	円形	-	-	1.37	皿形状	0.39	10YR4/4褐色細粒シルト混粘土	なし
S K 1079	3 F	隅丸長方形	1.75	1.2	-	皿形状	0.18	10YR4/4褐色細粒シルト混粘土	土師器
S K 1087	3 F	隅丸長方形 S K 1088を 切る	2.6以上	1.0以上	-	逆台形	0.19	2.5Y3/2黒褐色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器等
S K 1088	3・4 F	隅丸長方形 S K 1087に 切られる	3.73以上	1.4以上	-	逆台形	0.24	10YR4/4褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器等

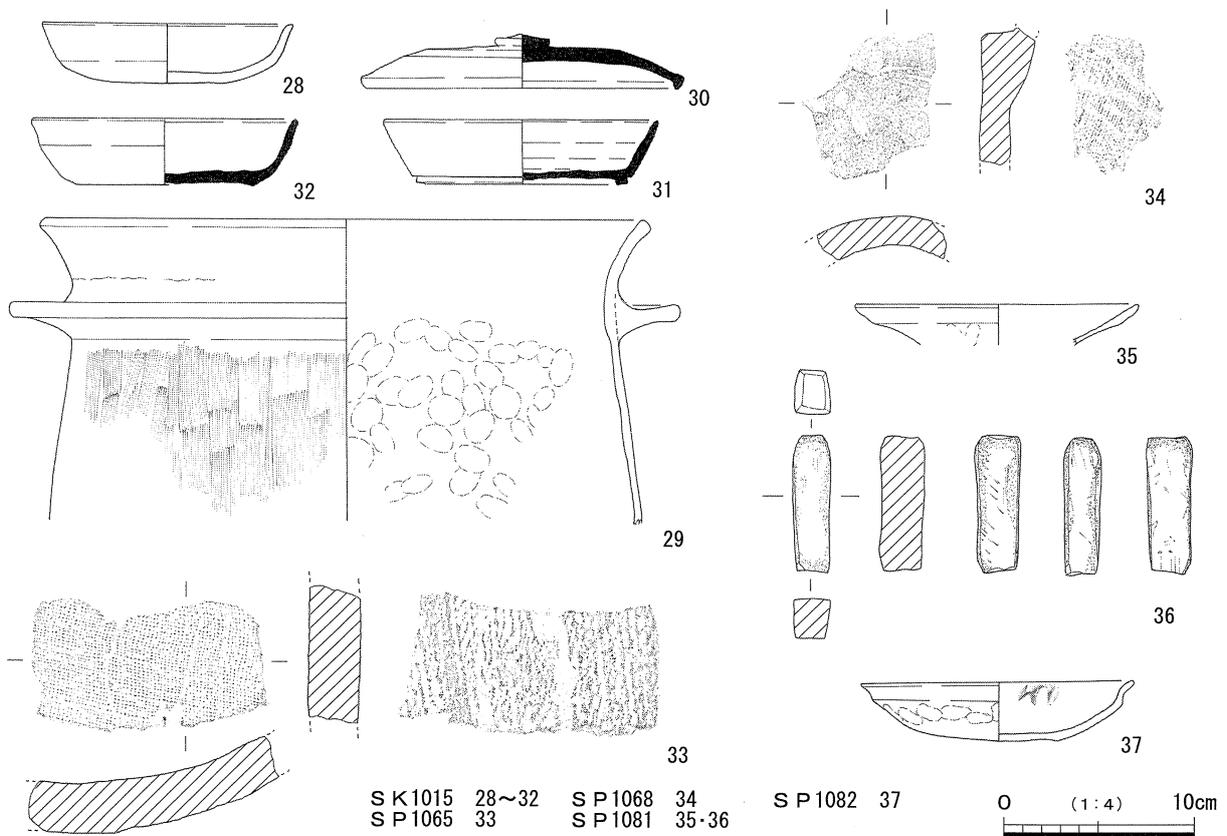
表11 出土遺物観察表(5)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
28 14	S K 1015	土師器 杯身	口径13.0 器高3.15	底部は平らである。口縁部は内湾し、端部はとがり気味に丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内外面はナデ。底部の外面にはユビオサエがある。	5YR7/4にぶい橙	1~2mmの砂粒含む	良好	
29 14	S K 1015	土師器 羽釜	口径36.0	体部は直立する。口縁部は外反し、端部は内側に少し肥厚する面をもつ。鏝は水平につく。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデを施し、ユビオサエがある。外面は縦方向のハケを施す。体部の外面全体には煤が付着。	内面5YR6/4橙 外面5YR6/6橙	1~4mmの砂粒含む	良好	
30 14	S K 1015	須恵器 杯蓋	口径16.0	天井部は平らである。口縁部はつまみだし尖りぎみに丸く終わる。天井部の内面は回転ナデ。外面は回転ケズリを施す。天井部の外面に宝珠形のつまみを付ける。	内面7.5Y6/1灰 外面N6/0灰	1~4mmの砂粒含む	良好	
31 14	S K 1015	須恵器 杯身	口径14.2 器高3.4 底径9.9	底部は平らで、「ハ」の字にひらく高台が貼り付く。口縁部は外反し、端部はとがり気味に丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面は回転ナデを施す。底部の外面には粘土接合痕があり、ヘラ状工具による圧痕が円を描くように押し付けている。	内面N7/0灰 外面N6/0灰	1~3mmの砂粒含む	良好	
32 14	S K 1015	須恵器 杯身	口径13.5 器高3.5 底径9.15	底部は平らである。口縁部は内湾ぎみから少し外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面は回転ナデを施す。底部の外面には粘土接合痕がある。	N5/0灰	1~2mmの砂粒含む	良好	
33	S P 1065	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面10YR7/1灰 白 凸面2.5YR7/2明 赤灰	1~15mmの砂粒含む	良好	
34	S P 1068	丸瓦		凹面は布目が残りに、凸面はナデを施す。	凹面2.5Y7/1灰 白 凸面2.5Y8/1灰 白	1~4mmの砂粒含む	良好	
35	S P 1081	土師器 杯	口径14.6	口縁部は内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面5YR8/3淡橙 外面5YR7/4に ぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	
36 15	S P 1081	砥石		平面および断面の形状は長方形で、磨いた痕跡が4面確認できる。	7.5YR7/1明褐灰			
37 15	S P 1082	土師器 皿	口径14.2 器高2.6	口縁部は内湾ぎみにのびる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。口縁端部には部分的に煤が付着している。	内面7.5YR8/1灰 白 外面2.5YR7/4淡 赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	

S P 1016・1027・1042・1043・1058～1075・1077・1078・1080～1086

小穴は31個検出した。この内S P 1016・1027・1042・1043を除くと、調査地の東部に集中して検出した。平面形状が円形のものと同丸方形のものに分けることができる。なおS P 1081・1083・1085は柱間が1.8～2.0mを測り、建物などの構築物があった可能性が考えられる。

S P 1016・1027・1042・1043・1058・1062・1063・1065・1068・1069・1071～1075・1078・1080～1084からは土師器・須恵器・瓦等が出土した。このうち図化したものは、S P 1065の平瓦(33)、S P 1068の丸瓦(34)、S P 1081の土師器杯(35)、砥石(36)、S P 1082の土師器皿(37)である。33の凹面は布目が残り、凸面は縄目タタキを施す。34の凹面は布目が残り、凸面はナデを施す。35の口縁部は内湾ぎみに上外方にのびる。36は長方形で、磨いた痕跡が4面確認できる。37の口縁部は内湾ぎみにのびるもので、平安時代前期頃に比定できる。



第13図 S K 1015、S P 1065・1068・1081・1082出土遺物実測図

表12 奈良～平安時代 小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S P 1016	2 C	円形	-	-	0.36	V字形	0.11	10YR4/4褐色細粒砂混粘土 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土 N3/0暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S P 1027	4 C	円形	-	-	0.75	逆台形	0.19	10YR4/4褐色細粒シルト混粘土	土師器
S P 1042	3 D	楕円形 S D 1010を切る	0.7	0.54	-	U字形	0.23	10YR4/6褐色細粒砂混粘土 10YR3/4暗褐色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 1043	3 D	不定形	0.51	0.4	-	U字形	0.25	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	須恵器
S P 1058	1 E	円形	-	-	1.12	逆台形	0.15	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1059	1・2 E	円形	-	-	0.7	皿状形	0.16	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1060	1 E	楕円形	0.8	0.6	-	皿状形	0.06	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1061	2 E	楕円形	1.3	1	-	逆台形 (西に段あり)	0.28	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1062	3 E	楕円形	0.9	0.7	-	逆台形	0.12	10YR4/6褐色細粒砂混粘土 10YR3/4暗褐色粗粒砂混粘土	土師器
S P 1063	3 E	円形	-	-	1.13	逆台形	0.16	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 1064	4 E	楕円形	1.4	1	-	逆台形	0.12	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1065	4 E	円形	-	-	0.55	皿状形	0.15	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・瓦
S P 1066	4 E	円形	-	-	0.5	逆台形	0.18	10YR4/6褐色細粒砂混粘土 10YR3/4暗褐色粗粒砂混粘土	なし
S P 1067	4 E・F	楕円形	1.4	1.3	-	皿状形	0.18	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1068	4 F	円形	-	-	0.96	逆台形	0.26	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・瓦
S P 1069	1 E	円形	-	-	0.42	皿状形	0.06	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1070	1 E	円形	-	-	0.45	皿状形	0.16	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1071	1 E	円形	-	-	0.75	皿状形	0.15	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1072	1 F	円形	-	-	0.62	皿状形	0.09	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1073	1 F	円形 S K 174に切られる	-	-	1	皿状形	0.11	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1074	1 F	円形 S K 173を切る	-	-	0.55	皿状形	0.07	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	須恵器
S P 1075	1 F	円形	-	-	0.63	皿状形	0.12	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 1077	2・3 F	楕円形	1.1	0.96	-	逆台形	0.28	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S P 1078	3 F	円形	-	-	0.44	逆台形	0.16	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 1080	3 F	円形	-	-	0.35	逆台形	0.14	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・黒色土器
S P 1081	3 F	円形	-	-	0.4	逆台形	0.21	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1082	3 F	円形	-	-	0.48	皿状形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 1083	3 F	円形	-	-	0.5	逆台形	0.21	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1084	3 F	円形	-	-	0.72	逆台形	0.18	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器
S P 1085	3 F	円形	-	-	0.67	逆台形	0.27	10YR4/6褐色細粒砂混粘土 10YR3/4暗褐色粗粒砂混粘土	なし
S P 1086	3 F	円形	-	-	0.47	逆台形	0.19	10YR4/6褐色細粒砂混粘土 10YR3/4暗褐色粗粒砂混粘土	なし

## 平安時代前期

## S E 1053

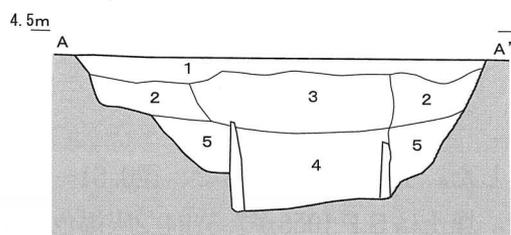
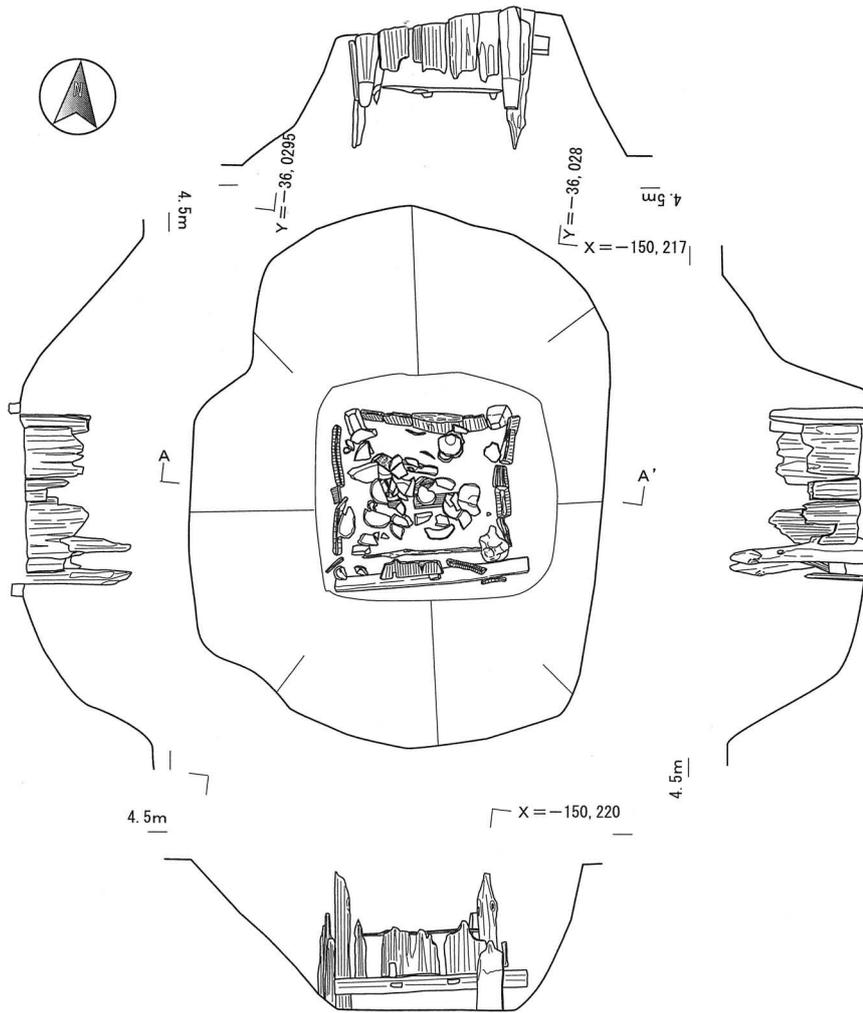
S E 1053は3 D区で検出した井戸である。中央に木製の枠を正方形に組んで井戸枠として設置していた。掘形の平面形状は南北方向に長い隅丸の長方形で、長径2.95m、短径2.15mを測る。掘形の断面は二段掘りの逆台形を呈し、深さ0.8mを測る。廃絶後の埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土、7.5YR4/1褐灰色粗粒砂混粘土(5Y2/1黒色粘土のブロック含む)、10YR2/1黒色粗粒砂混粘土、枠内の埋土はN3/0暗灰色細粒シルト質粘土、掘形の埋土は2.5Y3/1黒褐色細礫混粘土で、土師器、須恵器等が出土した。このうち掲載したものは38～83(廃絶後埋土53、58、73、76、78、79、掘形埋土64、枠内上部38、39、40、42、45、46、47、50、51、52、55、57、59、61、62、63、65、66、69、70、71、72、77、81、枠内下部43、44、48、54、56、60、74、75、83、枠内最下部41、49、67、68、80、82)である。

38・39は土師器皿で、38の底部は平らである。39の底部は凹凸があるがほぼ平らである。40～56は土師器碗である。40～51は平らな底部であるが、41、47は上げ底である。48の外面には墨が部分的に付着している。また49の底部の外面には墨書がある。文字を書いていると思われるが、欠損しており、文字の判読は不可能であった。52～56は断面形が三角形の高台が貼り付く。57～62は土師器甕で、口縁部は短く外反する。最大径は体部の中位にある。63は土師器羽釜で、水平に伸びる鐙が付く。64は土師器製塩土器で、体部の器壁は薄く仕上げられており、外面にはタタキを施す。65は黒色土器碗で、内面に炭素が吸着して黒い。見込みに平行線の暗文を施す。66・67は須恵器壺で、67は突出する平底である。68は緑釉陶器碗である。高台が付く底部で、内外面に緑釉を塗っている。69～75は平瓦。76～79は丸瓦。80・81は用途不明の石である。部分的に煤が付着している。82は銅鏡の破片である。平縁の鏡で内区は欠損している。83は用途不明の木製品で、端部を加工していることから、何らかの部材である可能性が考えられる。

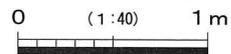
また、方形に組んだ井戸枠も取上げ、主な木枠については図化した。このうち掲載したものは84～103である。84～96は板材である。97は部分的にはほぞ穴がある柱材である。98～103は杭である。この内99～102は枠の隅に打ち込み、立ったままの状態を検出した。出土した遺物は、長原遺跡における平安時代の土器編年(佐藤1992)の平安時代Ⅱ期中に相当し、9世紀後葉～10世紀初頭のものと考えられる。

## S P 1055・1057

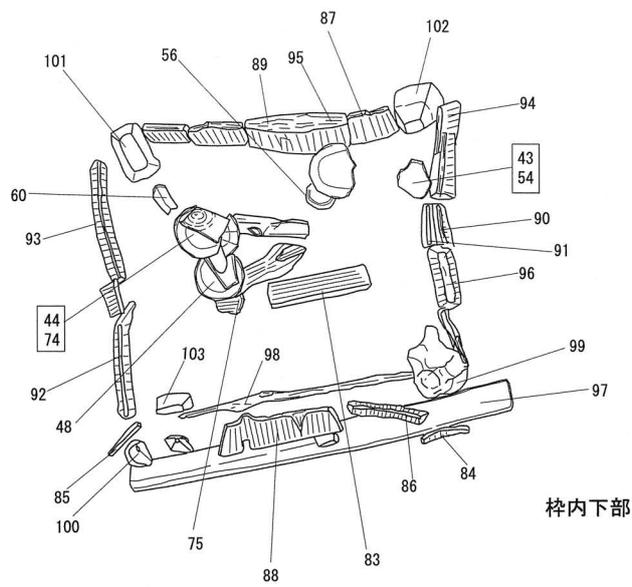
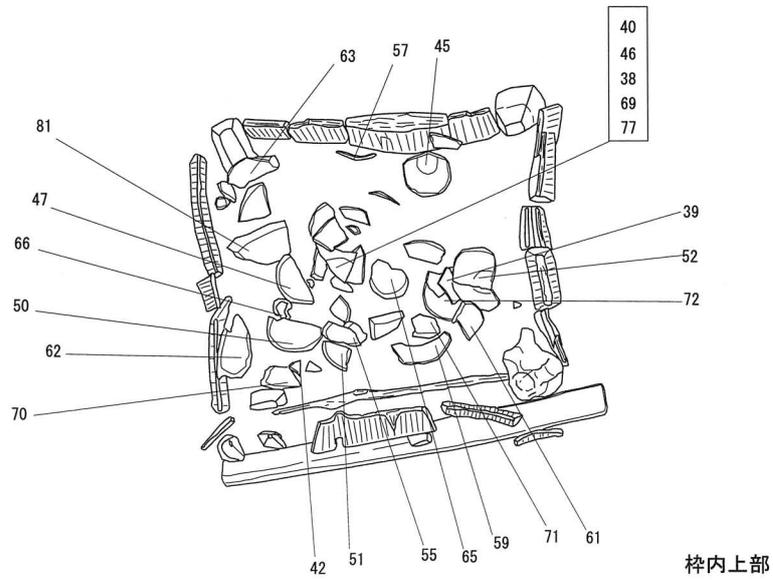
S P 1055・1057は4 D地区で検出した。平面形状は円形で、径0.51～0.66mを測る。断面形状は逆台形で深さ0.11～0.17mを測る。埋土はS P 1055が7.5YR4/2灰褐色細粒シルト混粘土、S P 1057が上から7.5YR4/2灰褐色細粒シルト混粘土、10YR4/2灰黄褐色粗粒シルト混粘土で、S P 1055からは土師器・須恵器、S P 1057からは土師器の破片が出土したが、図化できる遺物はなかった。



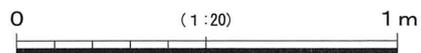
- 1 : N3/0暗灰色細粒砂混粘土 廃絶後埋土
- 2 : 7.5YR4/1褐色粗粒砂混粘土 廃絶後埋土  
(5Y2/1黒色粘土のブロック含む)
- 3 : 10YR2/1黒色粗粒砂混粘土 廃絶後埋土
- 4 : N3/0暗灰色細粒シルト質粘土 柱内埋土
- 5 : 2.5Y3/1黒褐色細礫混粘土 掘形埋土



第14図 SE 1053平面・断面・見通し図



平面図の数字は  
掲載遺物実測図番号



第15図 SE1053梓内遺物出土状況平面図

表13 出土遺物観察表(6)

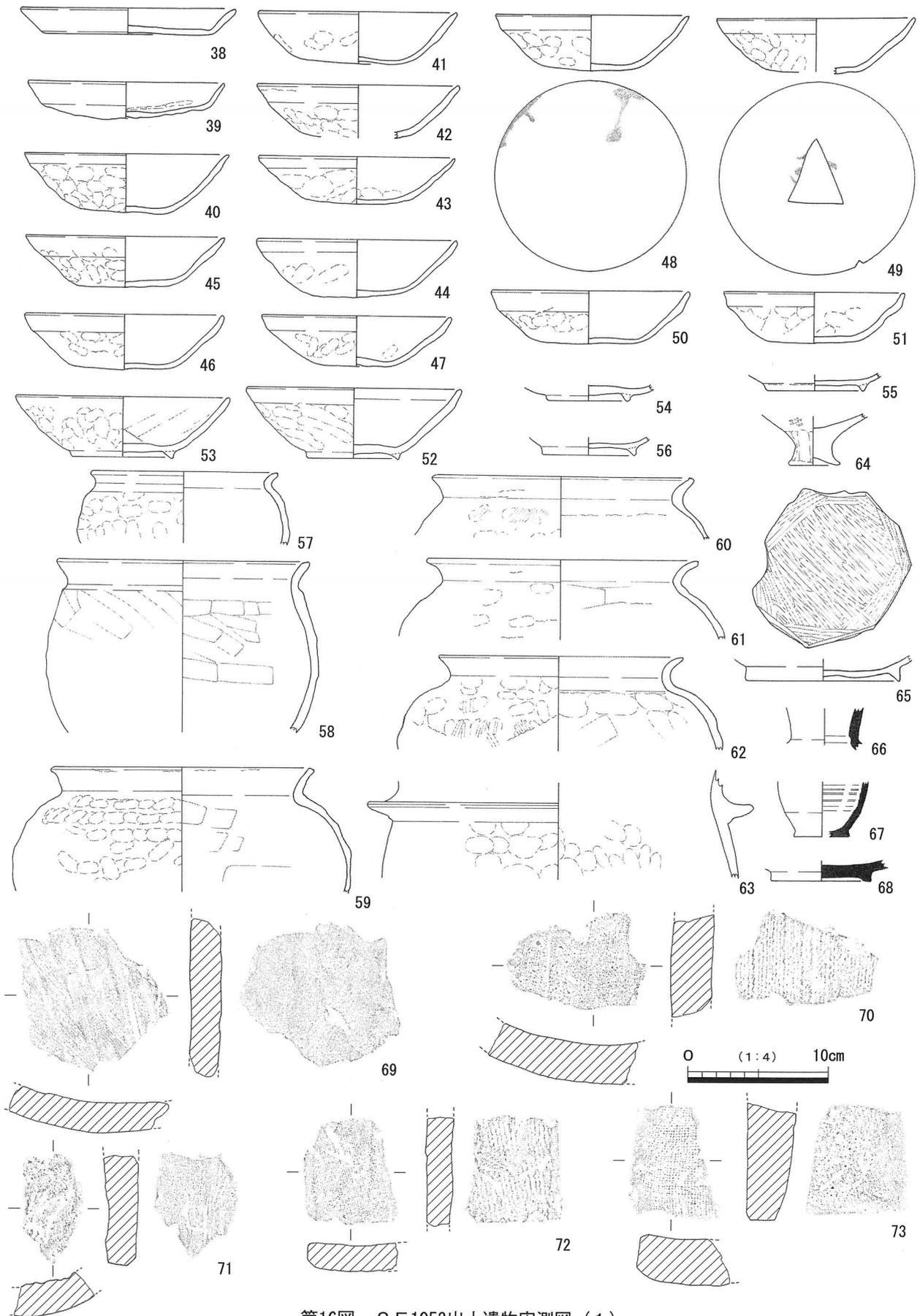
遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
38	S E 1053	土師器 皿	口径15.2 器高1.9	口縁部は平らな底部から屈曲して上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はナデ、外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR7/4淡赤橙 外面2.5YR7/3淡赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.6
39 15	S E 1053	土師器 皿	口径14 器高2.7	口縁部は平らな底部から屈曲して上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	内面5YR7/2明褐灰 外面5YR7/3にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.18
40 15	S E 1053	土師器 椀	口径14.6 器高4.2	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面5YR7/6橙 外面5YR7/4にぶい橙	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.6
41 15	S E 1053	土師器 椀	口径13.8 器高3.8	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	10YR8/1灰白	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内最下部
42	S E 1053	土師器 椀	口径14.2	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁端部は上方につまみ出だす。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	2.5YR6/3にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.11
43	S E 1053	土師器 椀	口径13.8 器高3.4	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	内面10R6/3にぶい赤橙 外面10R5/4赤褐	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内下部 No.1
44 15	S E 1053	土師器 椀	口径14 器高4.2	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	10YR8/1灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内下部 No.5
45 15	S E 1053	土師器 椀	口径14.3 器高3.7	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR7/6橙 外面2.5YR7/4橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.1
46	S E 1053	土師器 椀	口径14 器高4	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。端部は上方につまみ出だす。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR7/4にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.6
47	S E 1053	土師器 椀	口径13.2 器高3.65	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。端部は上方につまみ出だす。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR6/2灰赤 外面2.5YR6/4にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.7
48 16	S E 1053	土師器 椀	口径13.6 器高4	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。外面に墨が部分的に付く。	内面10YR8/1灰白 外面5YR8/1灰白	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内下部 No.6
49 16	S E 1053	土師器 椀	口径14.2 器高4	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。外面底部に墨書あり。	10YR8/1灰白	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内最下部
50	S E 1053	土師器 椀	口径14 器高3.8	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。端部は上方につまみ出だす。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面5YR7/4にぶい橙 外面10R6/6赤橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.9
51	S E 1053	土師器 椀	口径12.8 器高3.6	口縁部は平らな底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。端部は上方につまみ出だす。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内外面はナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR6/6橙 外面2.5YR6/4にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.10
52 16	S E 1053	土師器 椀	口径15 器高5.1 高台径6.1	平らな底部で、断面台形の逆三角形の高台が貼り付く。口縁部は底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁端部は丸く終わる。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	内面2.5YR6/2灰赤 外面2.5YR6/3にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.17
53	S E 1053	土師器 椀	口径15.2 器高4.35 高台径7	平らな底部で、断面台形の逆三角形の高台が貼り付く。口縁部は底部から屈曲して内湾ぎみに上外方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ。外面はナデ。ユビオサエが見られる。	内面10R6/4にぶい赤橙 外面10R6/6赤橙	1mm程度の砂粒含む	良好	廃絶後埋土内
54	S E 1053	土師器 椀	高台径7.2	平らな底部。断面台形の逆三角形の高台が貼り付く。体部の内外面はナデを施す。	内面2.5YR7/2明赤灰 外面2.5YR7/1明赤灰	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内下部 No.1
55	S E 1053	土師器 椀	高台径7.4	平らな底部。断面台形の高台が貼り付く。体部の内外面はナデを施す。底部の内面にはユビオサエが見られる。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR6/3にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.10

表14 出土遺物観察表(7)

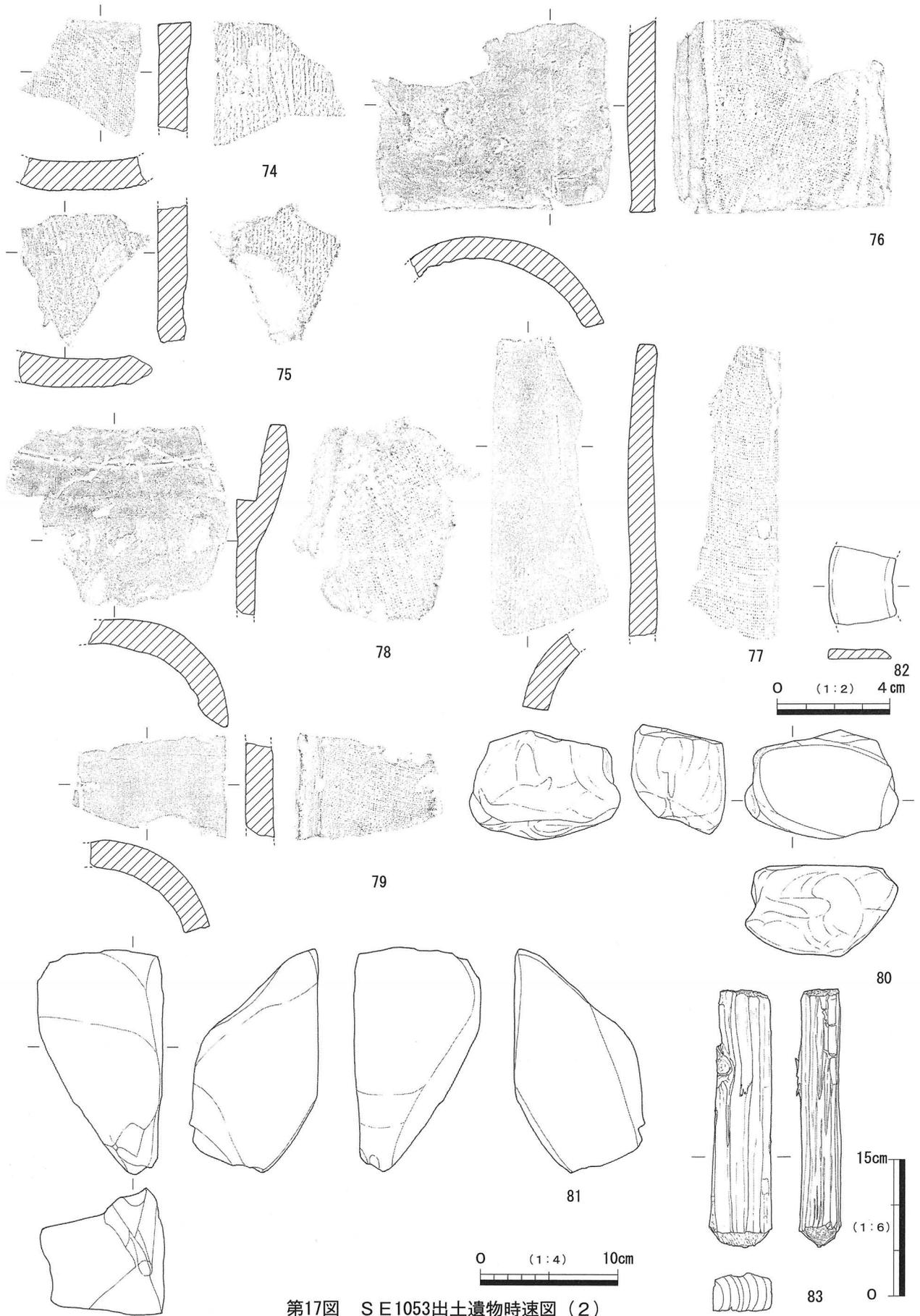
遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
56	S E 1053	土師器 椀	高台径6.4	平らな底部。断面台形の逆三角形の高台が貼り付く。体部の内外面はナデを施す。	内面10R6/3にぶい赤橙 外面10R7/1明赤灰	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内下部 No.3
57	S E 1053	土師器 甕	口径13.2	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面ナデを施し、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR6/4にぶい橙 外面2.5YR6/3にぶい橙	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.2
58	S E 1053	土師器 甕	口径17.8	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はナデであり、ユビオサエが見られる。	内面10R6/2灰赤 外面10R6/3にぶい赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	廃絶後埋 土内
59 16	S E 1053	土師器 甕	口径18	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はナデであり、ユビオサエが見られる。	内面2.5YR7/4淡赤橙 外面2.5YR7/3淡赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.22
60	S E 1053	土師器 甕	口径18	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部は上方につまみ出し面をもつ。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内はナデ、外面は右上がりのハケのちユビナデを施す。	7.5R7/1明赤灰	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内下部 No.4
61	S E 1053	土師器 甕	口径19.2	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はユビナデを施す。	内面2.5YR7/3淡赤橙 外面2.5YR6/3にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.20
62	S E 1053	土師器 甕	口径17.3	口縁部は丸い体部から屈曲し短く外反する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部の内面はナデを施しヘラ状工具による工具痕がある。外面はユビナデを施す。	内面10R6/2灰赤 外面10R6/3にぶい赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.13
63	S E 1053	土師器 羽釜	鐔径27.4	口縁部は外反する。鐔は下方外に短く伸びる。体部の内外面はナデを施し、外面にユビオサエが見られる。	7.5YR7/4にぶい橙	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.3
64	S E 1053	土師器 製塩土器	底径3.3	底部は「ハ」の字にひらく。体部の内面はナデ、外面は右上がりのタタキを施す。底部は内外面ともにユビナデを施す。	内面5YR3/1黒褐 外面5YR8/1灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	掘形
65 16	S E 1053	黒色土器 椀	高台径10.8	底部は平らである。高台は断面台形の逆三角形の粘土紐を貼り付ける。見込みには平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデを施す。	内面2.5YR1.7/1赤黒 外面2.5YR6/3にぶい橙	1~2mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.14
66	S E 1053	須恵器 壺	頸部径2.7	口縁部は体部から屈曲し直線的に外上方に伸びる。口縁部および体部の内外面は回転ナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内上部 No.8
67	S E 1053	須恵器 壺	底径3.8	底部は突出する平らな底である。体部の内外面は回転ナデを施し、底面には糸切りの痕跡がある。	内面5PB4/1暗青灰 外面5B4/1暗青灰	1mm程度の砂粒含む	良好	枠内最下部
68 16	S E 1053	緑釉陶器 碗	底径7.1	平らな底部で、断面逆台形の高台が貼り付く。内外面に緑の釉をかける。	5GY8/1灰白	1mm以下の砂粒含む	良好	枠内最下部
69	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面はナデを施す。	凹面N4/0灰 凸面N5/0灰	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.6
70	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面5YR7/2明褐灰 凸面5YR7/3にぶい橙	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.12
71	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面はナデを施す。	凹面2.5YR6/2灰赤 凸面2.5YR7/4淡赤橙	1~10mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.21
72	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面5YR8/3淡橙 凸面5YR5/1褐灰	1~10mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.19
73	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面2.5YR7/4淡赤橙 凸面2.5YR7/3淡赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	廃絶後埋 土内
74 17	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面10YR3/1黒褐 凸面10YR6/1褐灰	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内下部 No.5
75	S E 1053	平瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施す。	凹面10YR6/1褐灰 凸面10YR7/1灰白	1~3mmの砂粒含む	良好	枠内下部 No.7
76 17	S E 1053	丸瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施したのちナデ消す。	凹面7.5YR7/3にぶい橙 凸面10YR7/1灰白	1~4mmの砂粒含む	良好	廃絶後埋 土内
77	S E 1053	丸瓦		凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施したのちナデ消す。	凹面7.5YR6/1褐灰 凸面N6/0灰	1~5mmの砂粒含む	良好	枠内上部 No.6
78 17	S E 1053	丸瓦		玉縁部の凹面はナデ。玉縁部と筒部の凹面は布目が残りに、凸面は縄目タタキを施したのちナデ消す。	凹面10YR5/1褐灰 凸面10YR6/1褐灰	1~3mmの砂粒含む	良好	廃絶後埋 土内
79	S E 1053	丸瓦		凹面は布目が残りに、凸面はナデを施す。	N6/0灰	1~3mmの砂粒含む	良好	廃絶後埋 土内

表15 出土遺物観察表(8)

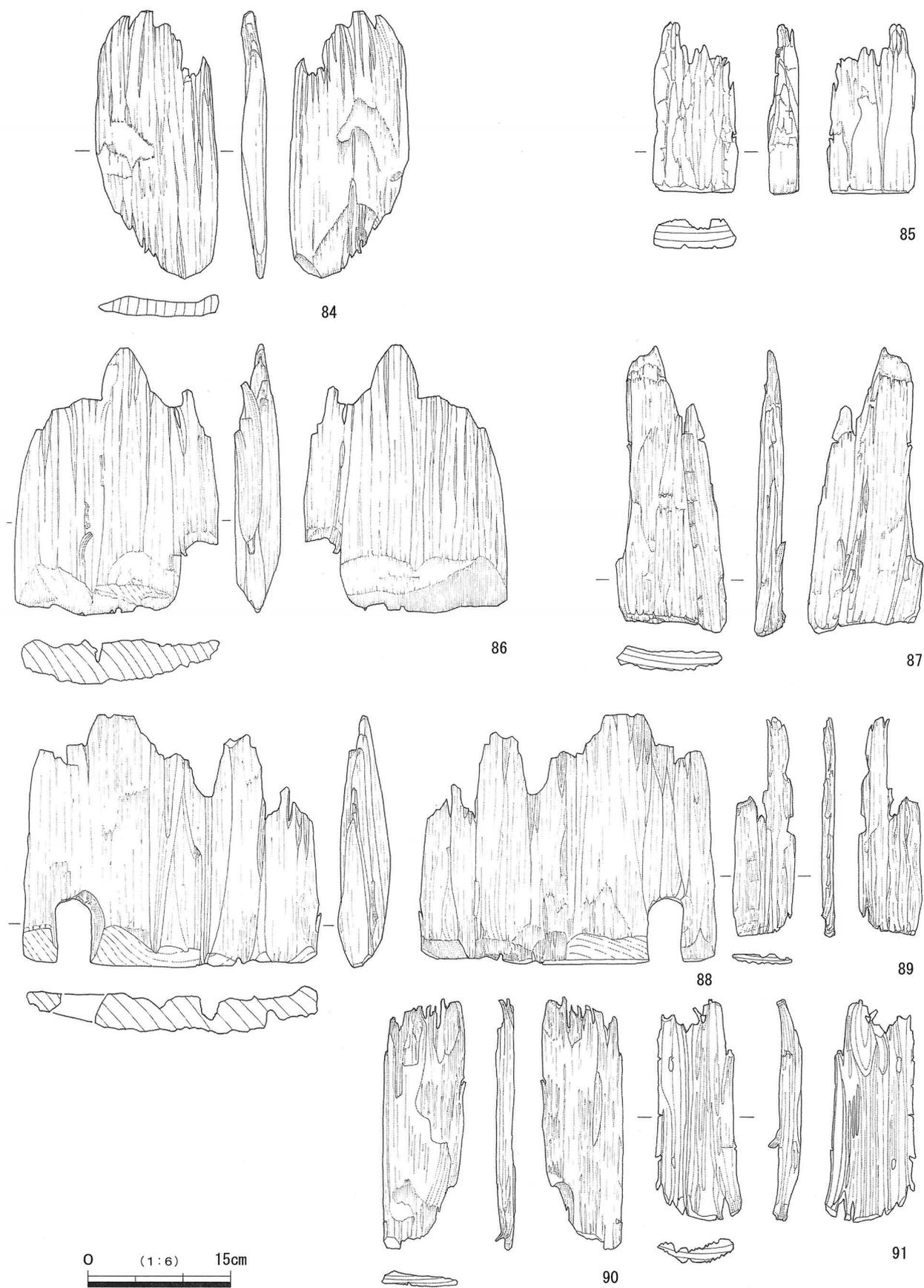
遺物番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
80	S E 1053	用途不明 石		平らな面が3面ある。部分的に焼けており煤が付着している。	-	-	-	粹内最下部
81	S E 1053	用途不明 石		平らな面が6面ある。部分的に煤が付着している。	-	-	-	粹内上部 No.5
82 17	S E 1053	銅製品 鏡	面幅2.0 残存厚0.4	円形の鏡で、縁は平らな面を形成する。	-	-	-	粹内最下部
83 17	S E 1053	棒状木製 品	長さ28.2 幅6.6 厚さ4.3	平面形は棒状で、断面形は長方形である。端部は尖らせ、4つの面を形成し、もう一方の端部は平らな面を形成する。	-	-	-	粹内下部 No.10
84	S E 1053	木製品 板材	長さ28.0 幅12.5 厚さ2.6	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は長方形である。	-	-	-	井戸枠
85	S E 1053	木製品 板材	長さ 幅 厚さ	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形はやや太い長方形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
86	S E 1053	木製品 板材	長さ28.5 幅21.3 厚さ4.8	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は弧を描く形状である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
87	S E 1053	木製品 板材	長さ31.1 幅11.5 厚さ2.3	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は長方形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
88 18	S E 1053	木製品 板材	長さ26.7 幅30.8 厚さ3.8	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は長方形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
89	S E 1053	木製品 板材	長さ23.6 幅6.3 厚さ1.1	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は長方形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
90	S E 1053	木製品 板材	長さ27.1 幅8.6 厚さ1.5	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は三角形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
91	S E 1053	木製品 板材	長さ23.5 幅8.6 厚さ2.0	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は弧を描く形状である。	-	-	-	井戸枠
92	S E 1053	木製品 板材	長さ43.7 幅31.3 厚さ6.2	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は弧を描く形状である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
93 18	S E 1053	木製品 板材	長さ37.2 幅32.4 厚さ6.4	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は台形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
94	S E 1053	木製品 板材	長さ28.4 幅34.6 厚さ3.1	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は弧を描く形状である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
95	S E 1053	木製品 板材	長さ36.1 幅21.6 厚さ3.6	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は弧を描く形状である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
96	S E 1053	木製品 板材	長さ29.2 幅11.5 厚さ3.9	平面形は板状で、表裏は平らな面を形成する。断面形は長方形である。端部は切り取られ平らな面が残る。	-	-	-	井戸枠
97 18	S E 1053	木製品 柱材	長さ98.7 幅8.4 厚さ6.5	平面形は柱状である。断面形は長方形である。中央にはぞ穴が3箇所開いている。	-	-	-	井戸枠
98	S E 1053	木製品 杭	長さ55.7 幅5.0 厚さ2.1	平面形は棒状で、削り込んでいる部分がある。断面形は円形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠
99 18	S E 1053	木製品 杭	長さ85.5 幅14.9 厚さ9.5	平面形は棒状で、削り込んでいる部分がある。断面形は長方形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠
100 18	S E 1053	木製品 杭	長さ88.2 幅8.1 厚さ7.1	平面形は棒状である。断面形は長方形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠
101 18	S E 1053	木製品 杭	長さ68.7 幅10.0 厚さ5.7	平面形は板状である。断面形は長方形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠
102 18	S E 1053	木製品 杭	長さ64.6 幅11.3 厚さ6.9	平面形は板状である。断面形は長方形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠
103	S E 1053	木製品 杭	長さ69.7 幅15.6 厚さ8.9	平面形は板状である。断面形は長方形である。先端は削り尖る。	-	-	-	井戸枠



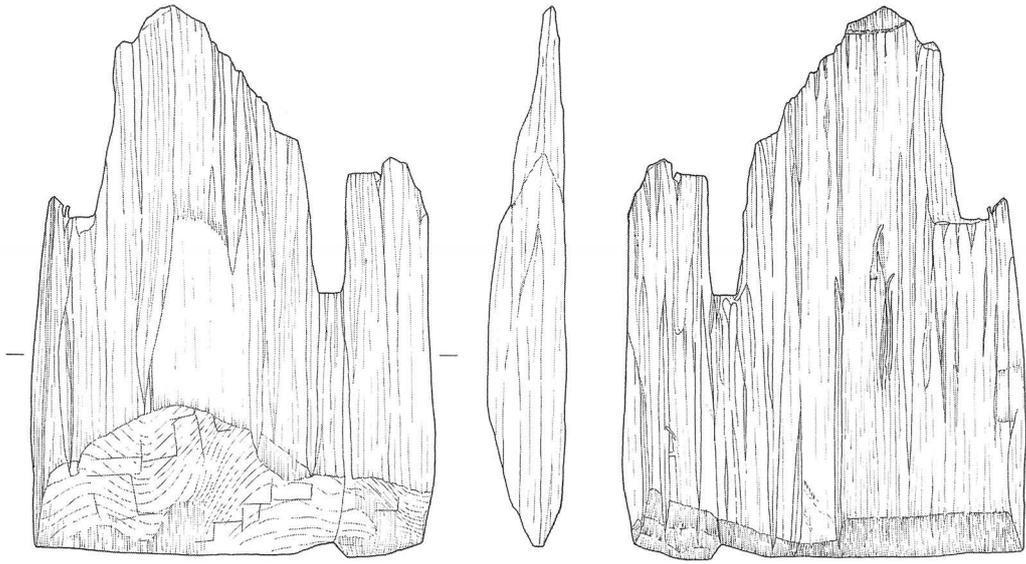
第16図 S E1053出土遺物実測図(1)



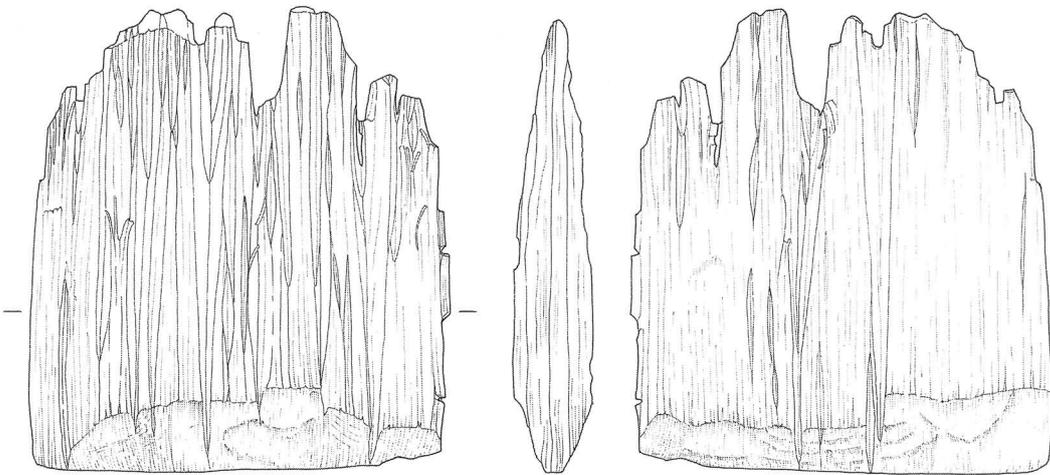
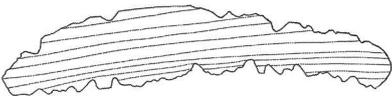
第17図 SE1053出土遺物時速図(2)



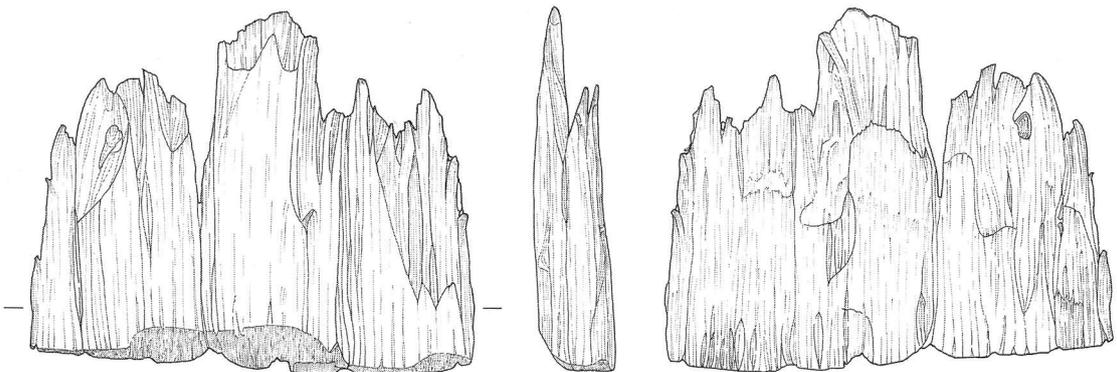
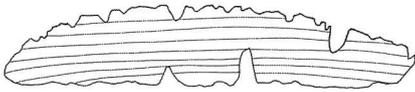
第18図 SE1053出土遺物実測図(3)



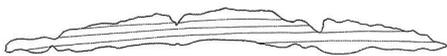
92



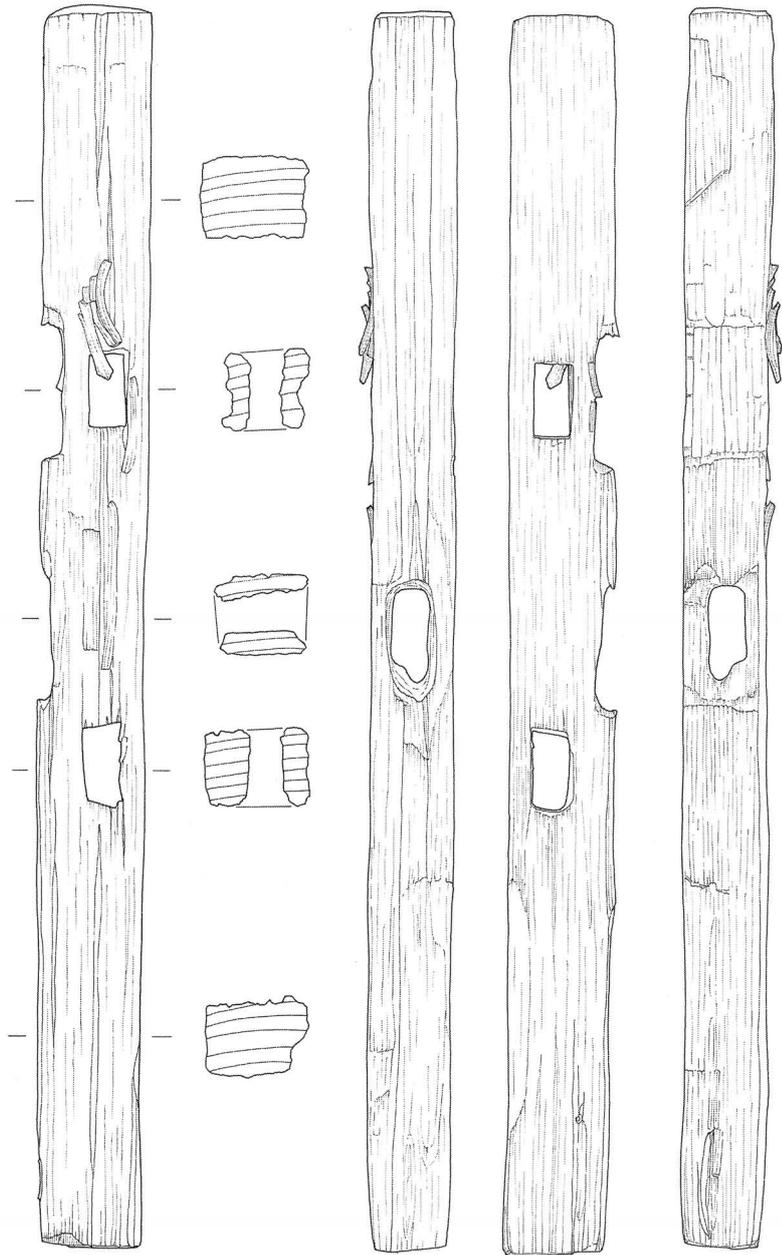
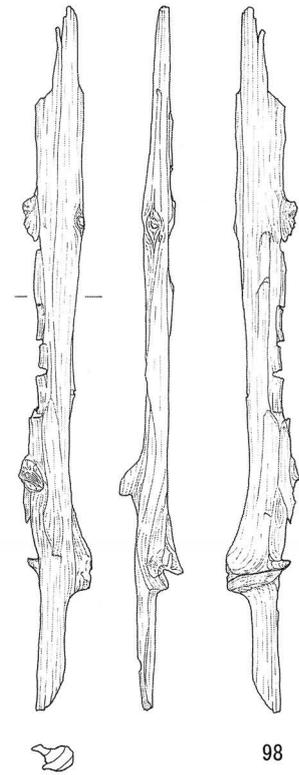
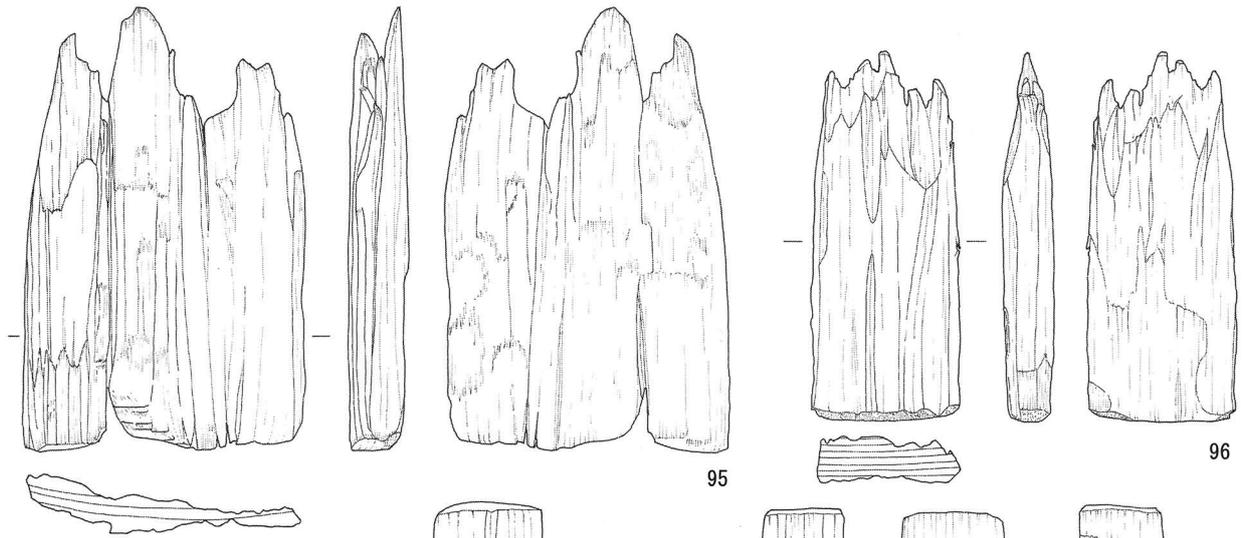
93



94



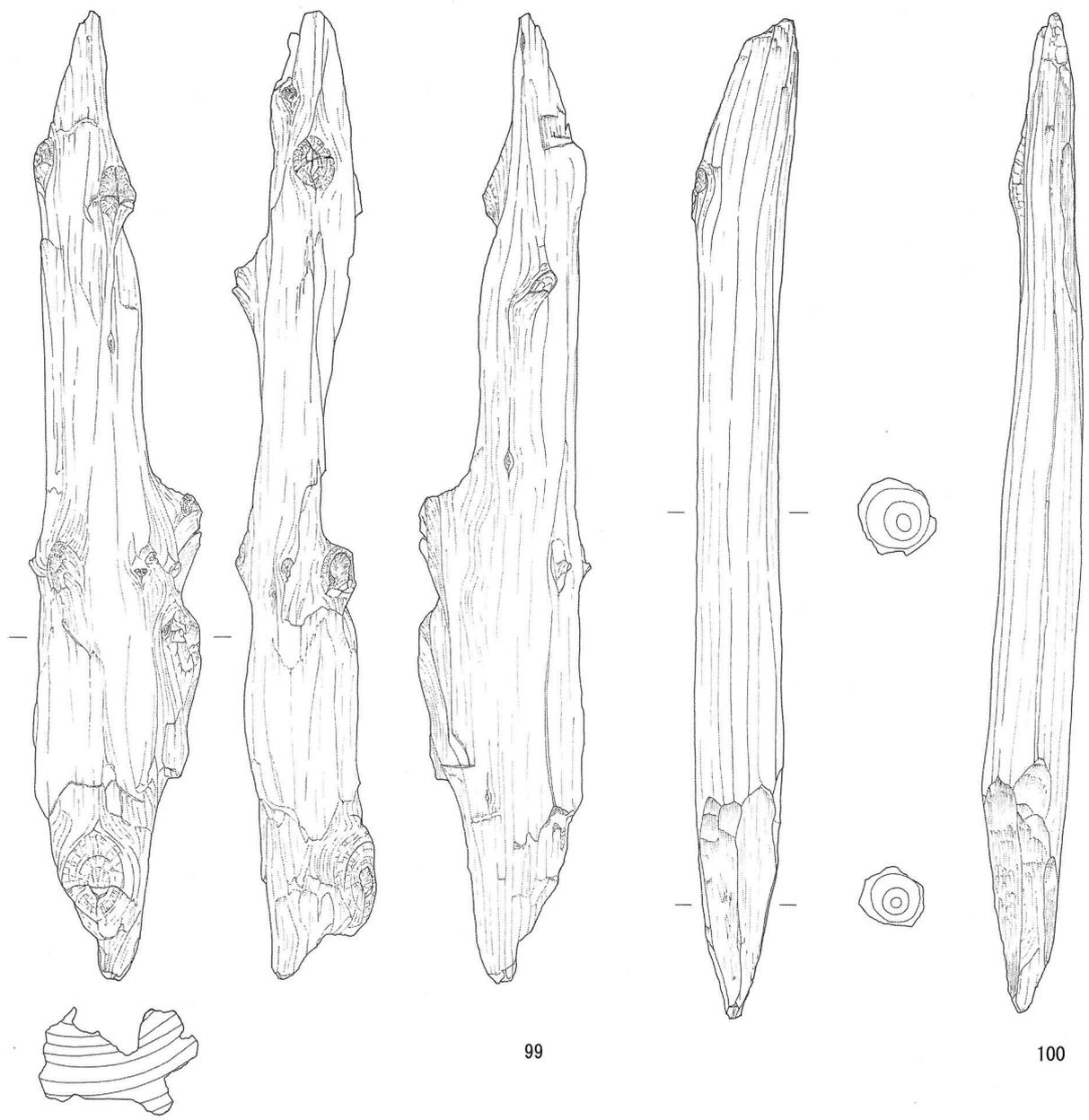
第19図 S E1053出土遺物実測図(4)



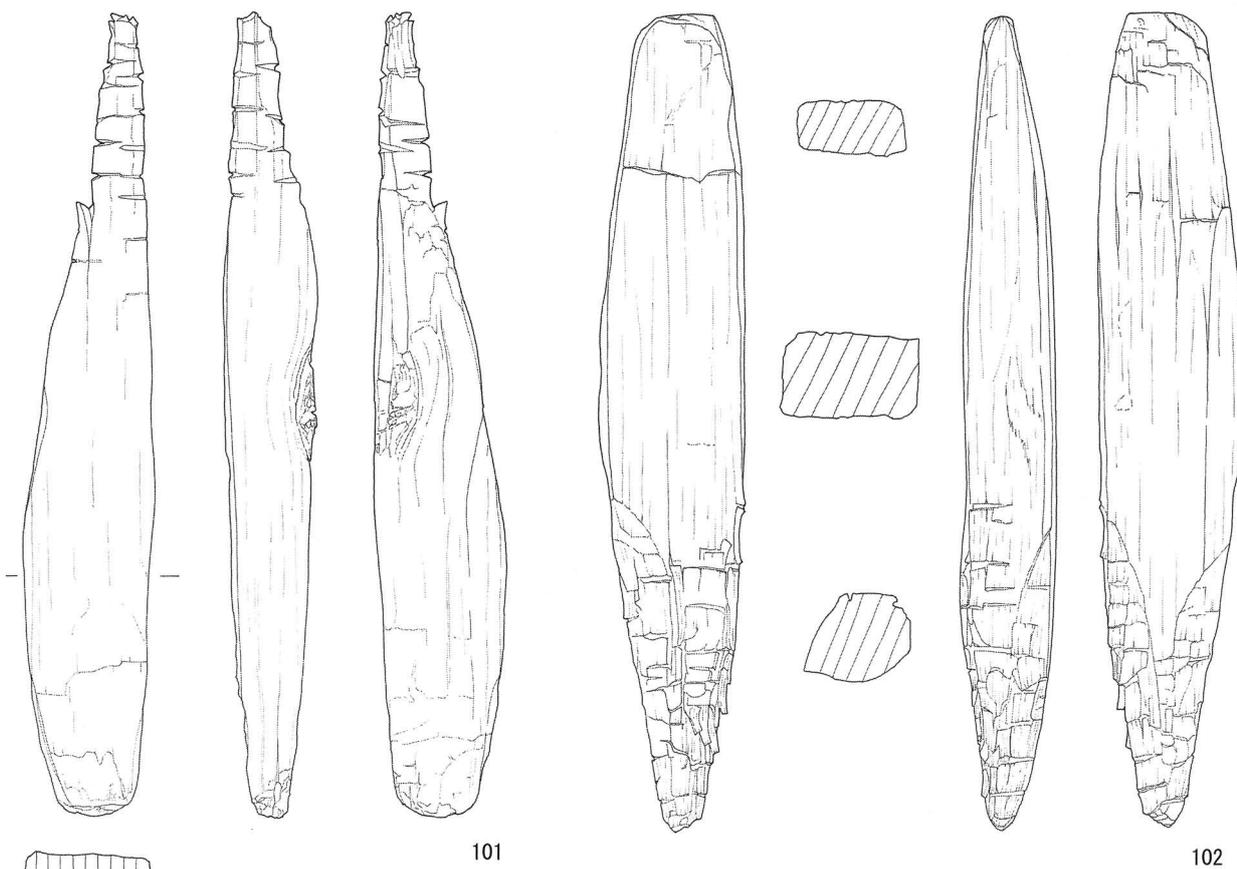
0 (1:6) 15cm

第20図 S E1053出土遺物実測図(5)

97



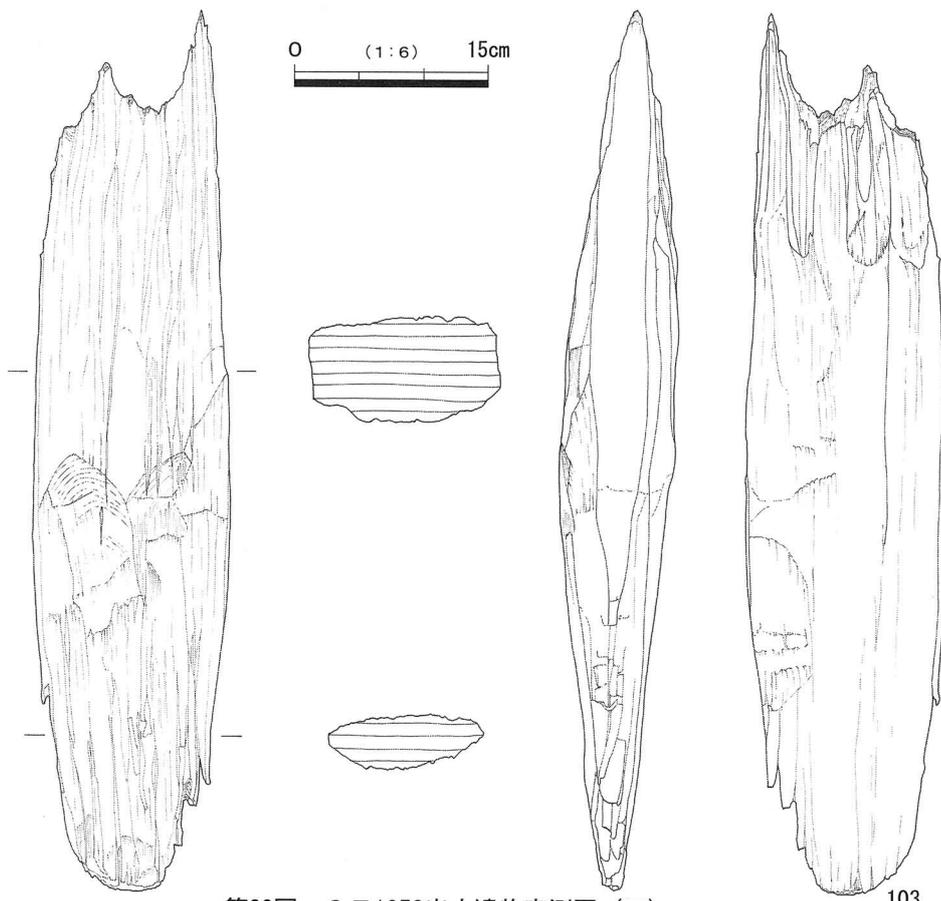
第21図 S E 1053出土遺物実測図(6)



101

102

0 (1:6) 15cm



103

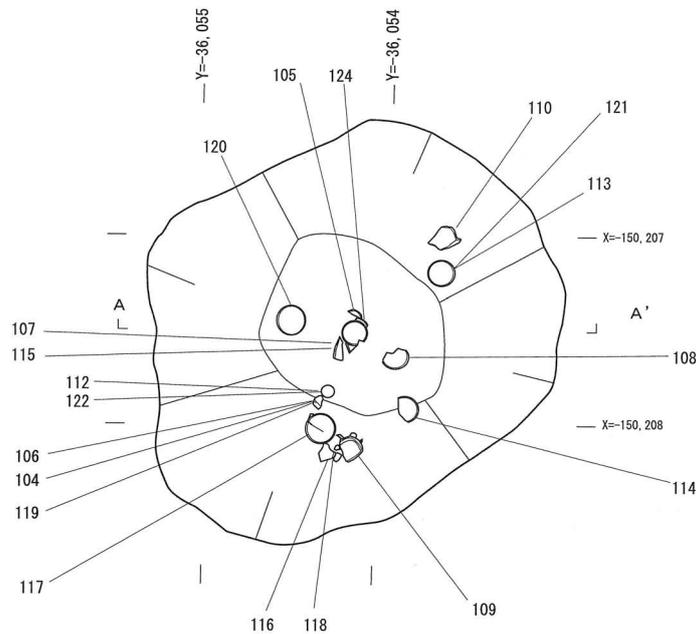
第22図 SE1053出土遺物実測図(7)

平安時代後期～鎌倉時代

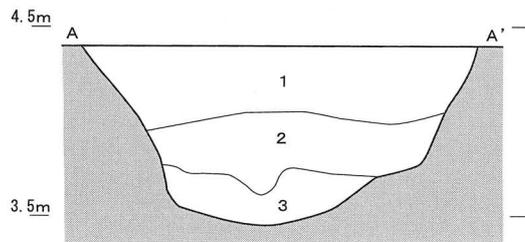
SE1033

SE1033は2C・D地区で検出した素掘りの井戸である。平面形状は南北方向に長い楕円形で、SK1034、SD1010を切る。長径は2.1m、短径は2.05mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.95mを測る。埋土は上から10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土、5B2/1青黒色粗粒砂混粘土、10Y2/1黒色粘土で、瓦器椀の完形が数点出土した他、土師器や瓦の破片等が出土した。このうち掲載したものは104～128である。

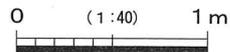
104～107は土師器小皿で、108・109は土師器中皿である。110は土師器羽釜である。111は土錘である。112～121は瓦器椀である。見込みには平行線や螺旋状の暗文を施す。122は瓦器小皿で、見込みに螺旋状の暗文を施す。123は瓦器羽釜である。124は偏行唐草文軒平瓦で、割れており全体の形状は不明であるが、瓦当面には中央に唐草文、外側に鋸歯文を配す。125～127は平瓦である。128は青磁碗である。同遺構の廃絶時期は、出土した瓦器椀から13世紀中頃に比定できる。



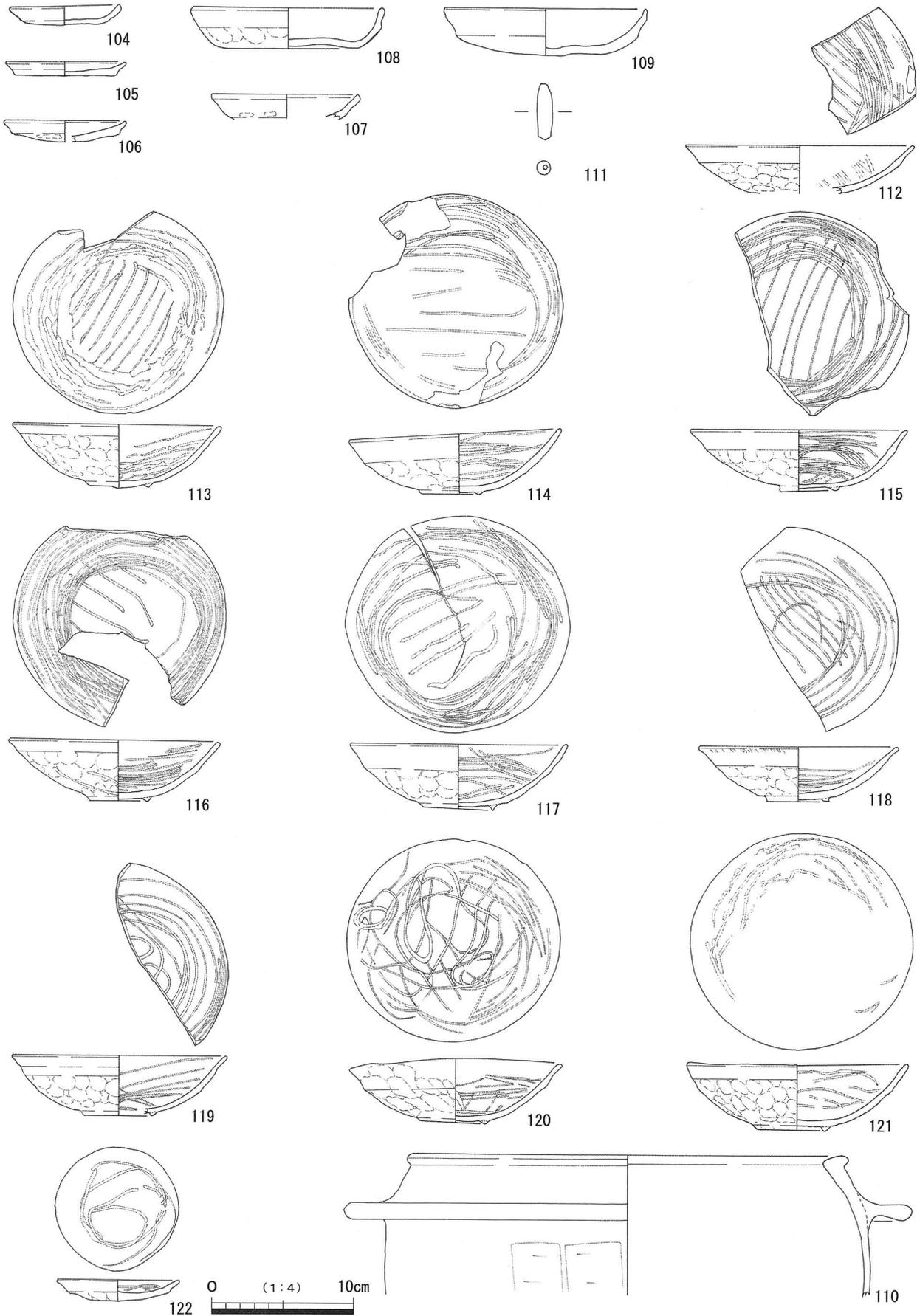
平面図の数字は  
掲載遺物実測図番号



- 1 : 10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土
- 2 : 5B2/1青黒色粗粒砂混粘土
- 3 : 10Y2/1黒色粘土



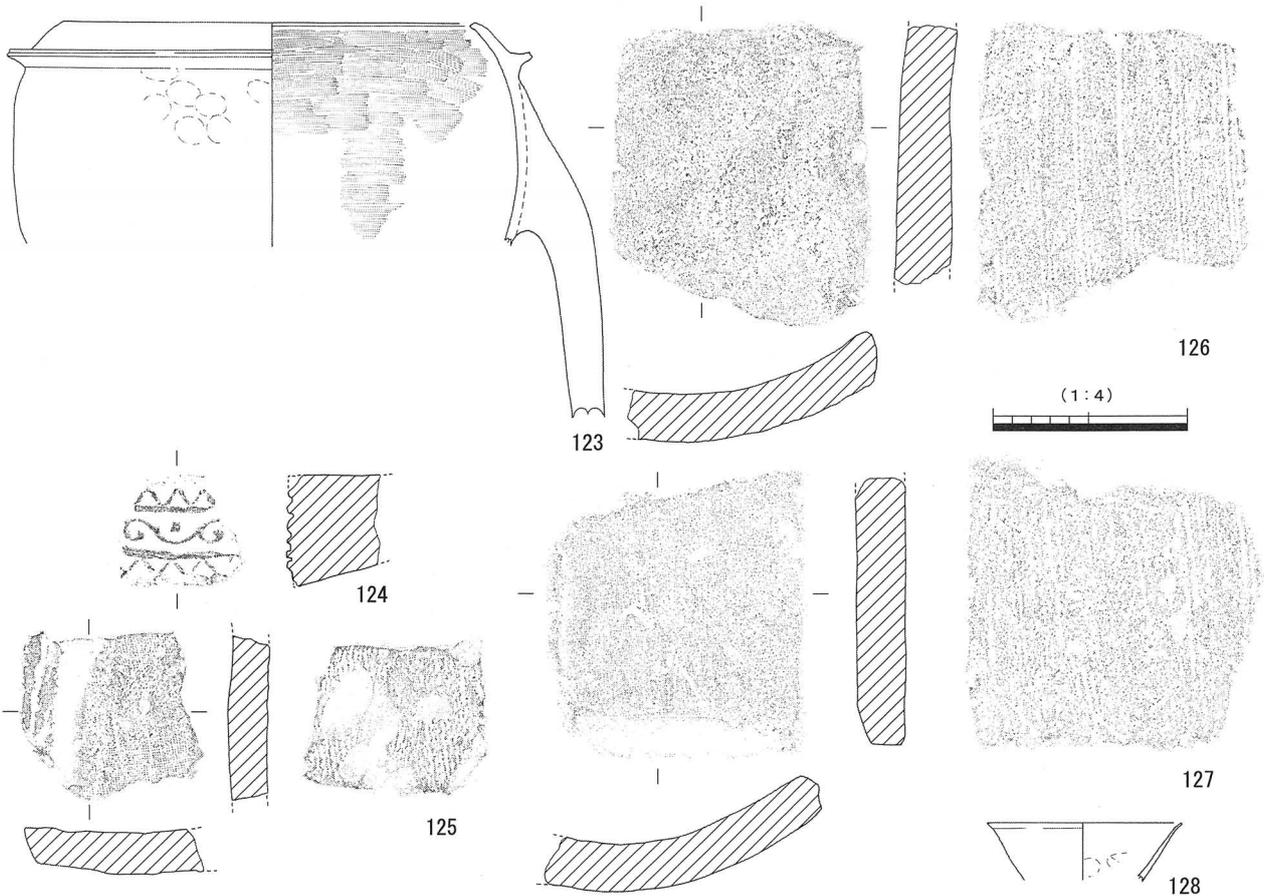
第23図 SE1033平面・断面図



第24図 SE1033出土遺物実測図(1)

表16 出土遺物観察表(9)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
104	S E 1033	土師器 小皿	口径9.6 器高1.4	口縁部は外反する。端部は内側へつまみ出し丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はユビナデを施す。	2.5YR6/3にぶい 橙	1mm程度の 砂粒含む	良好	
105	S E 1033	土師器 小皿	口径8.4 器高1.0	口縁部は外反する。端部はつまみ上げ丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面ユビナデを施す。	2.5GY7/1明 オ リーブ灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
106	S E 1033	土師器 小皿	口径8.6	口縁部は外反する。端部は内側へつまみ出し丸く終わる。口縁と体部の間は屈曲し稜がある。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はユビナデを施す。	2.5Y7/2灰黄	1mm程度の 砂粒含む	良好	
107	S E 1033	土師器 小皿	口径10.0	口縁部を外反させた後、端部を丸めて玉縁状にする。所謂「て」字状口縁である。口縁部の内外面はヨコナデを施し、外面にはユビオサエが見られる。	7.5YR6/2灰褐	1mm程度の 砂粒含む	良好	
108	S E 1033	土師器 中皿	口径13.2 器高2.9	口縁部は外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はナデを施す。	2.5Y7/2灰黄	1~3mmの砂 粒含む	良好	
109	S E 1033	土師器 中皿	口径14.0 器高3.3	口縁部は外反する。端部は上部につまみ出し尖り気味に丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はユビナデを施す。	2.5YR5/1赤灰	1~2mmの砂 粒含む	良好	
110	S E 1033	土師器 羽釜	口径30.0 器高10.2	口縁部は内湾する。端部は平らな面を形成する。鏝部はやや下方に向き貼り付く。口縁部および鏝部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はケズリを施す。	内面5YR7/3にぶ い橙 外面5YR7/4にぶ い橙	1~3mmの砂 粒含む	良好	
111	S E 1033	土師器 土錘	長さ4.0 厚さ1.1 孔径0.3	断面は円形で、全面はナデを施す。ほぼ中央に貫通する孔あり。	7.5YR8/2灰白	1mm程度の 砂粒含む	良好	



第25図 S E 1033出土遺物実測図(2)

表17 出土遺物観察表(10)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
112	SE 1033	瓦器 椀	口径16.0	口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のミガキ、見込みに平行線のミガキを施す。外面はユビナデを施す。高台部はナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
113 19	SE 1033	瓦器 椀	口径14.5 器高4.5 高台径 4.2	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面三角形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキを施し、見込みに平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデを施す。高台部はナデを施す。	N5/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
114 19	SE 1033	瓦器 椀	口径15 器高4.3 高台径 4.0	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面三角形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキ、外面はユビナデを施す。高台部はナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
115 19	SE 1033	瓦器 椀	口径15 器高4.4 高台径 3.7	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面U字形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。	内面N6/0灰 外面N5/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
116 19	SE 1033	瓦器 椀	口径14.6 器高4.4 高台径 4.0	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面三角形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1~2mmの砂 粒含む	良好	
117 20	SE 1033	瓦器 椀	口径15.2 器高4.7 高台径 4.8	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面三角形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。	内面N3/0暗灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
118	SE 1033	瓦器 椀	口径13.8 器高3.9 高台径 4.4	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面逆台形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキを施す。外面はユビナデを施す。ユビ爪よる圧痕がある。高台部はナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
119	SE 1033	瓦器 椀	口径15.0 器高4.3 高台径 4.7	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面U字形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに連結輪状のミガキを施す。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
120 20	SE 1033	瓦器 椀	口径15.0 器高4.6 高台径 4.5	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面U字形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキ、見込みに平行線のヘラミガキ、見込みと体部内面に渦巻状のヘラミガキを施す。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。	内面N3/0暗灰 外面10Y4/1灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
121 20	SE 1033	瓦器 椀	口径15.4 器高4.8 高台径 4.8	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。断面三角形の高台が底に貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ後横方向のヘラミガキを施す。見込みはヘラミガキを施すと思われるが、表部が磨耗しており不明瞭である。外面はユビナデ、高台部はナデを施す。表面全体に鉄分が密着している。	N3/0 暗灰	1~2mmの砂 粒含む	良好	
122 20	SE 1033	瓦器 小皿	口径8.6 器高1.5	口縁部は外反し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面および見込みにナデ後螺旋状のヘラミガキを施す。外面はユビナデを施す。	内面N5/0灰 外面N4/0灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
123	SE 1033	瓦質 羽釜	口径21.4	口縁部は内湾し、端部は面を形成する。鋳は上外方に短く伸びる。口縁部および体部の内面は横方向のハケを施す。体部の外面ユビナデ、脚部はナデを施す。	内面N4/0灰 外面N3/0暗灰	1mm程度の 砂粒含む	良好	
124 21	SE 1033	瓦 偏行唐草 文軒平瓦		凹面はナデ、凸面はケズリを施す。瓦当面には唐草文があり、上下に圏線を有する。圏線の外側には鋸歯文を配する。	凹面N3/0暗灰 凸面N4/0灰	1~5mmの砂 粒含む	良好	
125	SE 1033	瓦 平瓦		凹面には布目が残り、凸面には縄目タタキを施す。	7.5YR7/3にぶい 橙	1~3mmの砂 粒含む	良好	
126 21	SE 1033	瓦 平瓦		凹面には布目が残り、凸面には縄目タタキを施す。凹面は2次焼成を受ける。	内面10YR1.7/1 黒 外面10YR4/1褐 灰	1~4mmの砂 粒含む	良好	
127 21	SE 1033	瓦 平瓦		凹面には布目が残り、凸面には縄目タタキを施す。	内面10YR6/1褐 灰 外面10YR5/1褐 灰	1~4mmの砂 粒含む	良好	
128 21	SE 1033	青磁 碗	口径10.0	口縁部は内湾ぎみに外側へ開く。端部は外側につまみ出し尖る。透明の釉をつける。	10GY8/1明緑灰	-	良好	

S K 1034～1036・1050・1054

S K 1034～1036・1050・1054は調査地の中央で検出した。S K 1034・1035・1054からは土師器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

表18 平安時代後期～鎌倉時代土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S K 1034	2 C・D	円形 S E 1033に切られる	-	-	1.06	皿形	0.14	2.5Y4/1黄灰色細粒シルト質粘土	土師器
S K 1035	3 C・D	楕円形	1.63	1.2	-	逆台形	0.25	1 2.5Y4/1黄灰色細粒シルト質粘土 2 10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土(植物遺体含む)	土師器
S K 1036	3 D	楕円形 S D 1010を切る	1.2	0.6	-	逆台形	0.22	7.5YR2/1黒色細粒砂混粘土(炭化物含む)	なし
S K 1050	3 D	円形 S P 1047を切る	-	-	1.47	逆台形	0.18	1 10YR4/4褐色粗粒砂混粘土 2 10Y4/1灰色細粒砂混粘土	なし
S K 1054	3・4 D	隅丸長方形	1.5	1.2	-	逆台形	0.17	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器

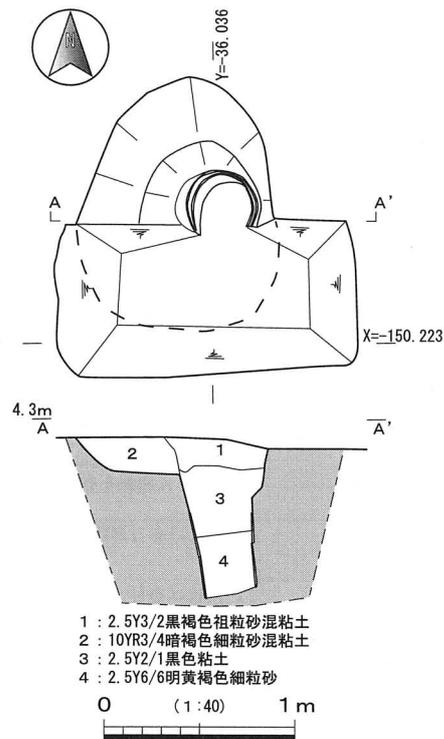
S P 1012・1013・1029～1032・1038・1039・1045～1049・1051・1052

S P 1012・1013は調査区の西部で、S P 1029～1032・1038・1039・1045～1049・1051・1052は調査区の中央で検出した。S P 1013・1029～1032・1038・1046・1049・1051・1052からは土師器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

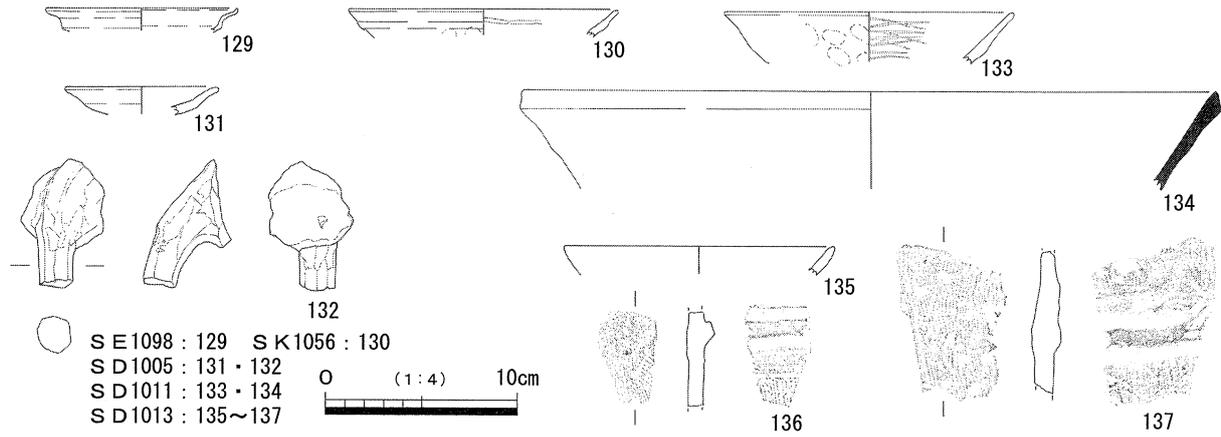
鎌倉時代～室町時代

S E 1098

S E 1098は4 D地区で検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形で、S D 1011を切る。曲物2段を東側に設置していた。長径は1.4m、短径は1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.85mを測る。埋土は上から2.5Y3/2黒褐色粗粒砂混粘土、10YR3/4暗褐色細粒砂混粘土、2.5Y2/1黒色粘土、2.5Y6/6明黄褐色細粒砂で、瓦器碗が数点出土した他、土師器や須恵器の破片が出土した。このうち掲載したものは129である。129は土師器小皿である。



第26図 S E 1098平面・断面図



第27図 SE1098・SK1056・SD1005・1011・1013出土遺物実測図

表19 平安時代後期～鎌倉時代小穴一覽表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SP1012	2B	円形	-	-	0.4	V字形	0.13	1 N3/0暗灰色粘土 2 7.5YR4/2灰褐色細粒砂混粘土	なし
SP1013	4B	円形	-	-	0.45	V字形	0.17	7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1029	1C	楕円形	0.87	0.7	-	逆台形	0.19	10YR4/1褐灰色細粒シルト質粘土(粗粒砂のブロック混入)	土師器・須恵器
SP1030	1D	不定形	0.73	0.65	-	逆台形	0.25	1 10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土(炭化物含む) 2 2.5Y5/6黄褐色細粒シルト質粘土	土師器・須恵器
SP1031	2D	円形 SP1032に切られる	-	-	0.92	逆台形	0.14	10YR4/1褐灰色細粒シルト質粘土(粗粒砂のブロック混入)	土師器
SP1032	2D	楕円形 SP1031を切る	0.5	0.4	-	逆台形(東に窪みあり)	0.18	1 2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入) 2 2.5Y6/6明黄褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1038	2D	楕円形	0.71	0.6	-	皿形状	0.06	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	土師器
SP1039	2D	楕円形 SP1040 SD1010を切る	0.75	0.6	-	逆台形	0.28	1 2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入) 2 2.5Y6/6明黄褐色細粒砂混粘土	なし
SP1045	3D	円形	-	-	0.46	逆台形	0.1	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	なし
SP1046	3D	楕円形	0.7	0.57	-	逆台形		2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	土師器・須恵器・瓦器
SP1047	3D	楕円形 SK1050に切られる	0.7	0.6	-	皿形状	0.05	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	なし
SP1048	3D	円形 SD1010を切る	-	-	0.54	逆台形	0.11	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	なし
SP1049	3D	円形 SD1010を切る	-	-	0.42	逆台形	0.27	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	土師器・須恵器
SP1051	3D	隅丸長方形	0.52	0.4	-	皿形状	0.07	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	土師器
SP1052	3D	円形 SD1011を切る	-	-	0.3	逆台形	0.19	2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土(細粒シルトのブロック混入)	土師器・須恵器

表20 出土遺物観察表(11)

遺物番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
129	S E 1098	土師器 小皿	口径9.9	口縁部は二段に折れ曲がり、端部は内側に肥厚する。口縁部および体部の内外面はヨコナデを施す。	7.5YR8/2灰白	1mm以下の砂粒含む	良好	
130	S K 1056	瓦器 椀	口径14.0	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。体部の内面は横方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。	10YR7/1灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	
131	S D 1005	土師器 小皿	口径7.8	口縁部は緩やかに屈曲し外反する。端部は丸く終わる。内外面はナデを施す。	5YR6/4にぶい橙	1~2mmの砂粒含む	良好	
132	S D 1005	瓦質 釜		脚部は直線に伸びる。体部の内面はハケ、脚部はナデを施す。	内面10YR8/1灰白 外面10YR3/1黒褐	1~2mmの砂粒含む	良好	
133	S D 1011	瓦器 椀	口径15.0	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラミガキ、外面ユビナデを施す。	内面N8/0灰白 外面N6/0灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
134	S D 1011	須恵器 鉢	口径36.0	口縁部は直線に外側にひらき、端部は面を形成する。内外面は回転ナデを施す。	N7/0灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	
135	S D 1013	土師器 皿	口径14.0	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。	5YR7/4にぶい橙	1mm程度の砂粒含む	良好	
136	S D 1013	須恵質 円筒埴輪		断面台形のタガが貼り付く。内外面は縦ハケ、タガ部はヨコナデを施す。	内面2.5YR6/1赤灰 外面2.5YR5/1赤灰	1~3mmの砂粒含む	良好	
137	S D 1013	土師質 円筒埴輪		断面台形のタガが貼り付く。内外面は縦ハケ、タガ部はヨコナデを施す。	内面10R6/6赤橙 外面2.5YR7/4淡赤橙	1~3mmの砂粒含む	良好	

S K 1044・1056

S K 1044・1056は調査区の中央で検出した。各遺構からは土師器・須恵器・瓦器が出土した。このうち掲載したものは130である。130は瓦器椀で、外面にはヘラミガキが施してないことから、13世紀以降のものと思われる。

表21 鎌倉～室町時代土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S K 1044	2・3 D	不定形	3.3	0.7	-	皿形状	0.1	10YR4/6褐色粗粒シルト混粘土	土師器・須恵器
S K 1056	4 D	不定形	3.5	1.7	-	逆台形	0.26	2.5Y4/1黄灰色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・瓦器

S P 1017~1020・1092~1097・1099~1109

S P 1017~1020・1092~1097・1099~1109は調査区の中央から東部で検出した。S P 1017・1092・1093・1095・1096・1099~1101・1103・1105・1109からは土師器・須恵器・瓦器が出土したが図化できるものはなかった。

S D 1003・1005・1009・1011~1013

S D 1003・1005・1009・1011~1013は南北方向に伸びる。条里に伴う耕作の溝と思われる。記載した全ての溝からは土師器・須恵器・埴輪・瓦器・瓦が出土した。このうち図化したものは131~137である。131は土師器小皿。132は瓦質釜の脚部である。133は瓦器椀。134は東播系の須恵器鉢。135は土師器皿。136は須恵質の円筒埴輪、137は土師質の円筒埴輪である。

表22 鎌倉～室町時代小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SP1017	3C	円形	-	-	0.6	逆台形	0.11	10YR4/4褐色細粒砂混粘土	土師器
SP1018	2C	楕円形	0.55	0.5	-	逆台形	0.1	1 7.5YR6/1褐灰色細粒砂混粘土 2 10YR6/1灰色細粒シルト混粘土	なし
SP1019	2C	円形	-	-	0.35	逆台形	0.15	7.5YR6/1褐灰色細粒砂混粘土	なし
SP1020	2C	隅丸長方形	1.3	1.1	-	逆台形 (東に段あり)	0.2	1 7.5YR4/2灰褐色粗粒砂混粘土 2 5Y4/1灰色細粒砂混粘土	なし
SP1092	2D	円形 SD 1011を切る	-	-	0.43	皿状形	0.09	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1093	1D	円形 SD 1011を切る	-	-	0.44	皿状形	0.05	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	須恵器
SP1094	2D	楕円形 SD 1011を切る	0.7	0.5	-	皿状形	0.08	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	なし
SP1095	2D	円形 SD 1011を切る	-	-	1.15	皿状形	0.14	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1096	2E	不定形 SD 1011を切る	0.8	0.6	-	逆台形	0.17	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器
SP1097	3D	円形 SD 1011を切る	-	-	1	皿状形	0.16	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	なし
SP1099	3E	円形 SD 1011を切る	-	-	0.57	皿状形	0.06	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器
SP1100	3D	楕円形 SD 1011を切る	0.4	0.33	-	皿状形	0.03	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器・瓦器
SP1101	3E	楕円形 SD 1011を切る	1.3	0.83	-	皿状形	0.06	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器
SP1102	3E	円形 SD 1011を切る	-	-	0.53	皿状形	0.07	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	なし
SP1103	3E	楕円形 SD 1011を切る	0.6	0.4	-	皿状形	0.03	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器
SP1104	3E	円形 SD 1011を切る	-	-	0.5	皿状形	0.06	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	なし
SP1105	4E	円形 SD 1011を切る	-	-	0.3	皿状形	0.06	10YR4/4褐色粗粒砂混粘土	土師器
SP1106	1D・E	円形	-	-	0.33	皿状形	0.05	5YR2/1黒褐色粗粒シルト質粘土	なし
SP1107	2E	円形	-	-	0.34	皿状形	0.1	5YR2/1黒褐色粗粒シルト質粘土	なし
SP1108	2E	円形	-	-	0.36	皿状形	0.09	5YR2/1黒褐色粗粒シルト質粘土	なし
SP1109	2E	円形	-	-	0.36	U字形	0.16	5YR2/1黒褐色粗粒シルト質粘土	土師器

表23 鎌倉～室町時代溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD1003	2～4A	南北に直線 SD1008を切る SD1002に切られる	1.0～1.5	皿形	0.06	7.5YR4/2灰褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・瓦
SD1005	3～5B	南北に直線 SD1004に切られる	2.5～3.3	逆台形	0.2	7.5YR5/6明褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・瓦器・瓦
SD1009	1・2C・D	南北に直線 SD1089に切られる	0.5～1.7	皿形	0.17	2.5Y3/1黒褐色細粒シルト混粘土 (炭化した植物遺体多く含む)	土師器・須恵器
SD1011	1D 2 ～4D・E	南北に直線 SP1052・1090 ～1105、近世～近代井戸022 に切られる	5.3～7.3	皿形状	0.32	7.5YR4/6褐色細礫混粘土 7.5YR4/1褐灰色細粒砂混粘土 5Y5/1灰色細粒砂混粘土(古代の遺構か?)	土師器・須恵器・瓦器・瓦
SD1012	1E	南北に直線	0.4～0.6	逆台形	0.16	7.5YR4/2灰褐色細粒シルト混粘土	土師器・須恵器
SD1013	1～3 E・F 4F	南北に直線	2.6～4.0	逆台形	0.24	7.5YR4/1褐灰色粗粒砂混粘土	土師器・須恵器・埴輪・瓦

近世

SE1014

4B地区で検出した。平面形状は円形で、径1.32mを測る。断面形状は逆台形で、1.63mを測る掘形の西部に木枠を置いている。廃絶後の埋土は7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土(粗粒砂のブロック混入)、掘形の埋土は5B4/1暗青灰色粗粒砂混粘土、枠内の埋土は10YR3/1オリーブ黒色粗粒砂混粘土である。土師器・須恵器が出土したが図化できるものはなかった。

SP1028・1089～1091

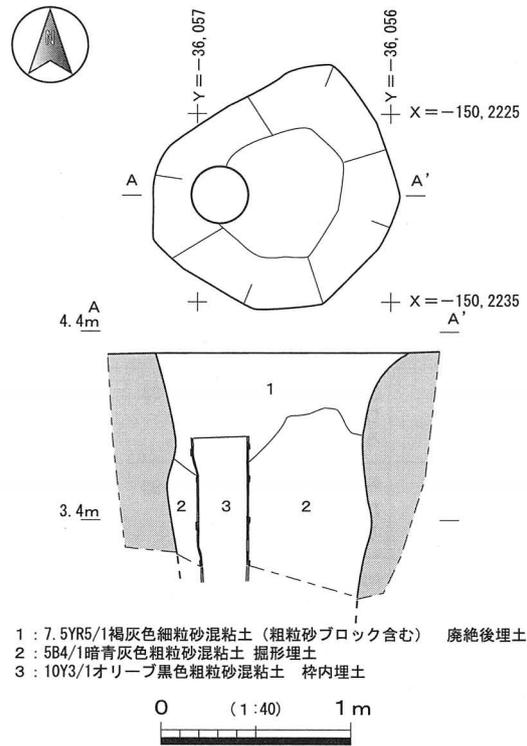
SP1028は西部、SP1089～1091は中央部で検出した。SP1090からは土師器が出土したが図化できるものはなかった。

SD1001・1002・1004

SD1001は南北方向、SD1002は東西方向に伸びる近世の溝で、溝内からは近世陶磁器の破片が出土した。全ての溝から土師器・須恵器・磁器・瓦が出土し、この内図化したものは138～141である。138と139はSD1001から出土した。138は弥生土器甕で、弥生時代後期のものである。

表24 近世小穴一覧表

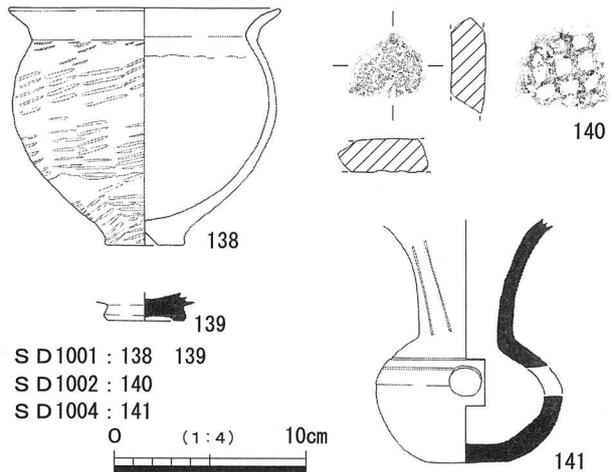
遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SP1028	3A	楕円形	0.55	0.5	-	逆台形	0.15	N4/0灰色細粒砂混粘土	なし
SP1089	1D	円形 SD1009を切る	-	-	0.83	逆台形	0.13	7.5YR4/1褐灰色粗粒砂～細礫混粘土	なし
SP1090	1D	円形 SD1011を切る	-	-	1.3	皿形状	0.17	7.5YR4/1褐灰色粗粒砂～細礫混粘土	土師器
SP1091	1D	円形 SD1011を切る	-	-	0.4	逆台形	0.14	7.5YR4/1褐灰色粗粒砂～細礫混粘土	なし



第28図 SE1014 平面・断面図

- 1 : 7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土 (粗粒砂ブロック含む) 廃絶後埋土
- 2 : 5B4/1暗青灰色粗粒砂混粘土 掘形埋土
- 3 : 10Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混粘土 枠内埋土

139は近世の磁器碗である。140はSD1002から出土した平瓦で、凸面に格子タタキを施す。141はSD1004から出土した須恵器の甕で、体部に1箇所円孔が開いている。



第29図 SD1001・1002・1004出土遺物実測図

表25 近世溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
SD1001	1・2 B・C 3・4 C	南北に直線 SD1002・ 1007を切る	4.5~5.5	皿形	0.24	7.5YR4/2灰褐色細粒砂~粗粒砂混 粘土	土師器・須恵器・磁器・ 瓦
SD1002	1・2 A・B	東西に直線 SD1003・ 1008を切る SD1001に 切られる	4.0以上	逆台形	0.5以上	2.5Y4/1黄灰色細礫混粘土 10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土 2.5Y3/1黒褐色細粒シルト質粘土	土師器・須恵器・磁器・ 瓦
SD1004	2 A 3~ 5 A・B	南北に直線 SD1005・ 1008を切る	3.5~4.7	逆台形	0.36	7.5YR4/1褐灰色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・瓦

表26 出土遺物観察表(12)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
138 21	SD 1001	弥生土器 甕	口径14.0 器高12.5	口縁部は外反する。底部は上げ底である。体部の内面はナデを施し、粘土接合痕がある。外面は右上がりのタタキを施す。口縁部の内外面はヨコナデを施す。	内面5YR8/1灰白 外面5YR7/2明褐 灰	1~6mmの砂 粒含む	良好	
139	SD 1001	磁器 碗	底径 4.0	断面逆台形の高台が貼り付く。体部の内外面はナデを施し、釉が付く。	内面2.5GY7/1明 オ リーブ灰 外面2.5GY8/1灰 白	1mm以下の 砂粒含む	良好	
140	SD 1002	瓦 平瓦		凹面には布目が残り、凸面は格子目タタキを施す。	N7/0灰白	1~3mmの砂 粒含む	良好	
141 21	SD 1004	須恵器 甕	体部最大 径	体部は球形である。口縁部は直立ぎみに外側へひらき、端部は欠損している。口縁部の内外面は回転ナデを施す。体部の内面は回転ナデ、外面は上位に回転ナデ、下位に回転ヘラケズリを施す。体部の外面上位に2条の沈線を施す。頸部の外面にはヘラ記号を施す。	内面5Y5/1灰 外面5Y6/1灰	1~5mmの砂 粒含む	良好	

近世~近代

SE001・002を検出した。

SE001は1D地区で、SE002は3・4C地区で検出した。平面形状は円形で径2.5~3.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約1.0m以上を測る。埋土はSE001が10YR4/4褐色細礫混粘土、SE002が10YR4/4褐色細礫混粘土、7.5YR4/2灰褐色細礫混粘土、10BG3/1暗青灰色粗粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

第2面

5層上面で、古墳時代初頭～前期の溝1条(S D2004)、6層上面で弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑1基(S K2001)、溝3条(S D2001～2003)、河川1条(N R2001)を検出した。以下では時代の古い遺構から順に記述する。

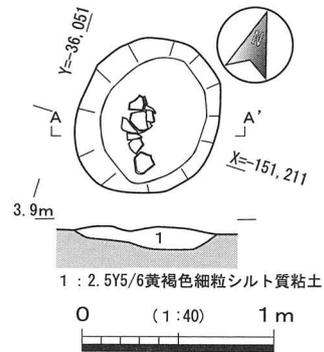
弥生時代後期～古墳時代初頭

S K2001

S K2001はほぼ中央の3 C地区で検出した。平面形状は楕円形で長径0.85m、短径0.75mを測る。断面形状は皿形で0.1mを測る。埋土は2.5Y5/6黄褐色細粒シルト質粘土で、弥生時代後期後半の弥生土器甕142が出土した。

S D2001～2003

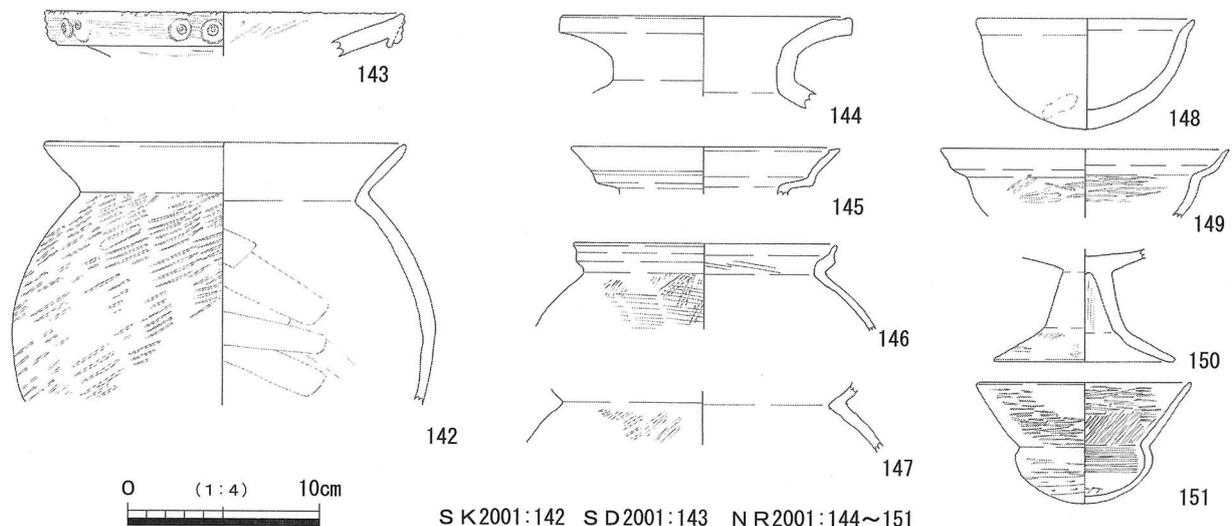
S D2001は2・3 B地区で、S D2002・2003は2・3 B・C地区で検出した。S D2001は南西～北東方向に、S D2002と2003は南東～北西方向に平行して直線に伸びる。S D2001からは弥生時代後期後半の弥生土器壺143が出土した。



第30図 S K2001平面・断面図

N R2001

N R2001は中央から東側で検出した。河川の西肩を検出したが、東肩は調査区外に至るため、規模は不明である。検出した幅は約20m、深さ約3.3mを測る。埋土は粗粒砂と細粒砂が主体のラミナ層で形成されており、南東から北西へ流れていたと思われる。河川内からは古式土師器の壺、甕等が出土した。この内図化したものは144～151である。144は壺、145～147は甕、148・149は鉢、150は高杯、151は小型丸底土器である。



第31図 S K2001・S D2001・N R2001出土遺物実測図

## 古墳時代初頭～前期

## SD2004

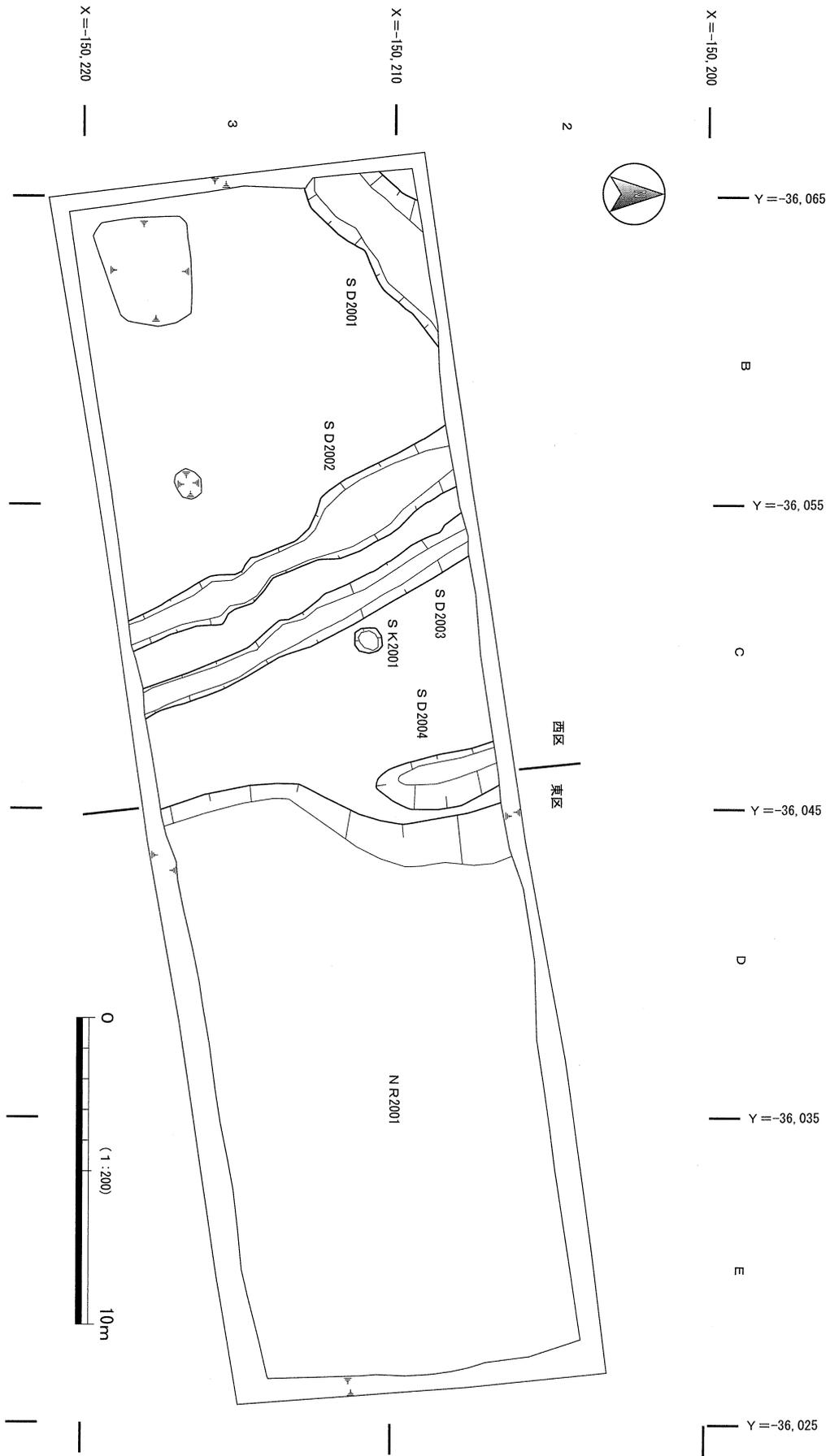
SD2004は2・3C地区で検出した。平面形状は南北方向に直線に伸び、幅約1.5～1.8mを測る。断面形状は皿形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒シルト質粘土で遺物の出土はなかった。

表27 古墳時代初頭～前期溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD2001	2・3A・B	南西-北東に直線	2.4	逆台形	0.5	7.5YR5/8明褐色細粒砂と粗粒砂のラミナ 5Y5/1灰色細粒シルトと粗粒シルトのラミナ	弥生土器
SD2002	2・3B・C	南東-北西に直線	0.5～2.2	皿形状	0.2	10YR5/1褐灰色細粒砂	なし
SD2003	2・3C	南東-北西に直線	0.8～1.3	逆台形	0.4	5YR5/8明赤褐色粗粒砂 10YR5/1褐灰色細粒砂と粗粒砂のラミナ	なし

表28 出土遺物観察表(13)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
142 22	SK 2001	弥生土器 甕	口径18.6	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面は右上がりのタタキ目を施す。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR7/4にぶい橙	1～3mmの砂粒含む	良好	
143 22	SD 2001	弥生土器 壺	口径18.4	口縁部は外反し、端部は垂下する。口縁部の内面は放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。端面には横方向の凹線の後、円形竹管文を施した浮文を2個1対で等間隔に貼り付ける。	内面7.5YR7/4にぶい橙 外面7.5YR7/2明褐灰	1～3mmの砂粒含む	良好	
144	NR 2001	古式土師器 壺	口径15.0	口縁部は外反し、端部は面を形成する。口縁部および体部の内外面はナデを施す。	2.5Y6/1黄灰	1～5mmの砂粒(生駒西麓産角閃石)含む	良好	
145	NR 2001	古式土師器 甕	口径14.0	口縁部は屈曲した後外上方へひらきさらに外反する。端部は内側につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施し、外面に凹線を1条施す。	内面2.5YR6/1赤灰 外面2.5YR4/1赤灰	1mm程度の砂粒含む	良好	吉備系?
146	NR 2001	古式土師器 甕	口径13.6	口縁部は体部から屈曲した後外上方へひらきさらに外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面はハケナデ後ヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面はハケナデを施す。	内面7.5YR5/1褐灰 外面7.5YR8/2灰白	1～2mmの砂粒含む	良好	近江系?
147	NR 2001	古式土師器 甕		口縁部は「く」の字に屈曲する。端部は欠損。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキ目を施す。	内面5YR6/1褐灰 外面5YR7/1明褐灰	1～4mmの砂粒(生駒西麓産の角閃石)含む	良好	生駒西麓産庄内甕
148	NR 2001	古式土師器 鉢	口径11.4 器高5.8	体部は椀形で、口縁部は短く外反する。口縁部および体部の内面はハケナデ、外面はナデを施す。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR8/1灰白	1～3mmの砂粒含む	良好	
149	NR 2001	古式土師器 鉢	口径15.0	口縁部は内湾した後外上方へひらきさらに外反する。口縁部および体部内外面は横方向のヘラミガキを施す。	内面2.5YR7/3淡赤灰 外面2.5YR7/2明赤灰	1mm程度の砂粒含む	良好	
150	NR 2001	古式土師器 高杯	裾径9.4	杯部は平らで、裾部は脚部から屈曲し緩やかに広がる。杯部の内外面はヘラミガキを施す。脚部の内面はナデを施し、シボリ目が見られる。外面は縦方向のヘラミガキを施す。裾部の内面はナデ、外面はハケナデ後ヘラミガキを施す。	内面5YR8/1灰白 外面2.5YR7/4淡赤橙	1～3mmの砂粒含む	良好	
151 22	NR 2001	古式土師器 小型丸底土器	口径器高	体部は球形で、口縁部は内湾ぎみに外側へひらく。口縁部の内面は横方向のヘラミガキ後放射状ヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。体部の内面はハケナデ、外面の上位は横方向のヘラミガキ、下位はヘラケズリを施す。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR8/2灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	



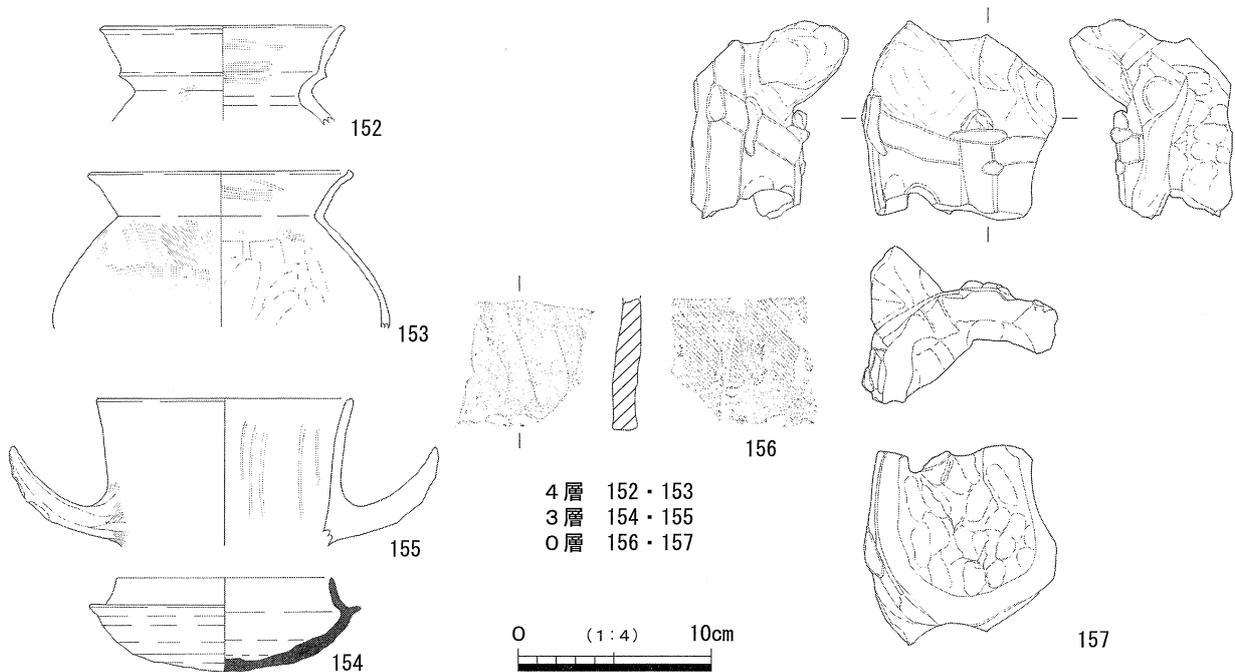
第32图 第2面平面图

4) 遺構に伴わない出土遺物

0層および3～5層からは弥生土器・土師器・須恵器・埴輪等が出土した。このうち凶化したものは152～157である。152は4層から出土した古式土師器甕で、口縁部の特徴から山陰からの搬入あるいは模倣品の可能性が考えられる。153は4層から出土した古式土師器甕。154は3層から出土した須恵器杯身、155は3層から出土した土師器鍋である。156は0層から出土した円筒埴輪、157は0層から出土した馬形埴輪である。なお、出土遺物の詳細は表29にまとめた。

表29 出土遺物観察表(14)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量(cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
152 22	4層	古式土師器甕	口径12.1	口縁部は体部から屈曲した後外上方へひらきさらに外反する。端部は外側へつまみ出し丸く終わる。口縁部の内面はハケナデ後ヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。	内面10YR8/1灰白 外面10YR8/2灰白	1mm程度の砂粒含む	良好	山陰系
153	4層	古式土師器甕	口径13.2	口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は内側につまみ出し丸く終わる。口縁部の内面はハケナデ後ヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は左上がりのハケナデを施す。	内面10YR7/1灰白 外面10YR8/2灰白	1～3mmの砂粒含む	良好	
154	3層	須恵器杯身	口径11.0 器高4.9	口縁部は平らな底部から内湾して伸びる。受部は短く水平に伸びる。口縁部および受部の内外面は回転ナデを施す。体部の内面は回転ナデ、外面の上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリを施す。	N7/0灰白	1～2mmの砂粒含む	良好	
155	3層	土師器鍋?	口径13.0	口縁部はやや外側へ直線に伸びる。口縁部および体部の内外面はハケナデ、把手部はナデを施す。	内面5YR8/2灰白 外面5YR7/4にぶい橙	1mm以下の砂粒含む	良好	
156	0層	埴輪 円筒埴輪		底部は直立する。内面はナデ、外面は左上がりのハケナデを施す。底面にはヘラ状工具による押えがある。	内面5YR7/3にぶい橙 外面5YR7/4にぶい橙	1～3mmの砂粒含む	良好	
157 22	0層	埴輪 馬形埴輪		耳と顔の目の部分である。目は頭部上面の中央のスカシ孔で、耳は頭部上面に貼り付く円形の筒状の粘土で表現している。また、面皴は粘土紐で表現している。調整はユビナデを施し、内面には粘土接合の痕跡が残る。	内面10YR8/2灰白 外面7.5YR7/3にぶい橙	1～2mmの砂粒含む	良好	



第33図 4・3・0層出土遺物実測図

### 3. まとめ

10～6層は自然堆積で、遺物の出土もなく、人が生活をしている痕跡は見当たらなかった。古墳時代初頭に埋没した河川NR2001の前身になる川が調査地の西部に広がっていた可能性が考えられる。

この自然堆積層のうち6層上部は、土壌化層であることが確認でき、同層上面では調査地の西区では弥生時代後期～古墳時代初頭に比定できる溝や土坑の生活に関連した遺構を検出した。このことは、自然河川の埋没に伴う微高地が当調査地一帯に形成され、人々が生活できる環境が整った結果と推測できる。

また、東区で南北方向に流れる河川(NR2001)の西肩を確認した。この河川は東に向かうに従って徐々に深くなり、今回の調査地では約3.3mの厚みの砂層を確認した。この河川は古墳時代前期には埋没し調査地の東部がやや高い微高地を形成していることが判った。同河川の堆積は⑥(河村2007)でも確認しており、河川の幅は30m以上はあったと推測される。当該期の遺構は萱振7で原田編年の庄内Ⅲ期～布留Ⅰ期の遺物がコンテナ4箱程度したSD-11を確認している。この溝からは在地の土器に混じって生駒山地西麓産の土器や他地域から持ち運ばれたと考えられる土器(吉備系、讃岐か阿波系、山陰系)が出土している。このSD-11とNR2001までの東西約60mの間に遺構が存在する可能性が高いと思われたが、今回の調査地では遺構の検出は非常に希薄であった。萱振7の報告書でも当該期の集落についてふれているが、北西約350m地点の山賀遺跡(89-213)の調査で当該期の遺構・遺物が検出されていることから考えると、居住域はSD-11から北西側に広がっていた可能性が考えられる。また、同時期の居住域は南東約300m地点の萱振16でも検出しており、やはり在地の土器に混じって生駒山地西麓産の土器や他地域から持ち運ばれたと考えられる土器(吉備系、東海系、東四国系、山陰系)が出土している。これらのことから、当該期の居住域の間の空閑地であった可能性が考えられる。

古墳時代後期には西区で土坑、溝を確認しており、6世紀代の居住域が一帯に広がっていたことが判明した。溝(SD1010)は南北方向に直線に伸びており、この溝の東側では同時期の遺構の検出が少なくなることから、居住域を区画する溝になる可能性が高い。同時期には西隣の萱振7でも井戸や土坑が確認され、井戸は6世紀後半に廃絶したと推測されていることから本調査地と萱振7がこの時期の居住域であったことが判明した。

また、0層からは古墳時代後期の馬形埴輪(頭部の破片)や円筒埴輪の破片が出土した。このことから、近隣に当該期の古墳が存在していることが推測される。

古墳時代後期～奈良時代には西区で掘立柱建物(SB1001)を検出したことにより、北西側に居住域が存在していると思われる。

奈良時代の遺構は今回の調査では希薄であった。しかし、東で検出した土坑(SK1076)からは完形および完形近くに復元できる土器が含まれており、さらに東側に遺構が存在している可能性が高いと推測される。

奈良～平安時代の遺構は、調査地のほぼ中央で確認したが、まばらであった。しかし北東約250m地点の⑤では、掘立柱建物や土坑を検出していることから周辺に居住域があることは間違いない。

平安時代前期の遺構は中央南よりで井戸(SE1053)とその南部で小穴を2基確認したことが

ら。南側に同時期の居住域がある可能性が高い。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構はほぼ中央部で井戸(S E 1033)を検出し、その周辺で土坑および小穴が集中して確認できたことから、今回の調査地に居住域が存在していたと推測できる。S E 1033からは、奈良時代の軒平瓦や平瓦の破片が出土しており、特に第25図の124の偏行唐草文軒平瓦は、萱振1や大阪府教育委員会が府立八尾北高等学校建設に伴う発掘調査(広瀬1992)でも出土している。また、萱振7からは西郡廃寺の創建瓦に当る細弁十三弁蓮華文軒丸瓦や重弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土している。このことから、同寺院は、当調査地の近隣に存在していたと推測でき、飛鳥時代後期以降鎌倉時代前期まで存在していた可能性が考えられる。

また、鎌倉～室町時代にかけても、井戸(S E 1098)および溝、小穴を検出していることから、今回の調査地に居住域があったといえるであろう。

近世～近代は農業に使用されたと推測できる井戸や近世条里の溝を検出したことから、調査地全域が生産域に変わっていたことが判明した。

#### 参考文献

- ・佐藤隆 1992「第2章第2節 平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告V』財団法人大阪市文化財協会
  - ・広瀬雅信 1992『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書第39輯 大阪府教育委員会
  - ・原田昌則 1993「Ⅱ 久宝寺遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
  - ・米田敏幸 1990「16. 山賀遺跡(89-213)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
  - ・原田昌則 1996「Ⅲ 萱振遺跡(第13次調査)」『萱振遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告52』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ※その他、西郡廃寺・西郡遺跡・萱振遺跡・山賀遺跡の関連文献は表1に掲載しているので参照されたい。



圖 版



調査地遠景(西から) 中央奥は生駒山地



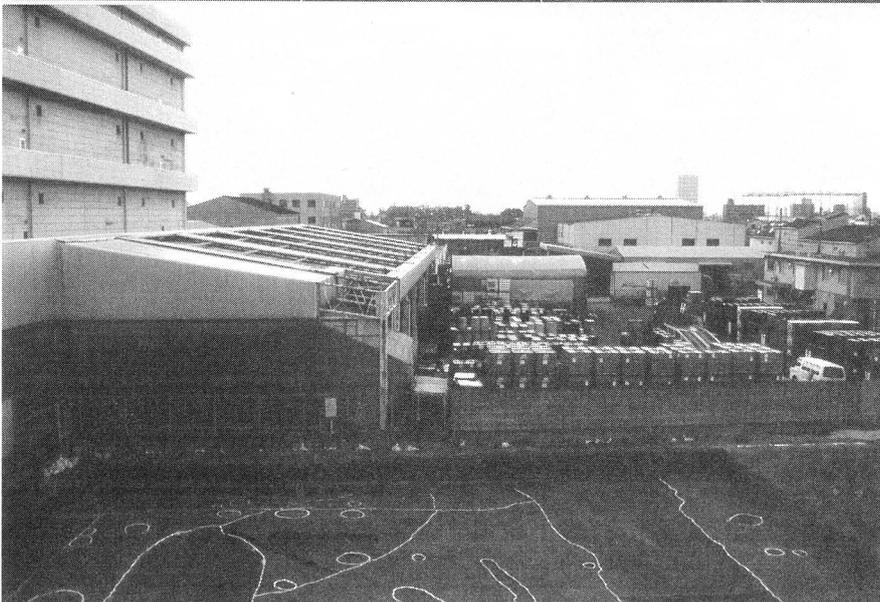
調査地遠景(北西から) 中央奥は生駒山地 中央の森部分は西郡天神社



調査地周辺 (南西から)



調査地周辺 (南から)



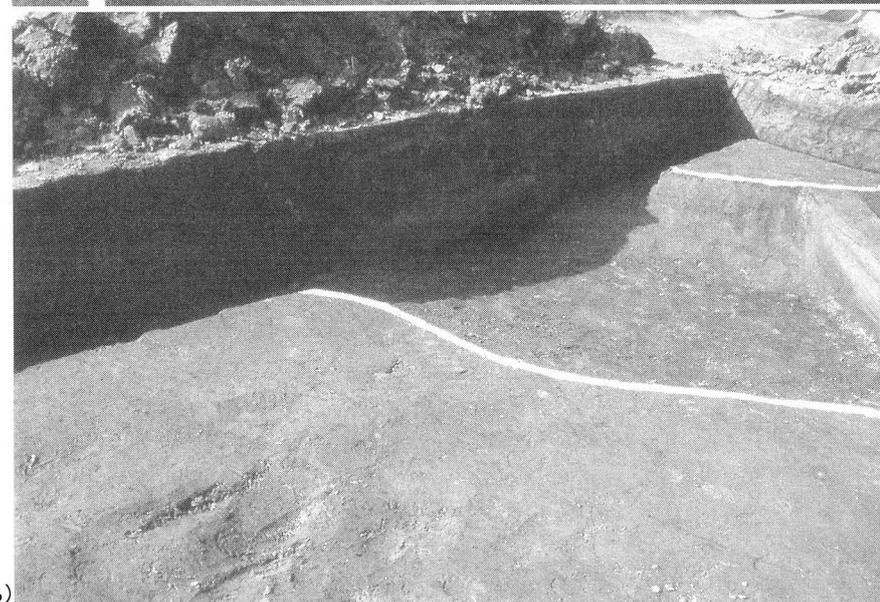
調査地周辺 (南から)



西区北壁[0~4層](南から)



西区西壁[0~4層](東から)



西区西壁[4~6層](南東から)



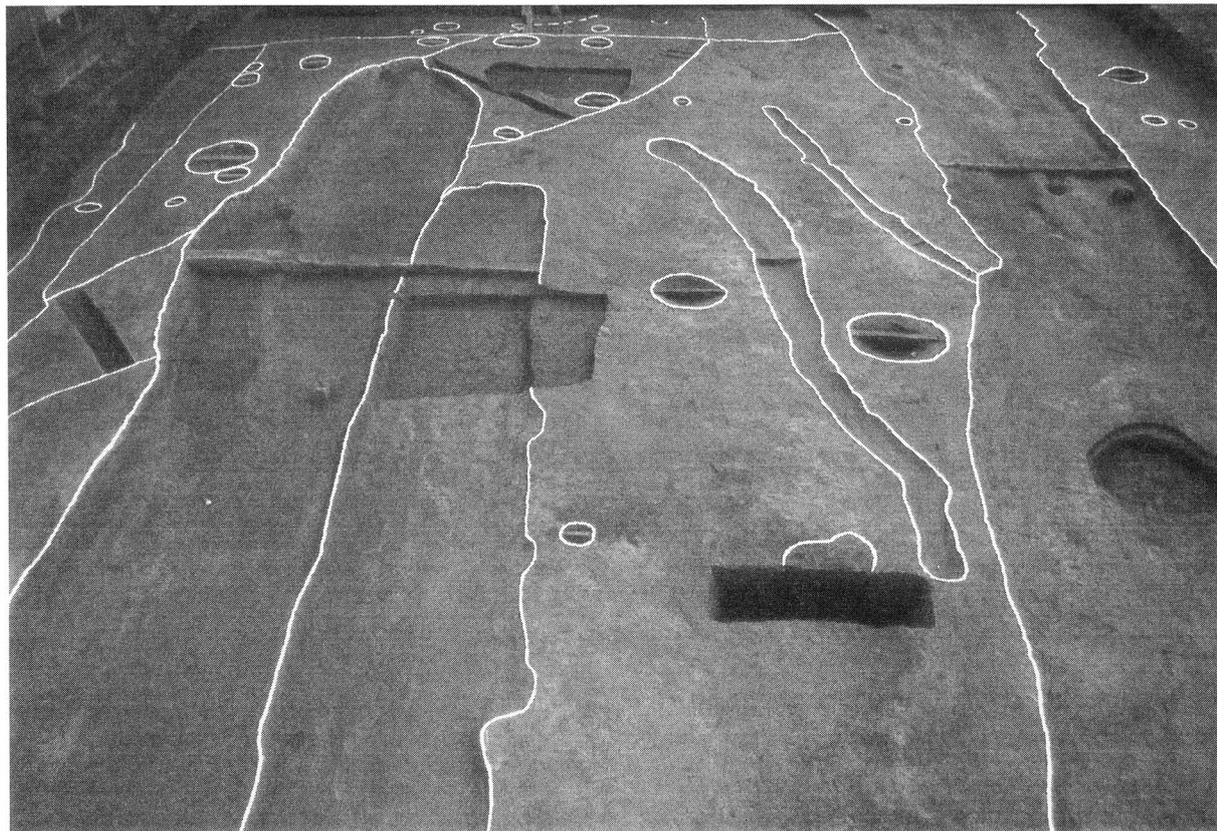
東区北壁[0～4層](南から)



東区北壁[4～6層](南から)



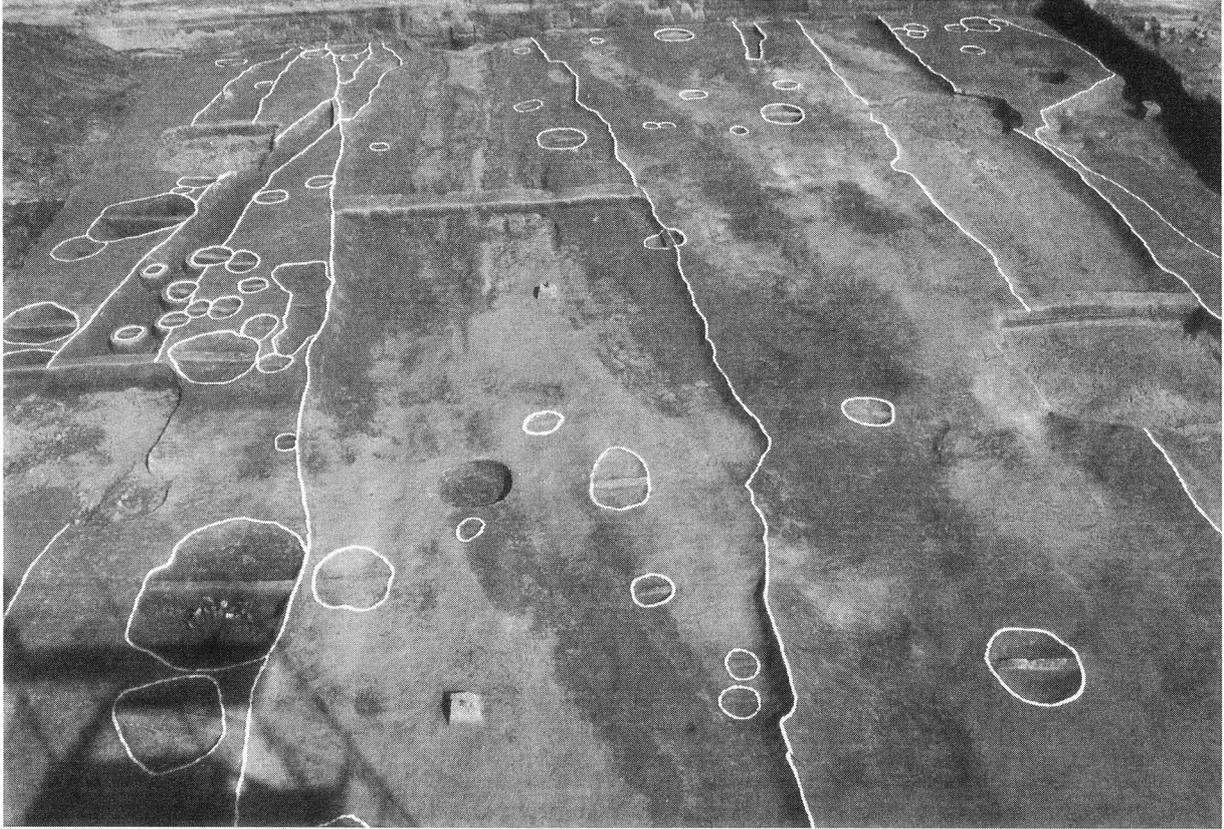
NR2001断面(南東から)



西区第1面 [4層上面] 全景(南から)



西区第2面 [5・6層上面] 全景(南から)

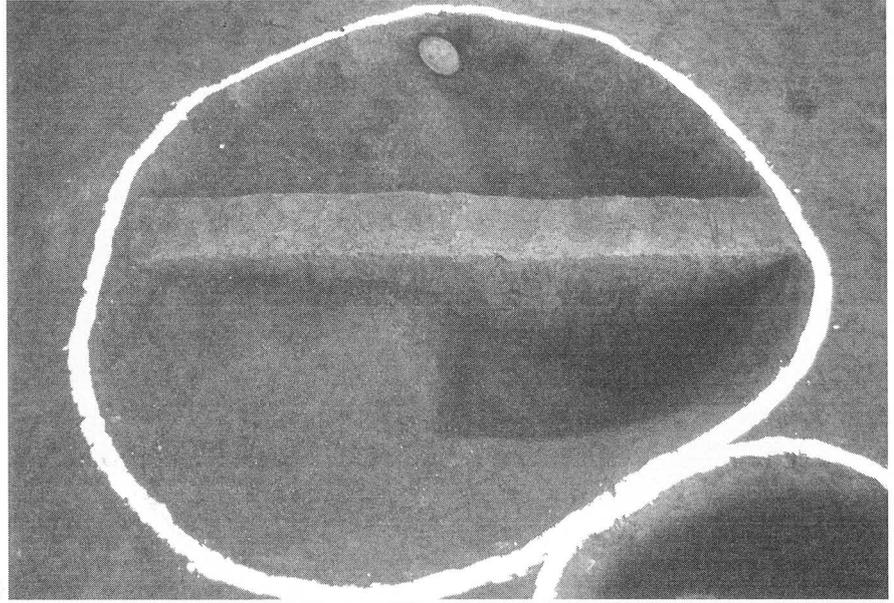


東区第1面〔4層上面〕全景(南から)

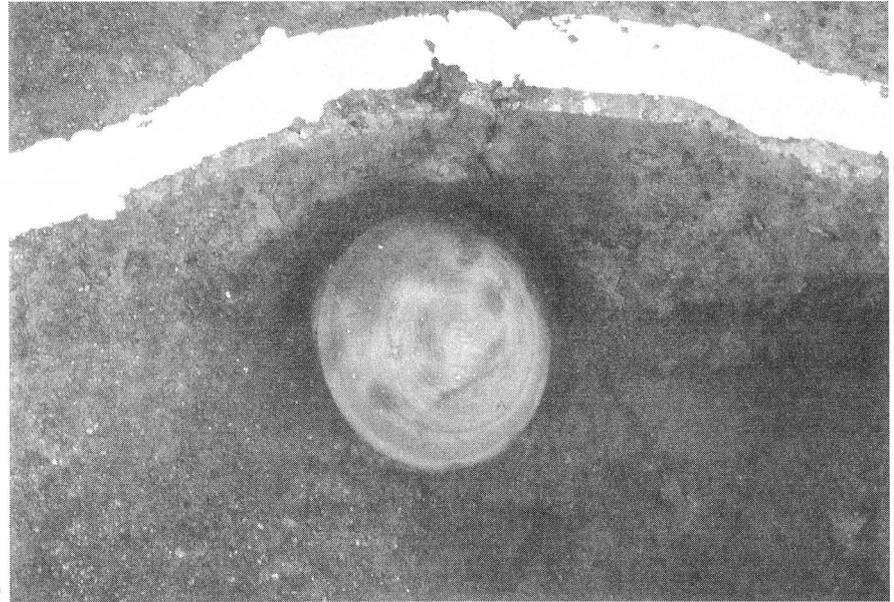


東区第2面〔5・6層上面〕全景(南東から)

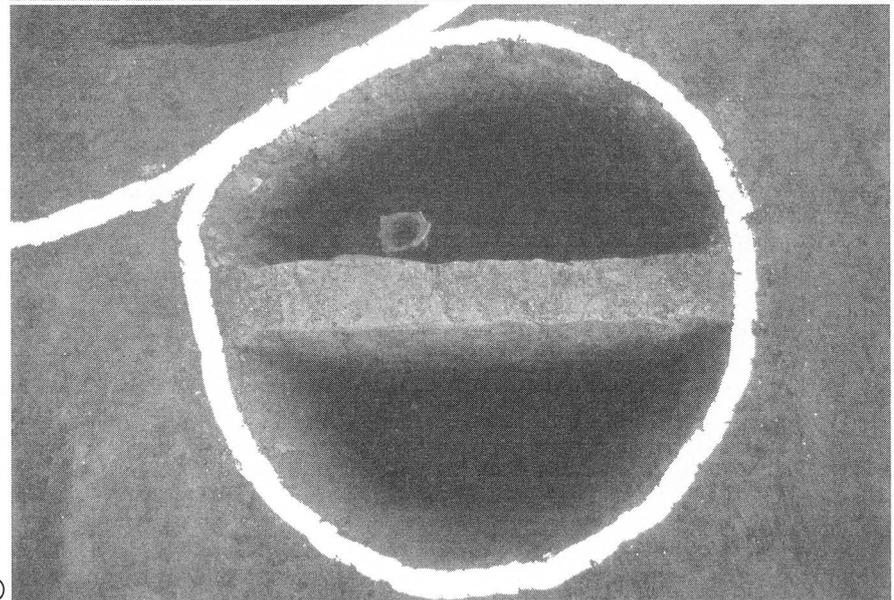
S K1003(南から)

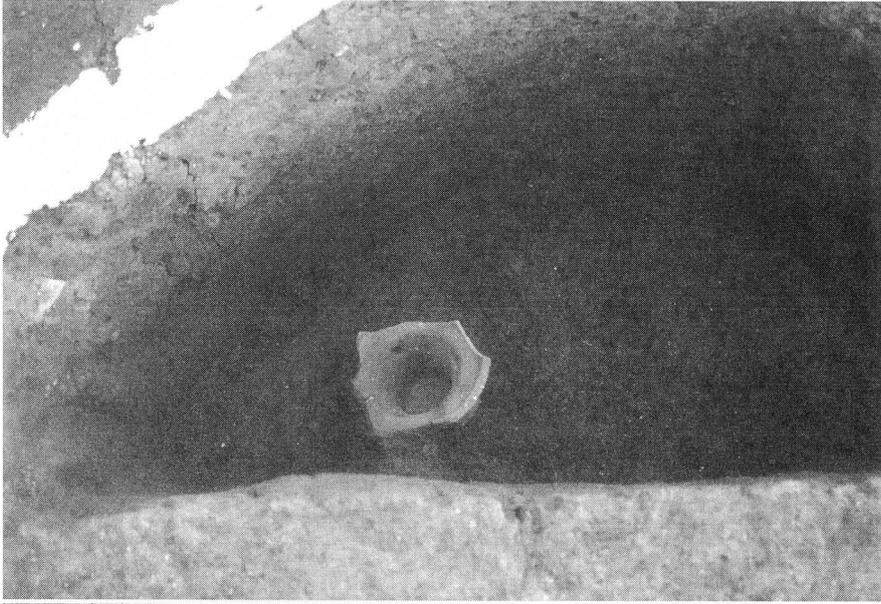


S K1003遺物出土状況(南から)



S P1004(南から)





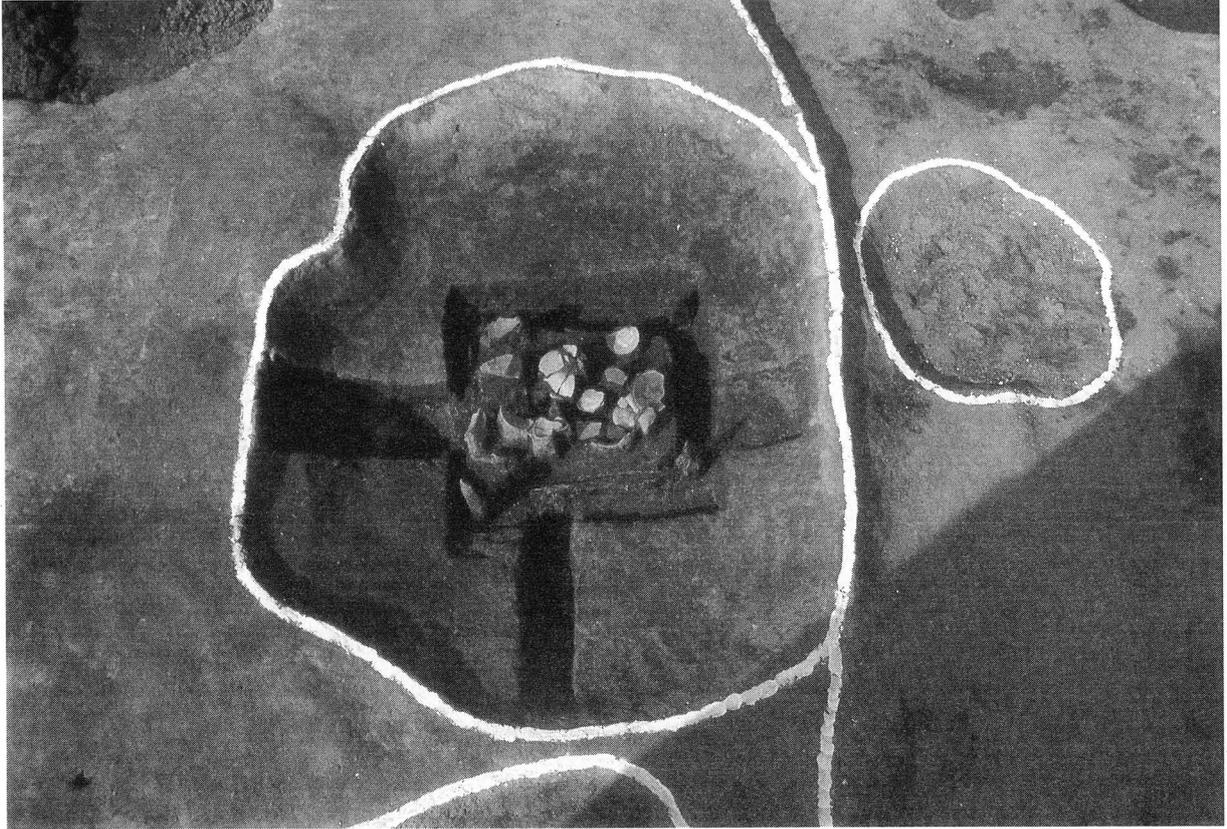
S P1004遺物出土状況(南から)



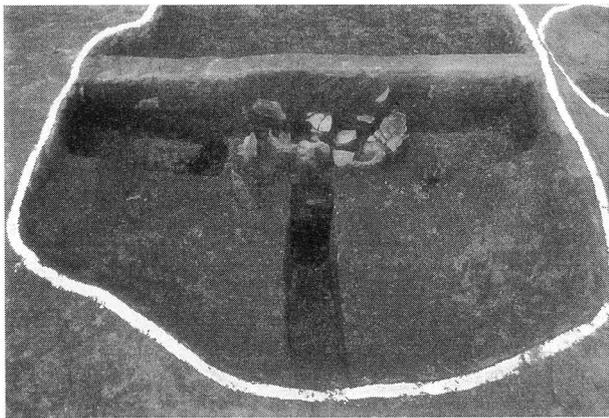
S K1076(南西から)



S K1015(南から)



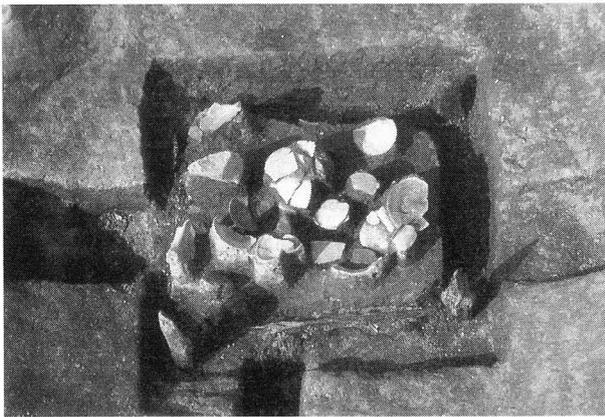
SE1053上部全景(南から)



SE1053上部断面(南から)



SE1053上部遺物検出状況(西から)



SE1053上部遺物出土状況(南から)



SE1053上部調査状況(南西から)



S E 1053下部全景(南から)



S E 1053下部断面(南から)



S E 1053下部遺物検出状況(西から)



S E 1053下部遺物出土状況(南から)



S E 1053下部調査状況(東から)



S E 1033 (南から)



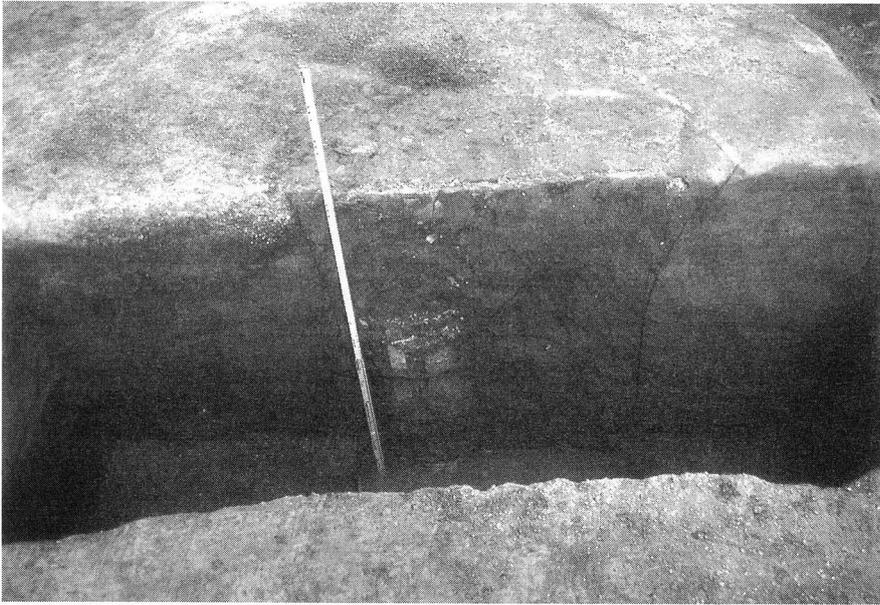
S E 1033遺物出土状況(南から)



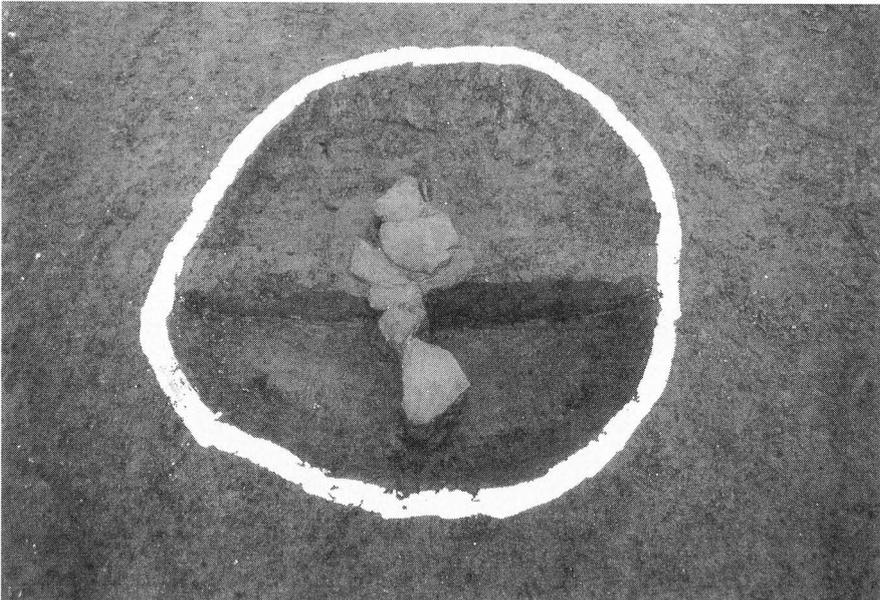
S E 1033断面(南から)



S E 1098 (南から)



S E 1014断面 (南から)



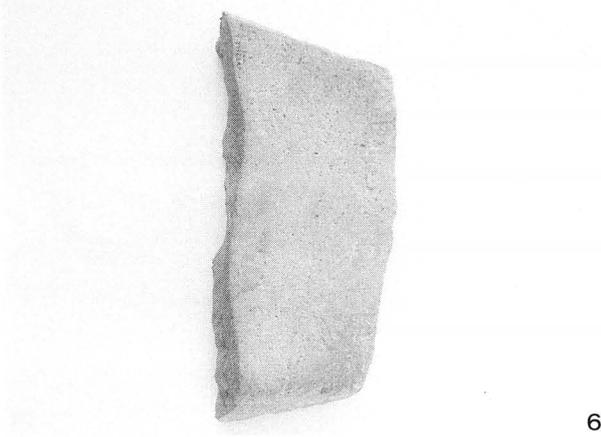
S K 2001 (南から)



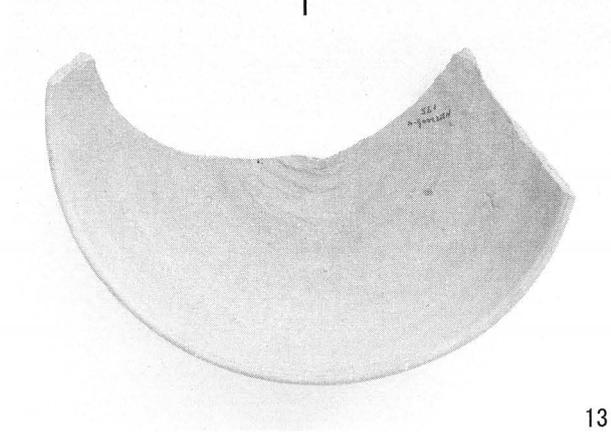
3



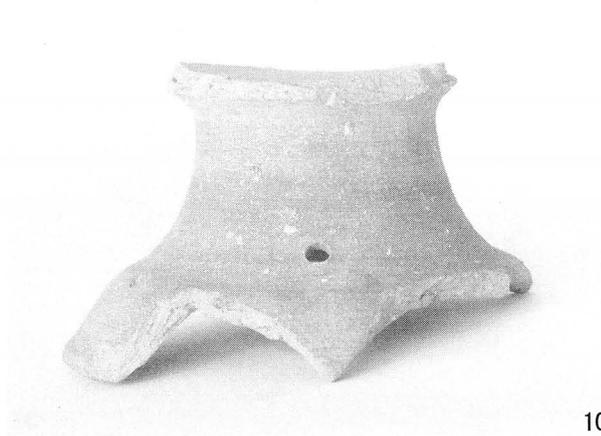
|



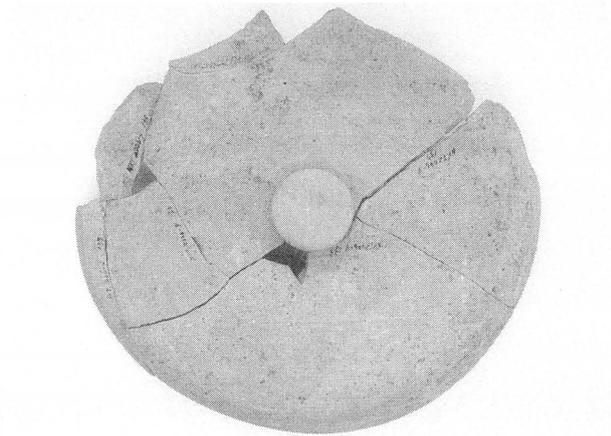
6



13



10



|



14

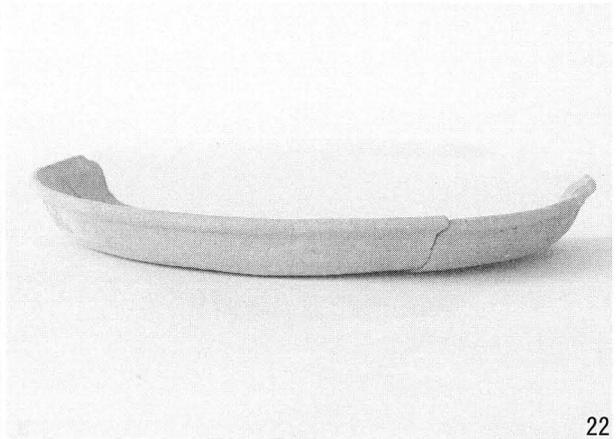


20

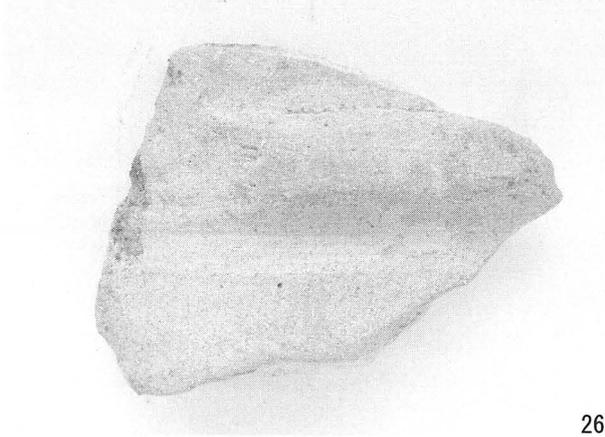
SK1003(3)、SP1001(6)、SP1004(10)、SD1010(13・14)、SK1076(20)出土遺物



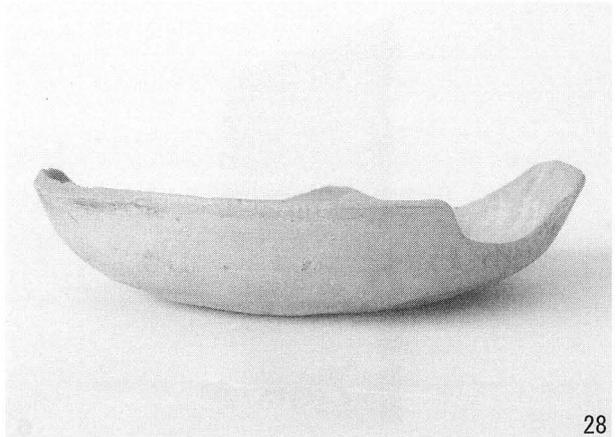
21



22



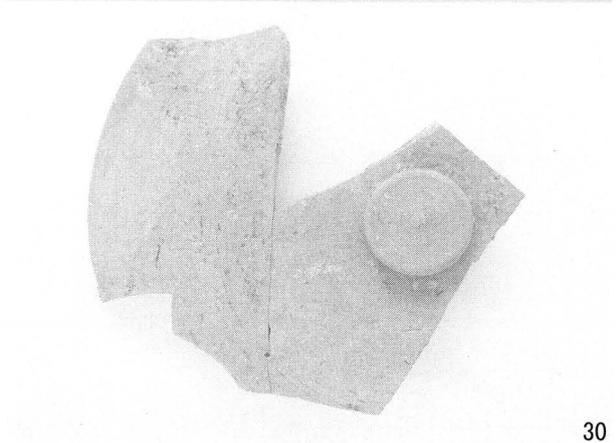
26



28



29



30

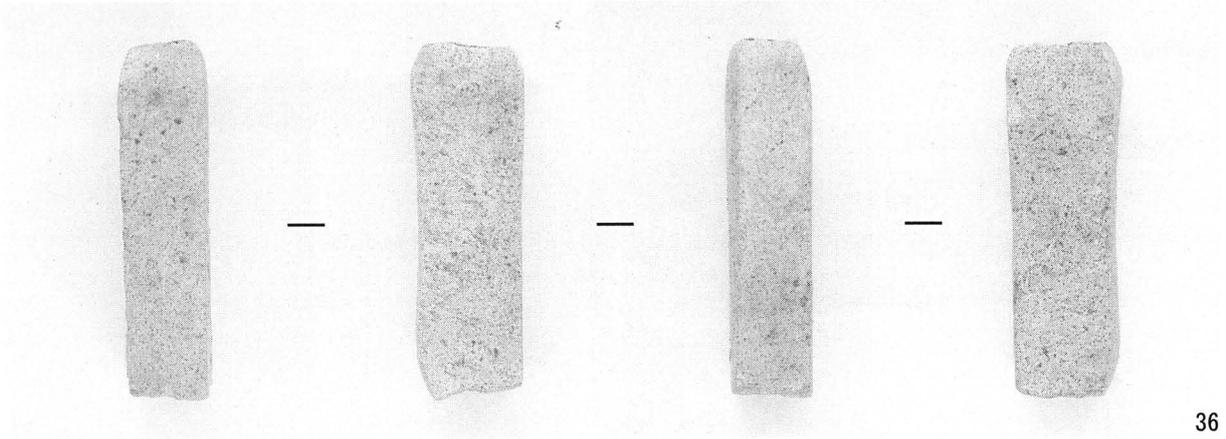


31



32

S K1076(21・22・26)、S K1015(28~32)出土遺物



36



37



39



40



41



44

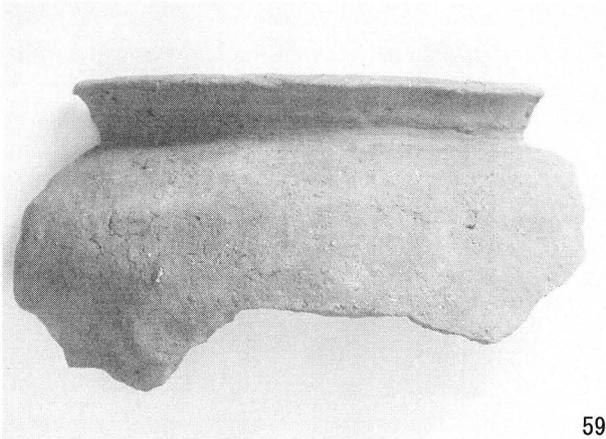


45

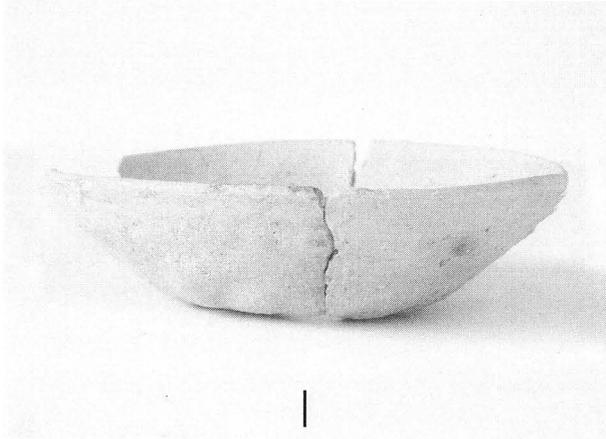
SP1081(36)、SP1082(37)、SE1053(39~41・44・45)出土遺物



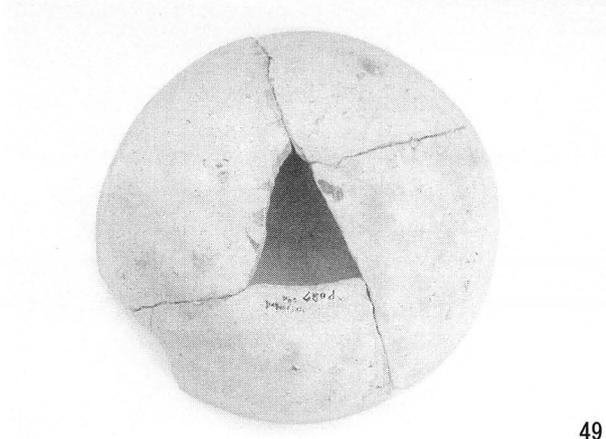
48



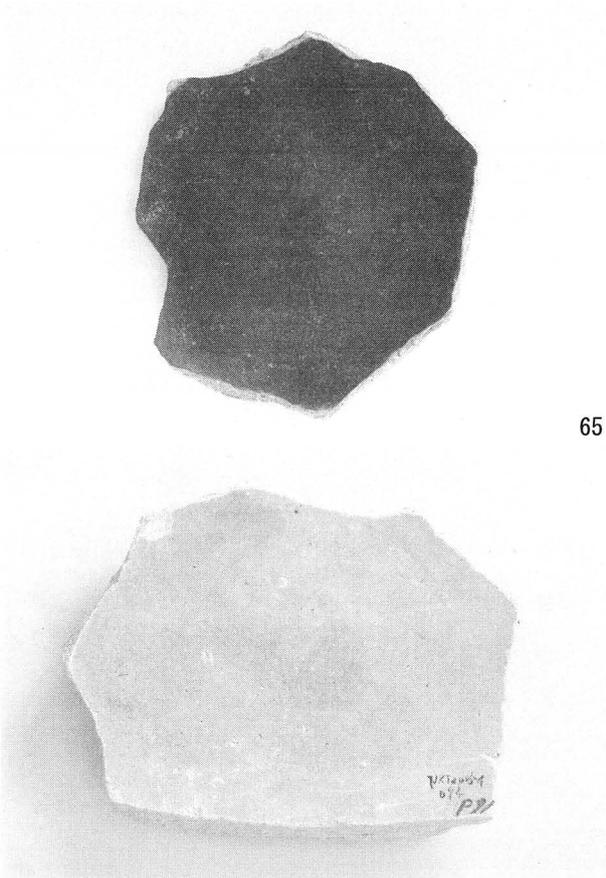
59



|



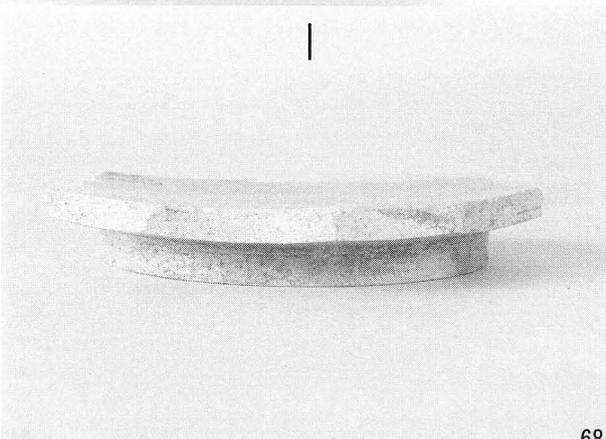
49



65



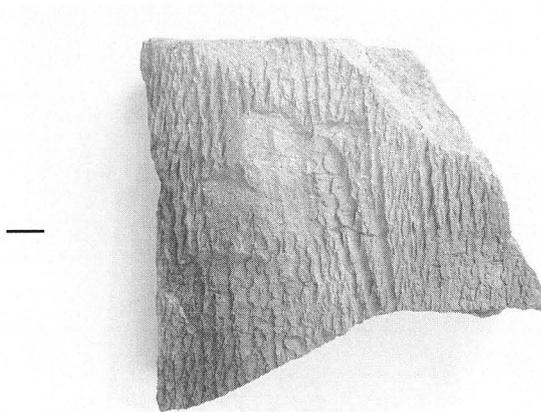
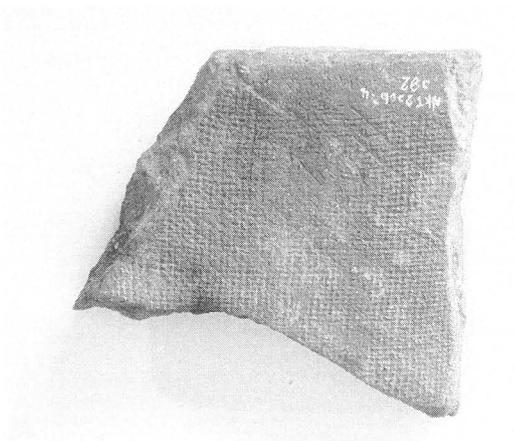
52



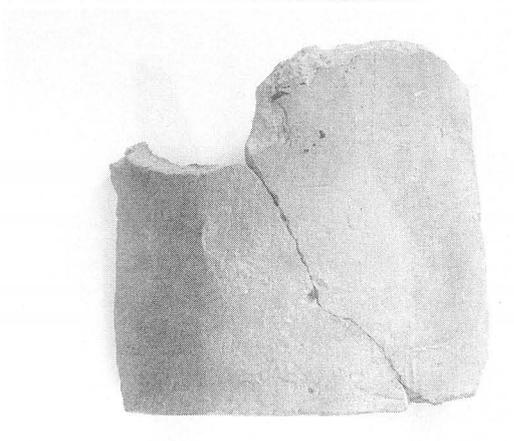
|

68

S E 1053 (48 · 49 · 52 · 59 · 65 · 68) 出土遺物



74



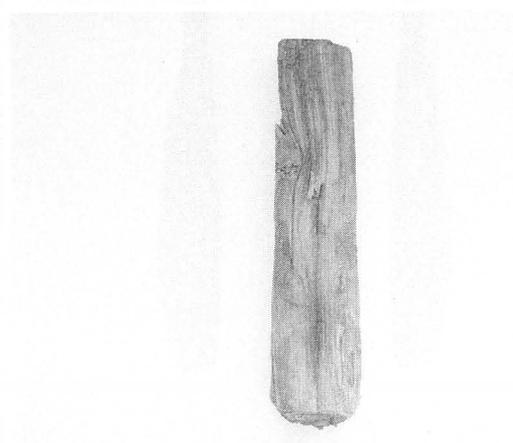
76



78

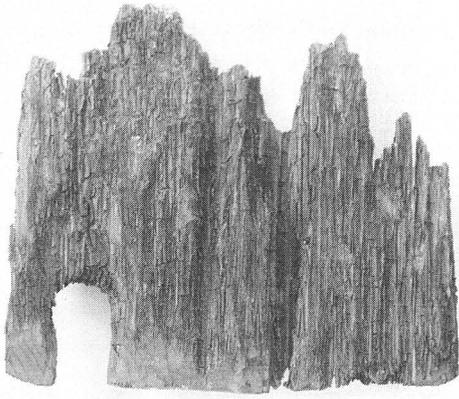


82

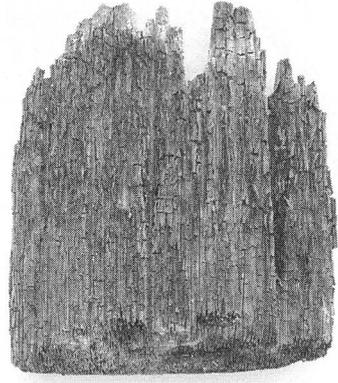


83

S E1053(74・76・78・82・83)出土遺物



88



93



97



99



100

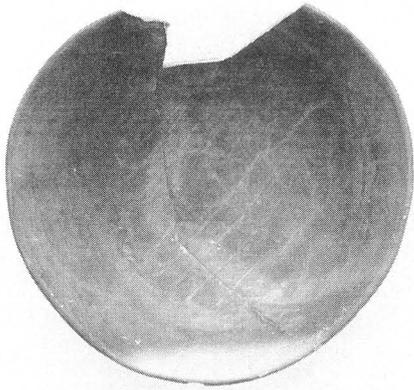


101



102

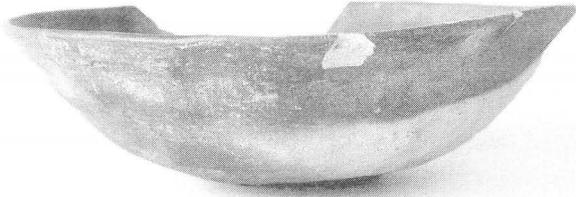
S E 1053 (88・93・97・99~102) 出土遺物



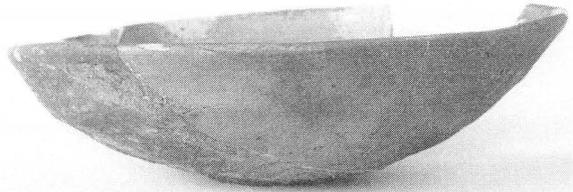
|



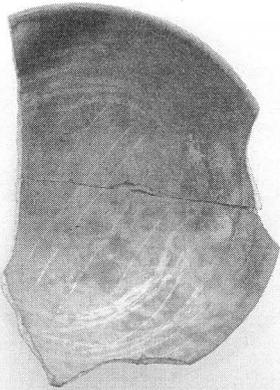
|



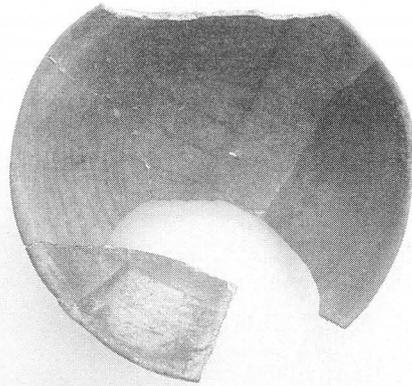
113



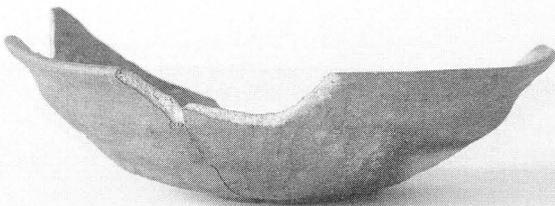
114



|



|

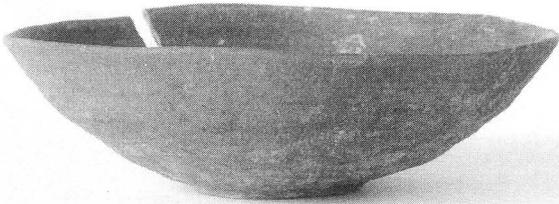
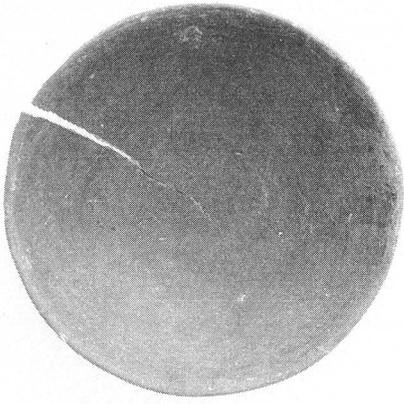


115



116

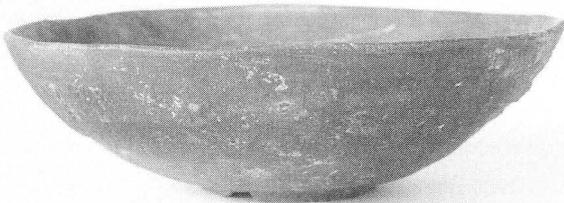
SE1033(113~116)出土遺物



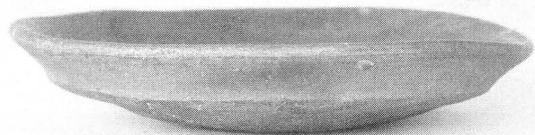
117



120



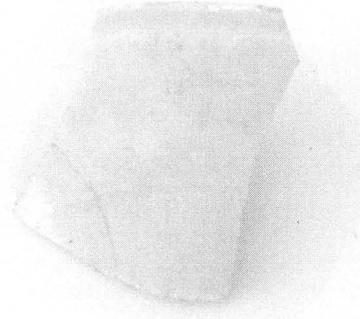
121



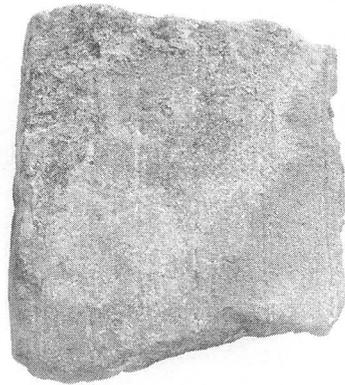
122



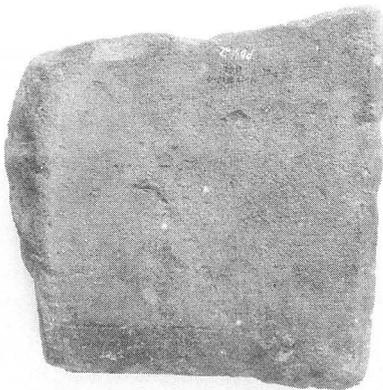
124



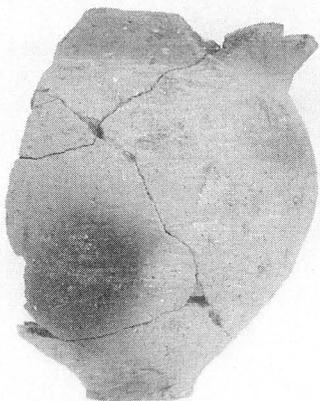
128



126



127



138



141

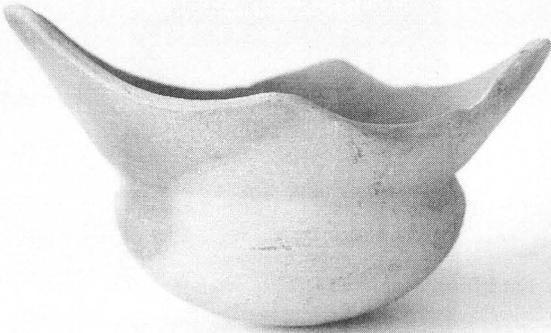
SE1033(124・126~128)、SD1001(138)、SD1004(141)出土遺物



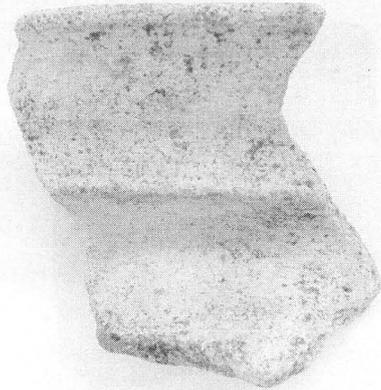
142



143



151



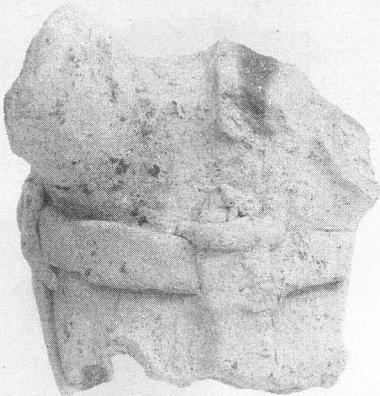
152



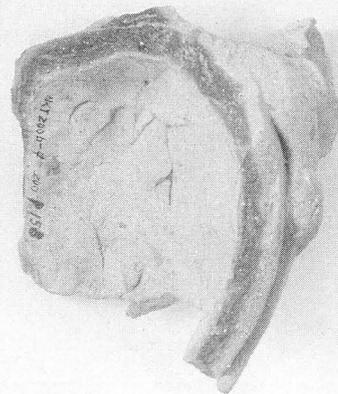
右



左



正面



裏

157

S K 2001 (142)、S D 2001 (143)、N R 2001 (151)、4 層 (152)、0 層 (157) 出土遺物

## II 郡川遺跡第 10 次調査 (K R 2010 - 10)

# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市郡川三丁目82-1の一部で実施した地域密着型特別養護老人ホーム建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する郡川遺跡第10次の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年7月6日～8月13日（実働8日間）にかけて、高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約184㎡である。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成22年12月28日に完了した。

# 本文目次

1. はじめに	51
2. 調査概要	51
1) 調査方法と経過	51
2) 基本層序	52
3) 検出遺構と出土遺物	52
4) 遺構に伴わない出土遺物	56
3. まとめ	56

# 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	51
第2図 調査区位置図及び地区割り図	52
第3図 北壁断面図	52
第4図 平面図・井戸断面図	53
第5図 S E 203出土遺物実測図	55
第6図 S K 201・S D 201遺物実測図	56

# 図 版 目 次

図版1 北区全景(東から) 南区全景(東から) 南区S D 1(南から) 南区S D 1馬歯出土(西から) 北区S E 1(南から) 北区S E 2(北から) 北区S E 3完掘(南から) 北区S E 3底面より出土壺検出状況(西から)	
図版2 S K 1完掘(南から) S K 1・S D 2(西から) S K 1・S D 2(南西から) 北区調査風景(東から) 南区人力掘削(南から) 北区機械掘削、側溝掘り(南から) 南区機械掘削(北から) 調査前(東から)	
図版3 遺物写真 S E 3 1～4・6～9	
図版4 遺物写真 S E 3 10・12・14～19	
図版5 遺物写真 S E 3 19 S K 1 21 S D 1 22・23 遺構に伴わない出土遺物 25	

## II 郡川遺跡第10次調査 (K R 2010-10)

### 1. はじめに

郡川遺跡は、八尾市の東部にあたる縄文時代中期末～室町時代に至る複合遺跡である。地理的には生駒山地西麓の扇状地上に位置する。現在の行政区画では郡川一～五丁目、教興寺、教興寺一～七丁目、垣内一～五丁目、黒谷一～四丁目が郡川遺跡の範囲としている。当遺跡周辺には、東に高安古墳群、南に恩智遺跡、北に水越遺跡が隣接している。

当遺跡内では、八尾市教育委員会(以下、市教委)や八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会)が発掘調査を実施し、弥生時代から中世に至る遺構及び遺物を検出している。

当地の周辺では、当研究会が実施の第2次調査で弥生～室町時代の遺構・遺物を検出。また、第3次調査では縄文時代中期末～近世の遺構、遺物を検出している。なかでも弥生後期～古墳前期一周溝墓・土器棺墓の墓域、竪穴住居等の居住域が確認されている。



第1図 調査地周辺図

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は地域密着型特別養護老人ホーム建設工事に伴うもので、当研究会が郡川遺跡内で行う第10次調査にあたる。調査面積は基礎工事部分を対象にした約184㎡について実施した。

調査の掘削に際して残土処理の問題により、外部への搬出ができないため調査区を2分割(北区と南区)して北部より調査を実施した。

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約0.5～1.0mを機械掘削し、以下0.3m前後について人力掘削を行い遺構の検出に努めた。

調査では、当地南部で実施した第7次調査の基準点測量点(3級3-1の座標点X=-152826.938m:Y=-33478.601m)を基点とし、当調査区のメッシュを設定した。標高はT.P.+19.018mを使用した。

調査の結果、弥生時代後期～奈良時代の遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナ箱にして4箱である。

## 2) 基本層序

調査区は、現地表面が東から西に低く、約50cmの差がみられる。検出した弥生時代後期の遺構検出面についても同様に西と東の高低差が0.8mであった。層序は調査区で基本となる7層を確認した。以下、各層について記す。

- 1層 盛土。層厚0.1～0.8m。盛土。
- 2層 客土・耕作土。層厚0.2～0.4m。畑等の耕作土である。
- 3層 7.5YR6/2灰褐色シルト混微粒砂。層厚0.2～0.3m。奈良～中近世の作土層と考えられる。
- 4層 7.5YR5/2灰褐色シルト混微粒砂。層厚0.3～0.4m。弥生時代後期の遺物を含む。
- 5層 7.5YR6/1灰褐色シルト混微粒砂。層厚0.2m前後。弥生時代後期の遺物を含む。
- 6層 7.5YR3/1灰褐色シルト混微粒砂。層厚0.15m前後。弥生時代後期の遺物を含む。
- 7層 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト細粒砂。層厚0.5m以上。

## 3) 検出遺構と出土遺物

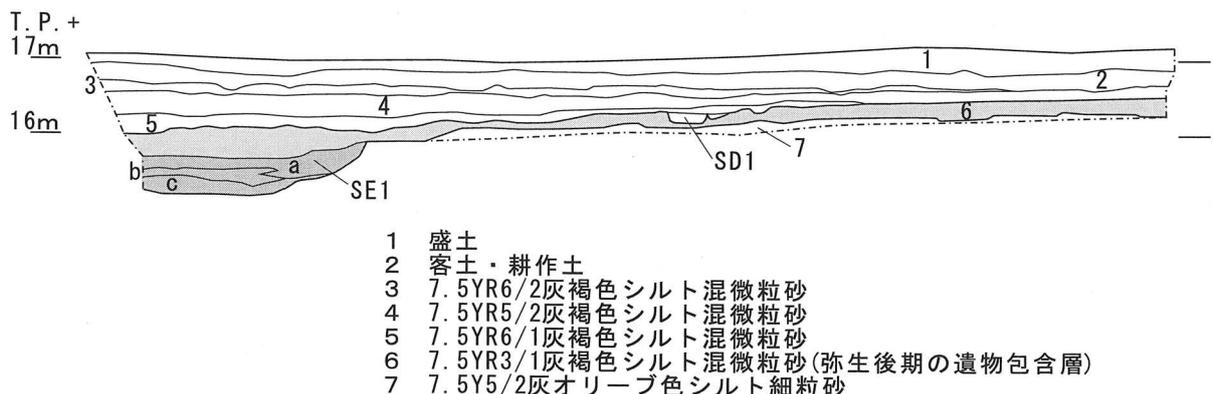
6層上面から切込む奈良時代の溝1条(SD1)、7層上面で弥生時代後期末の井戸3基(SE1～3)、土坑1基(SK1)、溝1条(SD2)を検出した。

以下では主な遺構について記述する。

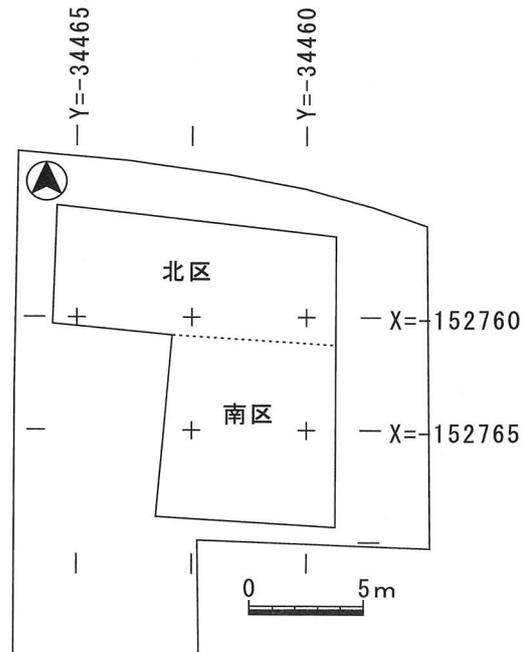
### 溝(SD)

#### SD1

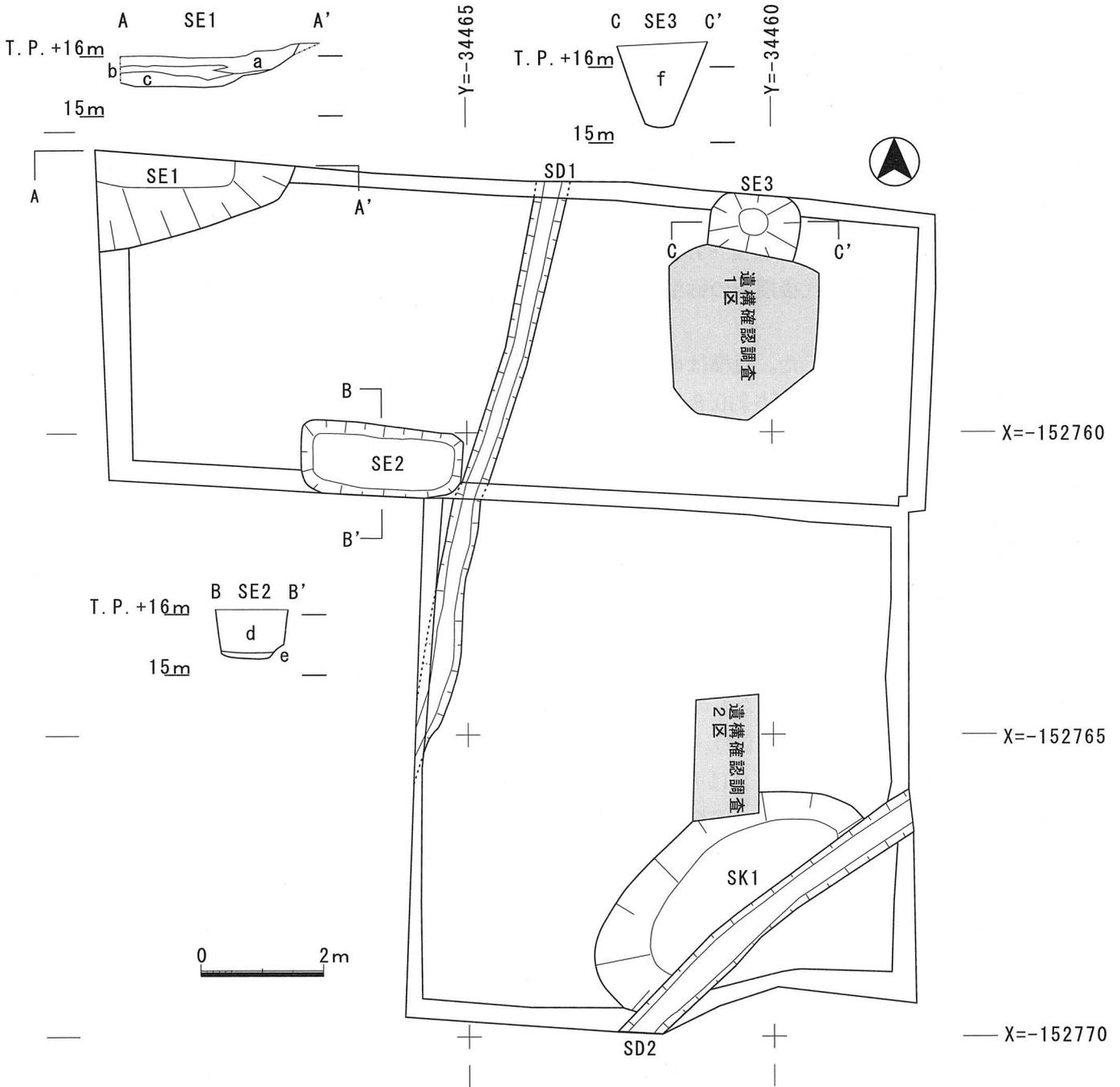
調査区西で検出した。南北方向に伸びる溝で、北側が高く、南側が低い。高低差は25cm程である。



第3図 北壁断面図 (S=1/100)



第2図 調査区位置図及び地区割り図



- SE1  
 a 7.5YR3/1黒褐色細粒砂混粘質土  
 b 7.5YR3/1黒褐色粘質土(粘着性有り)  
 c 10YR4/1褐灰色粘質土混細粒砂
- SE2  
 d 7.5YR3/1黒褐色粘土  
 e 7.5YR3/1黒褐色細粒砂混粘質土
- SE3  
 f N3/0暗灰色細粒砂混粘土

第4図 平面図・井戸断面図 (S=1/100)

る。溝の規模は幅0.3～0.5m、検出長約9m、断面形状は楕形を呈し、深さ10～20cm測る。埋土はN3/暗灰色細粒砂混粘質土・2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土混じり細粒砂・2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂で、土師器及び馬歯が出土した。馬歯は脆くなっていたが上歯・下歯が残った状態で出土した。時期は奈良時代ごろと思われる。

#### 井戸(SE)

##### SE1

調査区北西角で検出した。北西部は調査区外に至り、平面形状は不明である。規模は検出部で東西3.3m、南北1.7mを測る井戸である。断面形状は皿状を呈し、深さ約0.7mを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色細粒砂混粘質土・7.5YR3/1黒褐色粘質土(粘着性有り)・10YR4/1褐灰色粘質土混細粒砂である。弥生時代後期末の弥生土器の細片が少量出土した。

##### SE2

調査区中央西で検出した。規模は東西2.6m、南北1.2mを測る平面形状は長方形の井戸である。断面形状は皿状を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色粘土・7.5YR3/1黒褐色細粒砂混粘質土で、弥生時代後期末の弥生土器の細片が少量出土した。

##### SE3

調査区北東部で検出した。平面形状はほぼ円形を呈すると考えられる。南部は遺構確認調査で確認されている。規模は検出部で東西1.7m、南北1.6mを測る。断面形状はU字形を呈し、深さ約1.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土で、埋土内には弥生時代後期の弥生土器片が廃棄した状況で出土している。また井戸底には人頭大の石1個とほぼ完形の壺2点(3・4)を出土しており、井戸祭祀が行われたのではないかと考えられる。これらの遺物は弥生時代後期に比定されるものである。図化できたものは、第5図に掲載した19点である。器種別では把手付鉢(1)・壺(2～7)・高杯(8)・器台(9)・甕(10～19)である。1は口縁付近で緩やかに外反し、1対の把手が付く大型の鉢である。2はそろばん玉形の体部をもつ小型の壺。口縁部は欠損している。3はほぼ完形でそろばん玉形の体部から直立する頸部から外反する口縁で、4・5も同じである。8は高杯で、脚部のみの破片である。9は器台である。10～19は甕である。11は東部四国(讃岐地方か)の特徴をもつ甕である。13～18は体部外面にハケナデ、内面ナデの調整、口縁部は外反し、端部は丸いものと面をもつものがある。弥生時代後期末のV様式系の特徴をもつ甕である。

#### 土坑(SK)

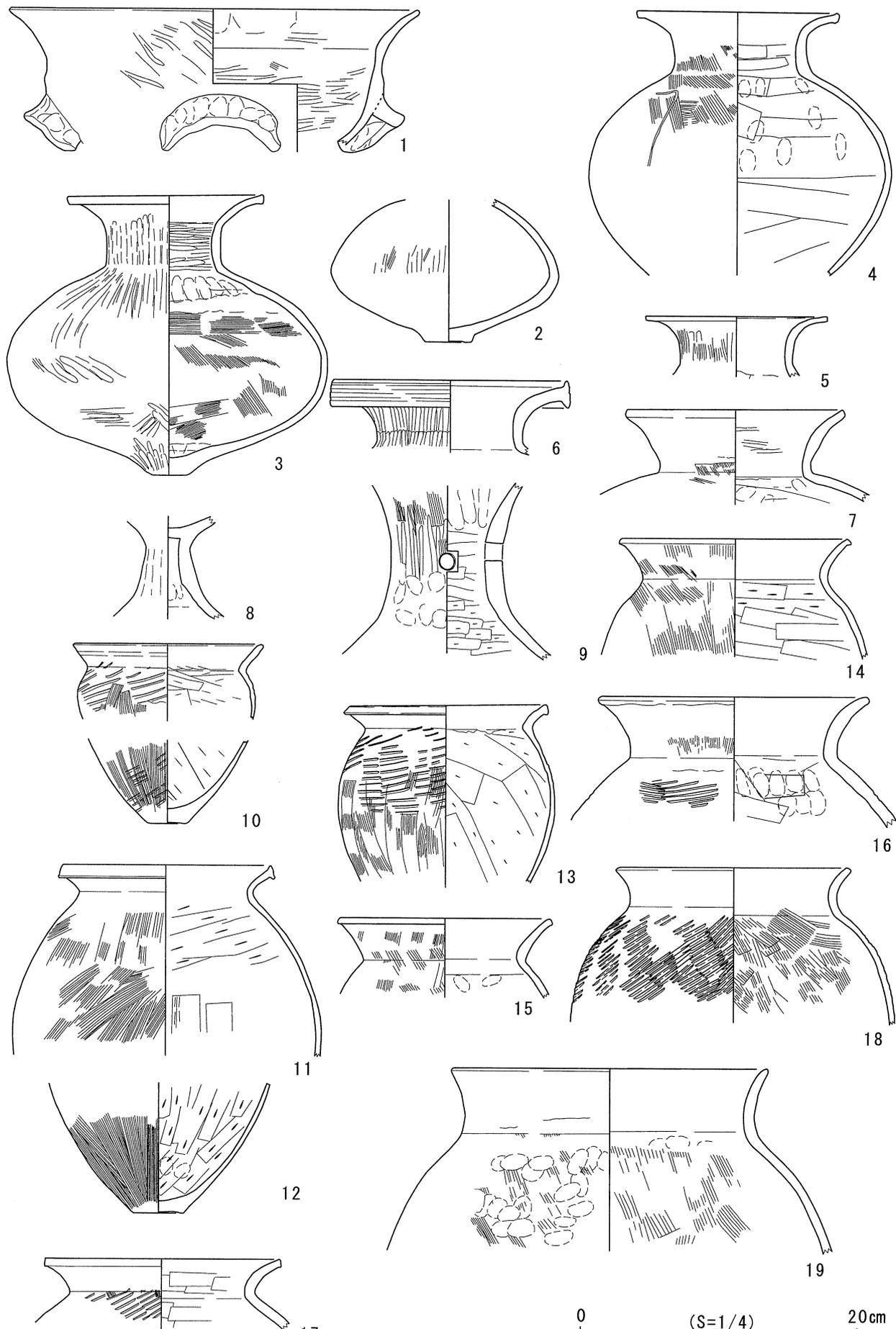
##### SK1

調査区南東で検出した土坑である。南東側は溝(SD2)に切られ、長径約5.0m、短径1.5m以上を測る。断面形状は椀状形で、深さ約0.6mを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色細粒砂混じりシルト質土・10Y2/1黒色細粒砂混粘土で、弥生時代後期末の弥生土器片が少量出土している。図示できたものは甕(20)、高杯(21)である。

#### 溝(SD)

##### SD2

調査区南東部で検出した。北東-南西方向に伸び、幅0.5～0.6mを測る溝である。土坑SK1を切っている。断面形状は皿状形で、深さ0.2mを測る。埋土は2.5YR5/1黄灰色シルト混じり粘土(粘着性有り)・10YR2/1黒色微粒砂混粘土・2.5YR6/1黄灰色粘土で、弥生時代後期末の弥生土



17 第5図 SE3出土遺物実測図

器が出土した。図示できたものはV様式系の特徴をもつ甕(22・23)である。22は口径15cm、器高20cm、体部径15cmを測り、体部外面に全体にタタキ目が施されている。

#### 4) 遺構に伴わない遺物

3～6層内で弥生時代後期から平安時代までの遺物を出土している。3層は奈良～平安時代後期の土師器・瓦器の破片を出土した。4～6層では弥生時代後期の弥生土器(V様式)の破片を出土した。器種では甕(24・25)・壺・高杯等である。

### 3. まとめ

今回の調査では弥生時代後期及び奈良時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期の時期は調査地南部で実施している当研究会第6・7・8次調査で検出しており、弥生時代後期の居住域の存在が想定されている。今回の調査地も同様、弥生時代後期の遺物包含層が全域で確認され、井戸・土坑・溝が検出された。また調査区北東に検出したSE3の埋土から多くの弥生土器が出土した。また、讃岐地方から持ち込まれた土器(甕11)が含まれており、当地域が他地域との交流があったことを示す資料である。

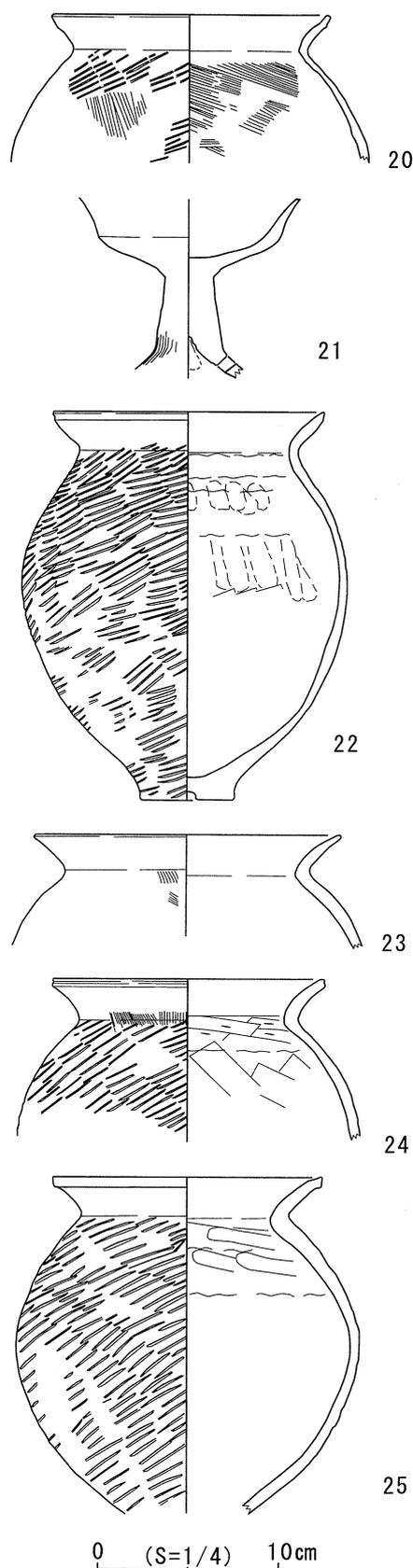
さらに調査区での遺物包含層は遺物密度が北東側に行くに従い遺物量も多く含まれているところからこの時期の居住域の中心が調査区の北東側に存在するのではないかと推測される。

次に、奈良時代に比定される南北溝(SD1)内から出土した馬歯は、古代の儀式である雨乞い、止雨等の天候に関連する祭祀遺構と考えられる。

以上が調査成果である。なお、今回当地北部に隣接している郡川東塚・西塚古墳の古墳時代の時期に関連する遺構・遺物は確認できなかった。

#### 参考文献

- ・原田昌則 1999「Ⅲ 郡川遺跡(第2次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・坪田真一 2006「Ⅰ 郡川遺跡(第3次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』財団法人八尾市文化財調査研究会報告

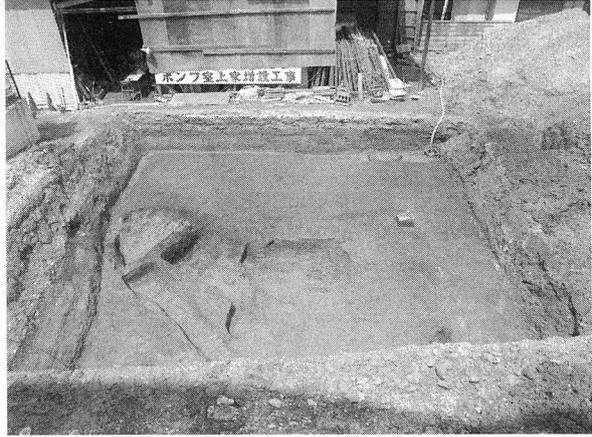


第6図 SK1・SD1・遺構に伴わない出土遺物実測図

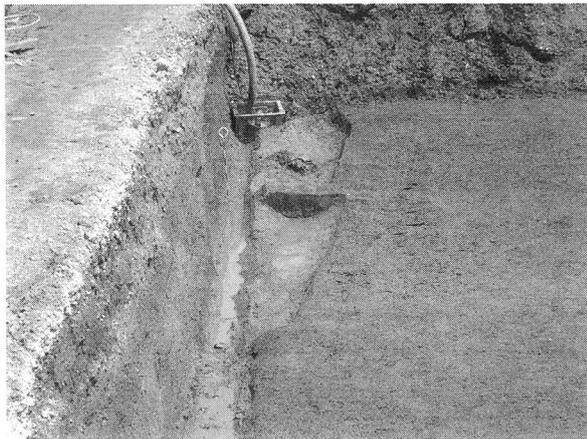
圖 版



北区全景(東から)



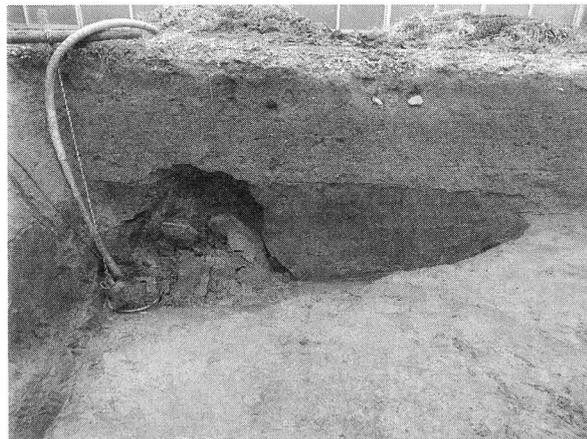
南区全景(東から)



南区SD1(南から)



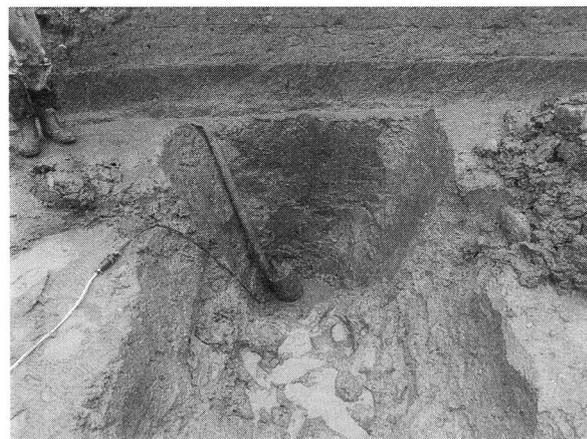
南区SD1出土馬歯(西から)



北区SE1(南から)



北区SE2(北から)



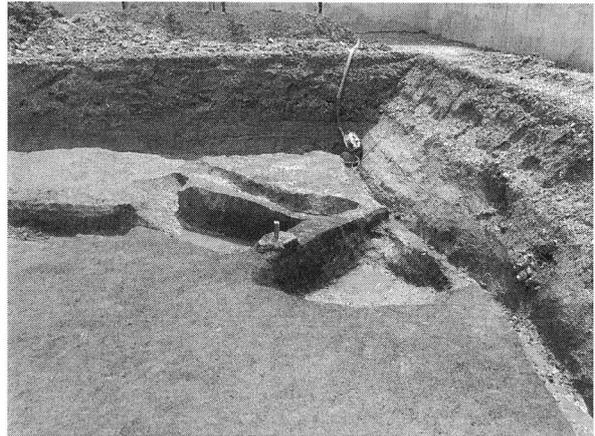
北区SE3完掘(南から)



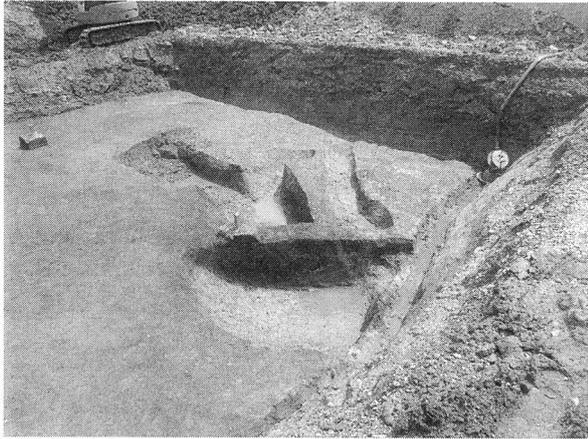
北区SE3底面より出土壺検出状況(西から)



SK1完掘(南から)



SK1・SD2(西から)



SK1・SD2(南西から)



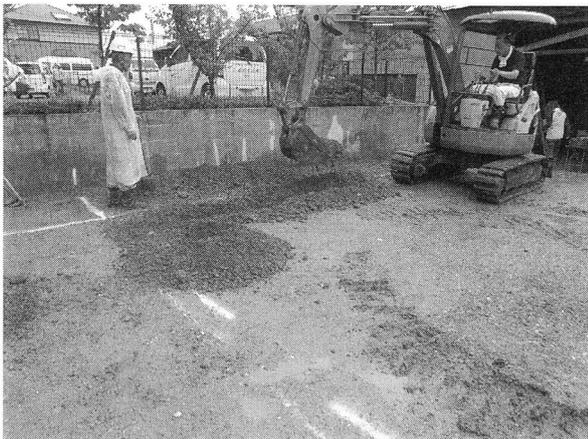
北区調査風景(東から)



南区人力掘削状況(南から)



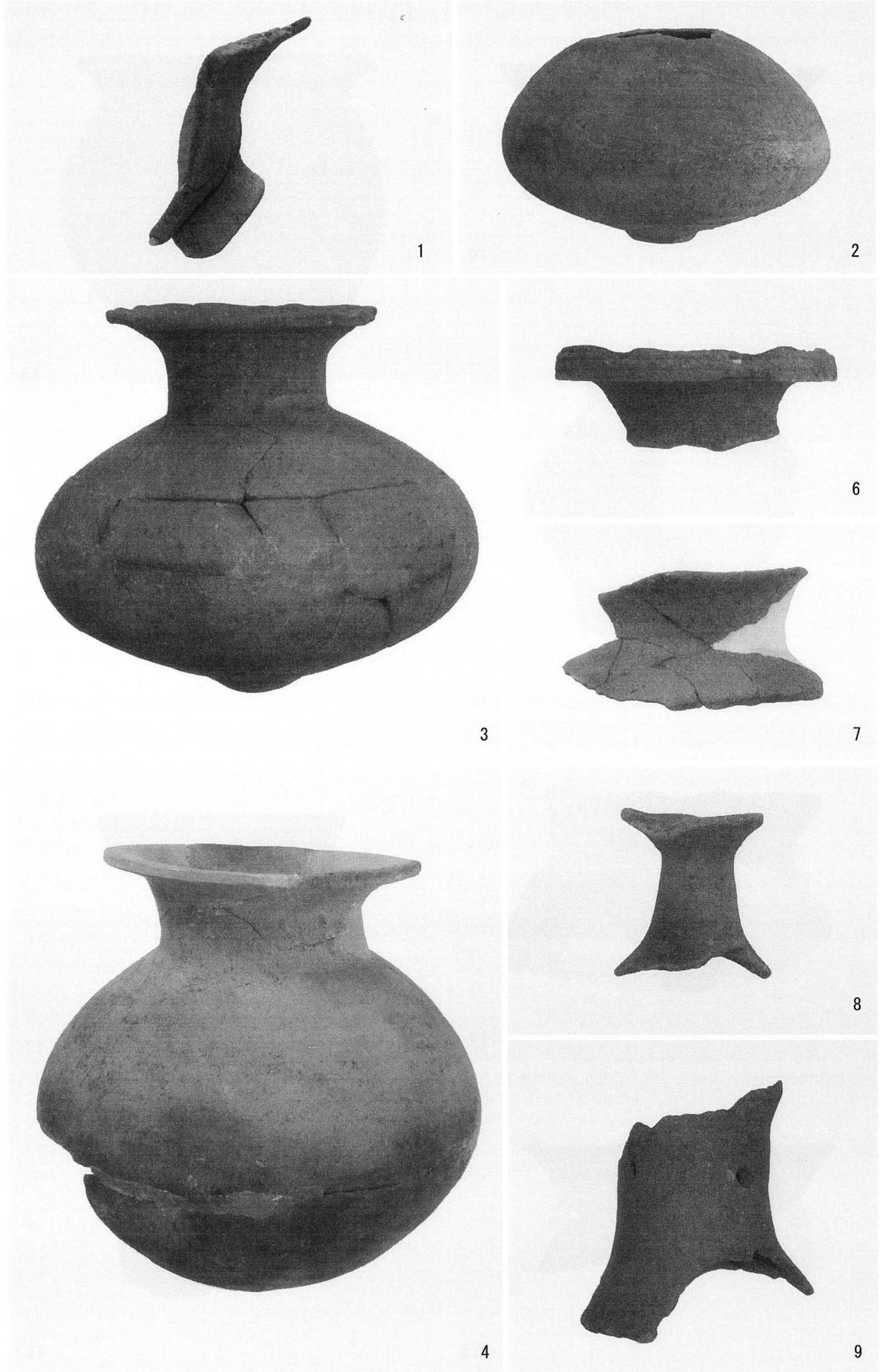
北区機械掘削、側溝掘り(南から)

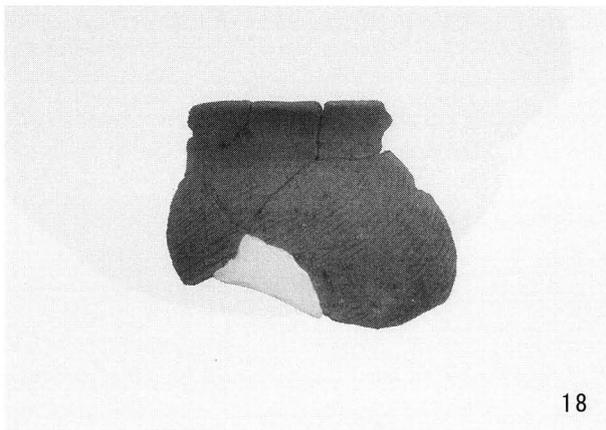
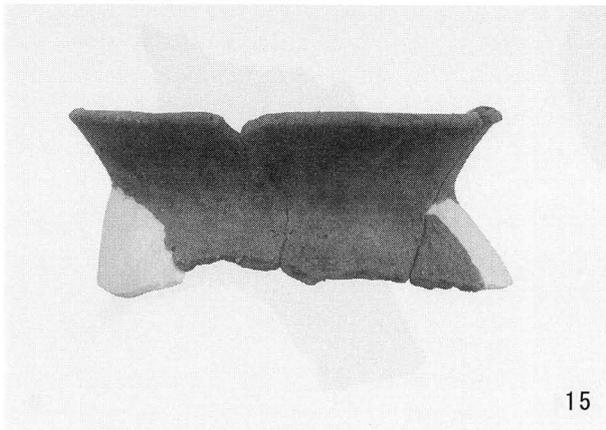
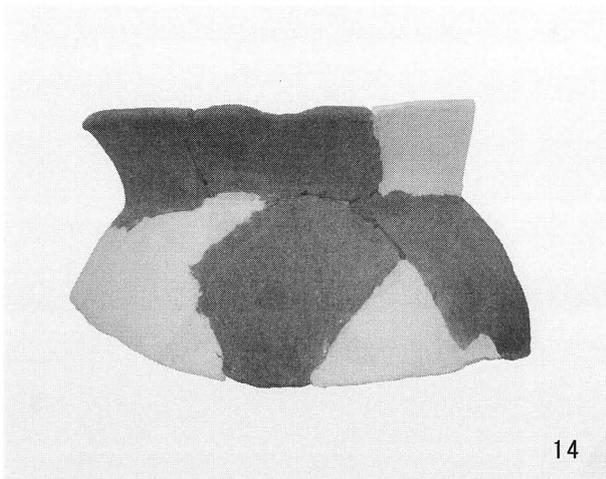
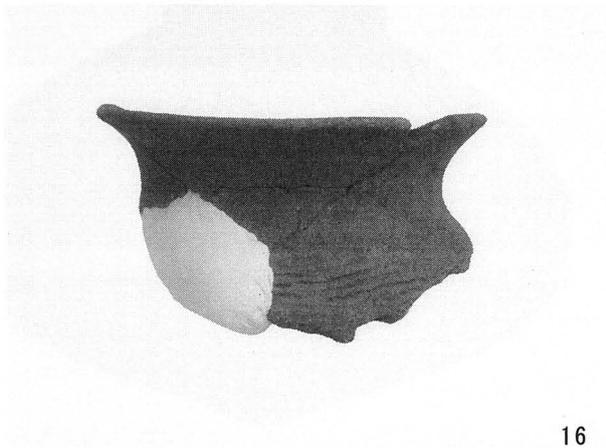
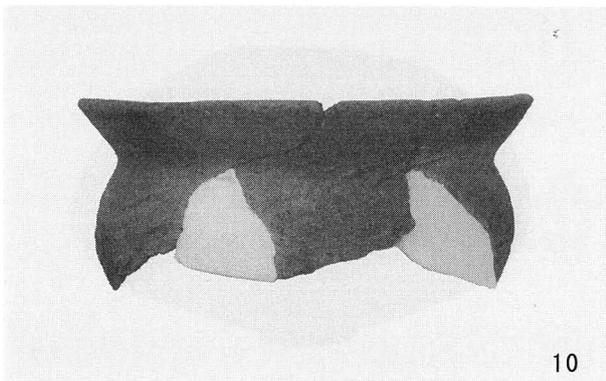


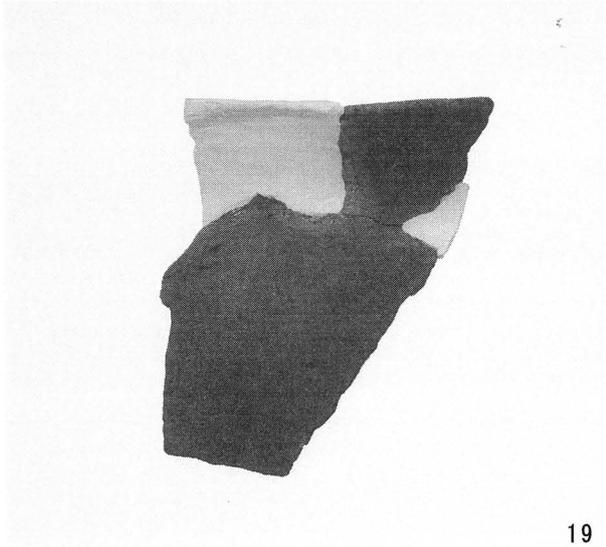
南区機械掘削(北から)



調査前(東から)







19



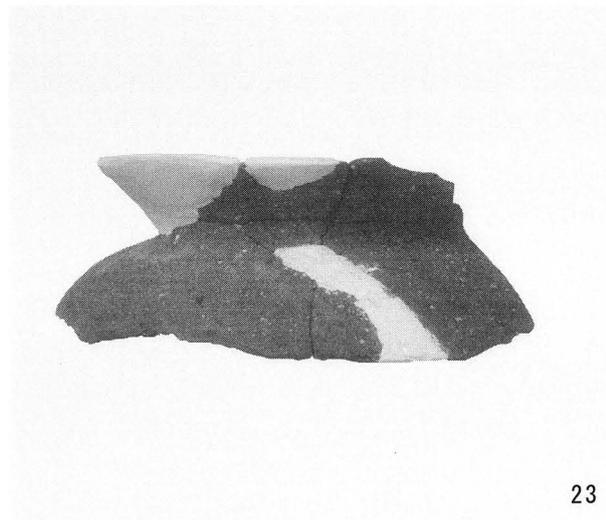
21



22



25



23

SE 3 19  
 SK 1 21  
 SD 1 22・23  
 遺構に伴わない遺物 25

### Ⅲ 美園遺跡第 8 次調査 (MS 2010 - 8)

# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市美園町四丁目で実施した病院建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する美園遺跡第8次調査の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年9月27日～10月14日（実働11日間）にかけて、高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約167㎡である。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成22年12月21日に完了した。

## 本文目次

1. はじめに	57
2. 調査概要	58
1) 調査の方法と経過	58
2) 基本層序	59
3) 検出遺構と出土遺物	61
4) 遺構に伴わない出土遺物	67
3. まとめ	67

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図(S=1/5000)	57
第2図 調査区配置図(S=1/500)	58
第3図 第1調査区西壁断面図	59
第4図 第2調査区西壁断面図	60
第5図 第1調査区平面図	61
第6図 遺構内出土遺物実測図	62
第7図 第2調査区平面図(S=1/100)	63
第8図 第2調査区S E 201平断面図	64
第9図 S E 201出土遺物実測図	64
第10図 遺構に伴わない出土遺物実測図	66

## 図版目次

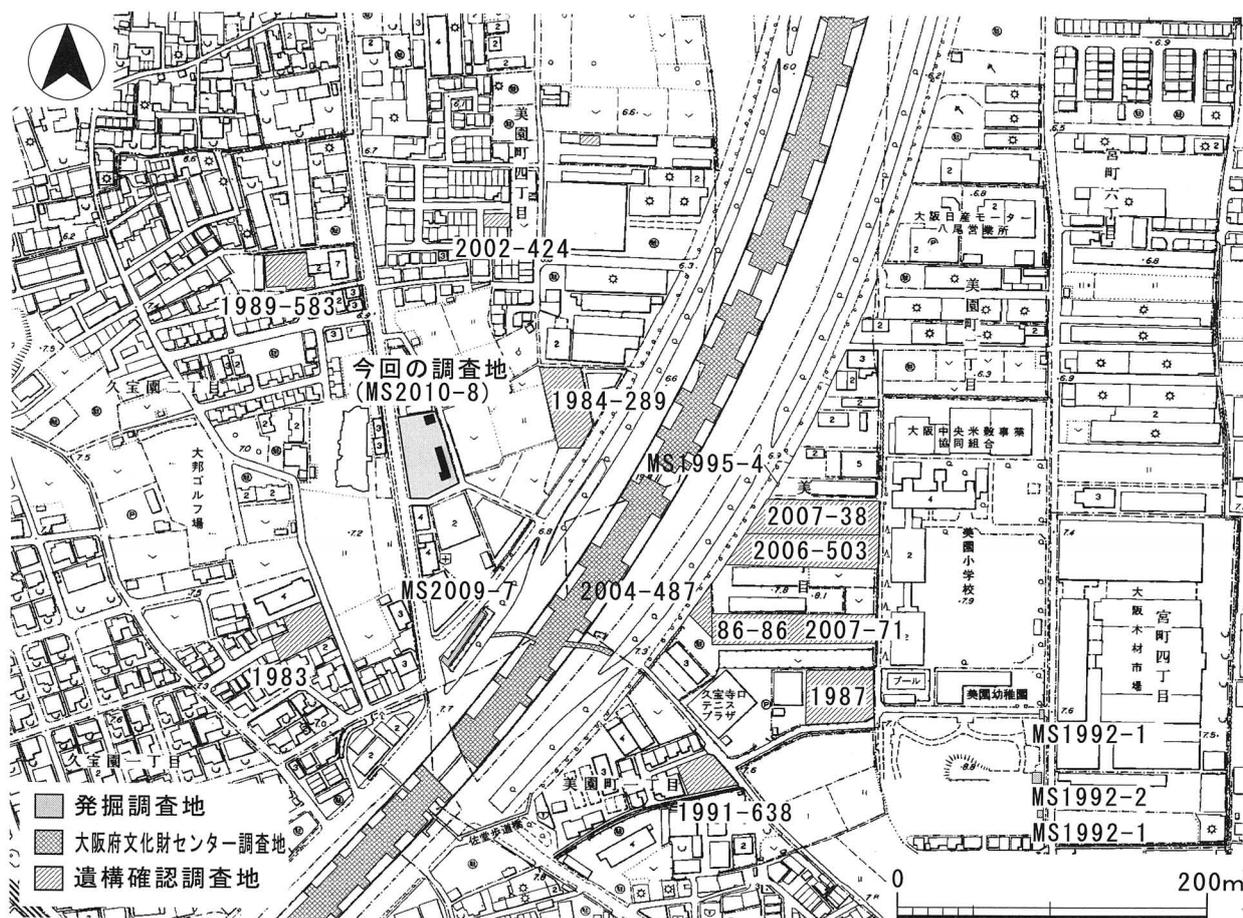
- 図版1 第1調査区 全景(西から) 全景(東から) S K 101(西から) S K 101瓦片出土状況(南から) S K 102(北から) S K 102(南東から) S K 103(西から) S K 103(西から)
- 図版2 第2調査区 北部上面(南から) 北部上面(北から) 上面S E 201(西から) 上面S E 201断面(北から) 北部上面S K 201(西から) 北部上面S K 201断面(東から) 北部上面S D 201(北から) 北部上面調査作業(北から)
- 図版3 第2調査区 北部上面全景(南から) 北部上面全景(北から) S K 201(西から) S E 201全景(北から) S E 201井戸側(曲物)内 出土底板(上から) S E 201井戸側(曲物)内土師器小皿(上から) S E 201井戸側(曲物)立割り(上から) S E 201井戸側(曲物)立割り(北から)
- 図版4 第2調査区 S E 201立割り(北から) S E 201断面(北から) S E 201実測状況(北から) S E 201曲物検出状況(北から) 南部全景(南から) 南部全景(北から) S K 202(南から) S K 205(東から)
- 図版5 遺物写真 第1調査区 S K 101 7・8 第2調査区 S E 201 10 遺構に伴わない出土遺物 12・17・29

## Ⅲ 美園遺跡第8次調査 (MS2010-8)

### 1. はじめに

美園遺跡は八尾市の北西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川右岸にあたる地域で弥生時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では美園町一～四丁目、久宝園一～三丁目、佐堂町一～三丁目、宮町四丁目に位置し、西と北側は東大阪市域に広がっている。周辺の遺跡では、北東に山賀遺跡、南西に佐堂遺跡、南東に宮町遺跡および穴太廃寺推定地が近接している。

当遺跡における既往調査は八尾市教育委員会が『佐堂遺跡』として昭和53年度の調査で弥生時代終末～古墳時代初頭にあたる壺・甕、奈良～平安時代に比定できる堆積層、その上層で土師器・須恵器・瓦器の土器片を検出している。また昭和54年度の調査では、鎌倉～室町時代の遺物包含層の下層部分で、時期不明の大小2個の壺を用いた「合わせ口壺棺」が埋納した状態で検出している(註1)。さらに同市教委は昭和56年度の調査で、平安時代の河道跡、古墳時代前期の建物・溝・井戸を検出している(註2)。また、昭和55年～59年度にかけては当調査地の東約150mの地点で、(財)大阪府文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う調査が実施され、縄文時代～近世に至るまでの各時代の遺構・遺物が検出された。特に古墳時代前期の時期ものは、堅穴住居・掘立柱建物とともに『美園古墳』と称した方墳が発見され、その周溝内には家形埴輪や壺形埴輪が出土した。さらに飛鳥～奈良時代の水田遺構や自然河川から墨書土器や木簡・和同開珩が出土している(註3)。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

註

註1 米田敏幸1981「6. 佐堂遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報 八尾市文化財調査報告7』  
八尾市教育委員会

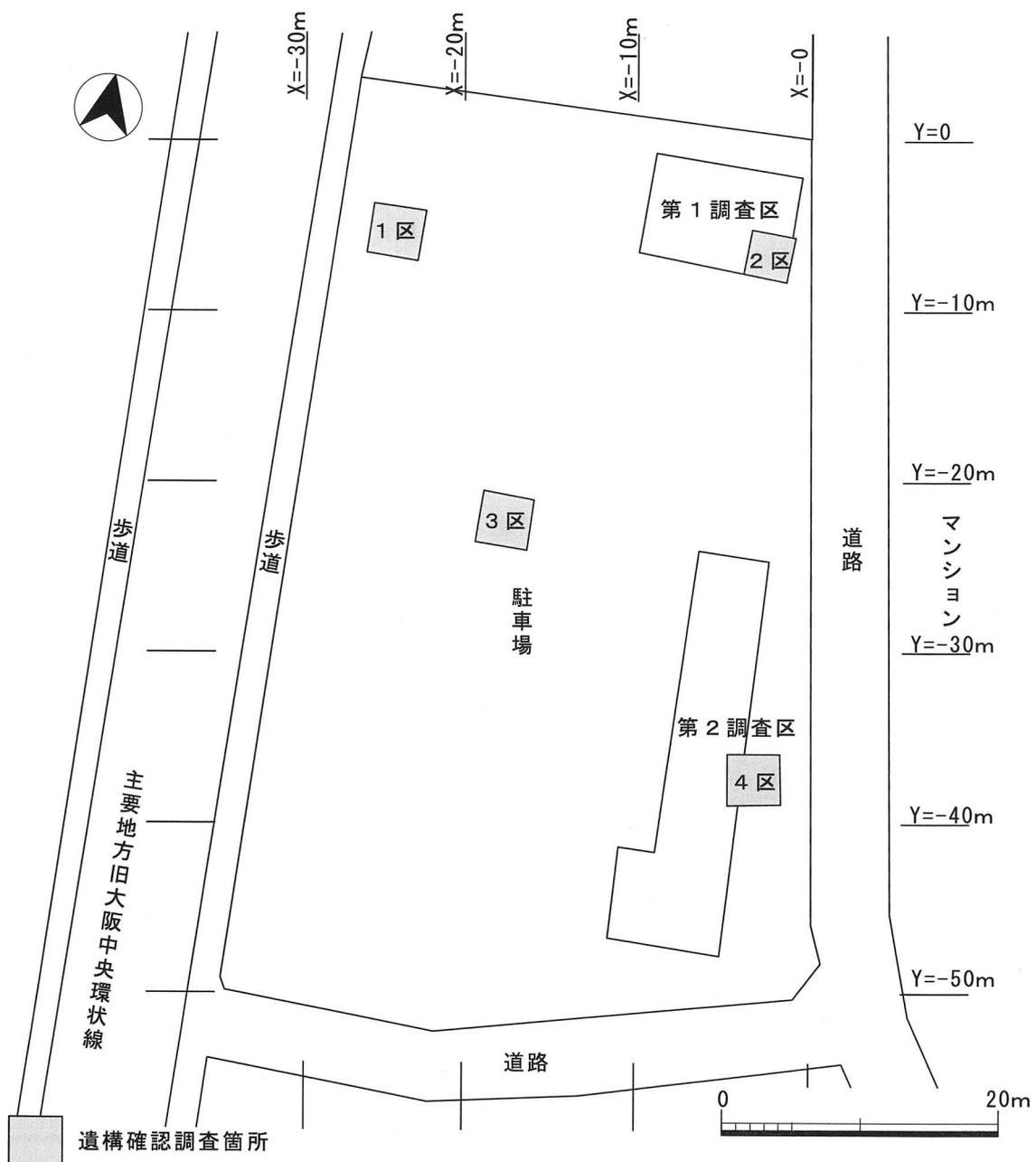
註2 米田敏幸 1983.3「第5章 美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981  
年度』八尾市教育委員会

註3 1985『美園』（財）大阪文化財センター

## 2. 調査の概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は病院建設工事に伴うもので、当研究会が美園遺跡で実施した第8次調査にあたる。調査面積は基礎工事部分を対象にした調査区2箇所です。計約167㎡について発掘調査を実施



第2図 調査区配置図 (S=1/500)

した。

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.6～1.8mを機械掘削し、以下0.3m前後について人力掘削を行い遺構の検出に努めた。

調査では、当地南部の基準点測量点(3級基準)の標高を使用した。調査区の区割りは北東部の敷地区画点を基準点とした。

調査の結果、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナ箱にして3箱である。

## 2) 基本層序

調査区では、現在駐車場となっており、敷地全体がアスファルトで舗装されている。調査区は北東部の第1調査区と南東部の第2調査区の2箇所である。基本となる層を摘出して層序とした。以下、各層について記す。

### 第1調査区

第1層 盛土。層厚0.1～0.8m。アスファルト・バラス・盛土。現在有料駐車場で舗装しており、雨水の排水のため中央部が高く、四方が低くなっている。また駐車場前の既往建物のコンクリート床が一部に残存している。

第2層 客土・旧耕作土。層厚0.2～0.4m。畑等の作土である。

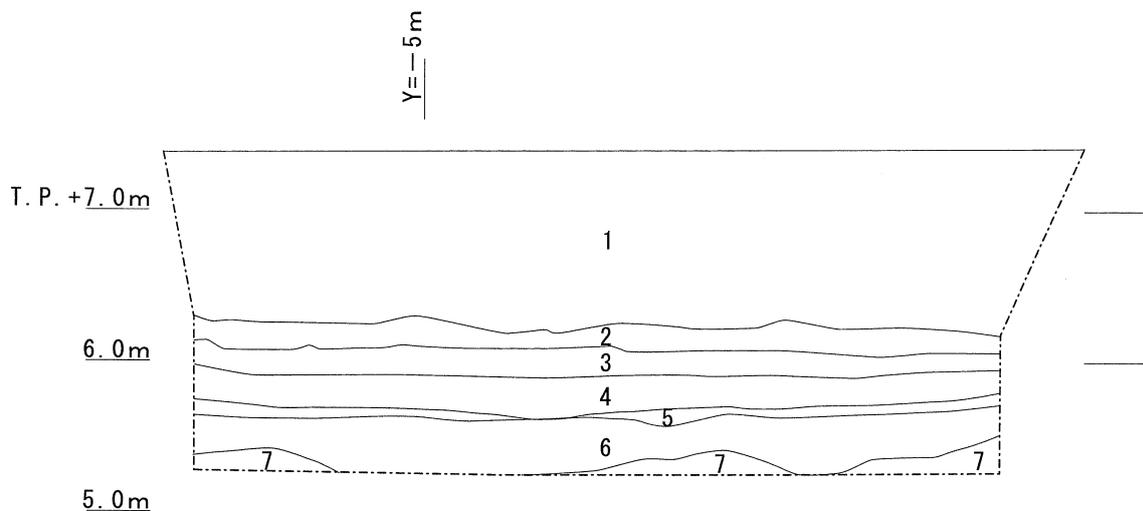
第3層 暗緑灰色～灰黄色シルト質土。層厚0.15～0.25m。近世の作土と考えられる。

第4層 浅黄色～灰オリーブ色微粒砂混シルト質土。層厚0.3～0.4m。攪拌がみられる。ほぼ水平堆積で中近世ごろの作土層と思われる。

第5層 灰黄褐色シルト混じり粘質土。層厚0.1m前後。

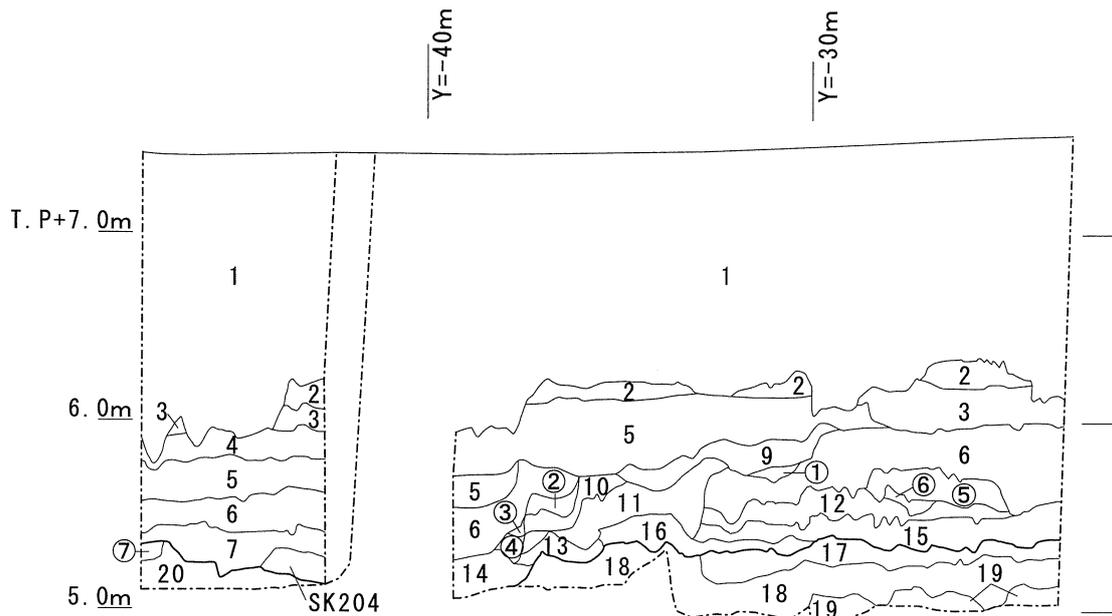
第6層 灰褐色粘土質土。層厚0.25～0.4m前後。土師器・瓦器の細片を含む。

第7層 灰褐色細粒砂混粘質土。層厚0.3m以上。



- 1 盛土・攪乱
- 2 客土・旧耕作土
- 3 暗緑灰色～灰黄色シルト質土
- 4 浅黄色～灰オリーブ色微粒砂混シルト質土
- 5 灰黄褐色シルト混じり粘質土
- 6 灰褐色粘質土
- 7 灰褐色細粒砂混粘質土

第3図 第1調査区西壁断面図 (S=1/50)



- 1 盛土・攪乱
  - 2 旧耕土
  - 3 暗緑灰色～灰黄色シルト質土
  - 4 灰黄褐色シルト混じり粘質土
  - 5 浅黄色～灰オリーブ色微粒砂混シルト質土
  - 6 灰褐色粘質土
  - 7 褐灰色細粒砂混粘質土
  - 8 灰白色細粒砂
  - 9 にぶい褐色細粒砂混微粒砂
  - 10 灰白色微粒砂混じり細粒砂
  - 11 褐灰色シルト質土
  - 12 にぶい黄橙色粗粒砂～細粒砂
  - 13 褐灰色シルト質土
  - 14 にぶい黄褐色シルト混粘質土
  - 15 にぶい褐色細粒砂混微粒砂
  - 16 灰黄褐色シルト質粘質土
  - 17 にぶい黄橙色シルト質土
  - 18 青灰色粘質土(粘着性あり)
  - 19 灰色砂礫混細粒砂
  - 20 黄灰色細粒砂混シルト質土
- ① 灰黄色シルト質粘質土
  - ② 黄灰色粗粒砂混じり細粒砂
  - ③ 黄灰色細粒砂混シルト質土
  - ④ 灰白色粘質シルト
  - ⑤ 褐灰色砂礫混微～細粒砂
  - ⑥ 褐灰色砂礫混細粒砂
  - ⑦ 灰オリーブ色粘質土混シルト質土

第4図 第2調査区西壁断面図(縦S=1/40、横S=1/100)

### 第2調査区

第1・2層は第1調査区と同じ。

第3層 暗緑灰色～灰黄色シルト質土。層厚0.2m前後。作土層である。

第4層 灰黄褐色シルト混じり粘質土。層厚0.5m前後。作土層である。

第5層 浅黄色～灰オリーブ色微粒砂混シルト質土。層厚0.2～0.3m前後。

第6層 灰褐色粘質土。層厚0.3m前後。褐色(Fe)の斑点がある。

第7層 褐灰色細粒砂混粘質土。層厚0.1～0.25m前後。褐色(Fe)の斑点がある。

第8層 灰白色細粒砂。層厚0.1m前後。ラミナがみられる。

第9層 にぶい褐色細粒砂混微粒砂。層厚0.2m前後。酸化鉄分(Fe)が多く含まれる。

第10層 灰白色微粒砂混じり細粒砂。層厚0.2m前後。

第13層 褐灰白色シルト質土。層厚0.1～0.15m前後。中世の時期の遺物を含む層。

第14層 にぶい黄褐色シルト混粘質土。層厚0.1～0.2m前後。

第15層 にぶい褐色細粒砂混微粒砂。層厚0.3m前後。粘着性あり。

第16層 灰黄褐色シルト質粘質土。層厚0.1~0.2m前後。

第17層 にぶい黄橙色シルト質土。層厚0.2m前後。上面で遺構を検出。

第18層 青灰色粘質土。層厚0.2m。粘着性あり。

第19層 灰色砂礫混細粒砂。層厚0.3m。

第20層 黄灰色細粒砂混シルト質土。層厚0.2m以上。

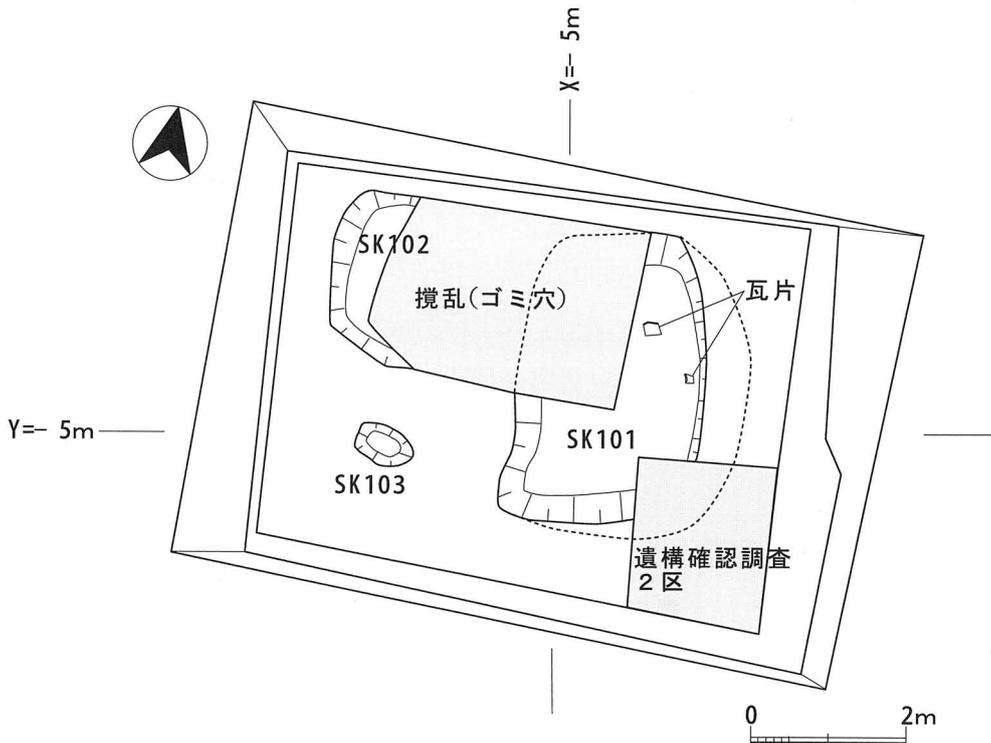
### 3) 検出遺構および出土遺物

第1調査区では、鎌倉時代の土坑3基(SK101~103)を検出した。第2調査区は、平安時代後期~鎌倉時代の井戸1基(SE201)、土坑6基(SK201~206)、溝2条(SD201・202)を検出した。以下、遺構について記す。

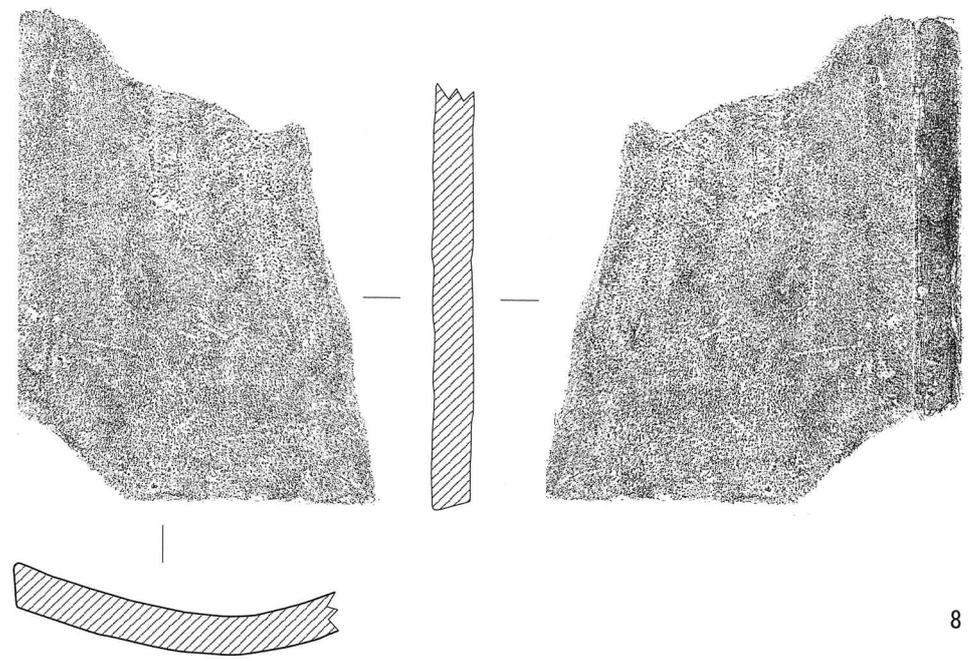
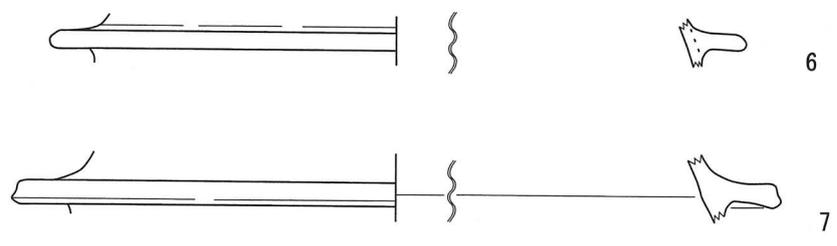
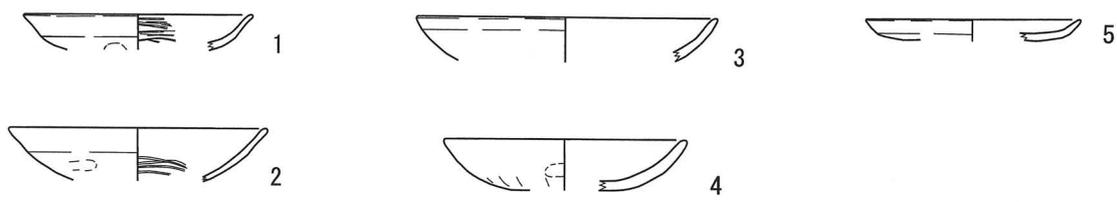
#### 第1調査区

##### SK101

調査区北東部で検出した。北西部は攪乱(ゴミ穴)により切られ、東は遺構確認調査2区で検出している。平面形状は楕円形を呈するものと考えられる。規模は検出部で東西径2.5m、南北径3.5mを測る土坑状遺構である。断面形状は椀状形を呈し、深さ約0.56mを測る。埋土は灰黄褐色~褐灰色微粒砂混じり粘質シルト、にぶい黄橙色シルト質土、灰色シルト混粘質土、灰色シルト混粘質土である。埋土内から鎌倉時代の瓦器の椀片(1・2)、瓦質の羽釜(6)、土師器の羽釜片(7)、平瓦片(8)などが少量出土した。1・2は瓦器で杯部の口縁部分のみ破片である。内面ヘラミガキ、外面指ナデがみられる。8は平瓦で凹面に布目、凸面に縄目がある。



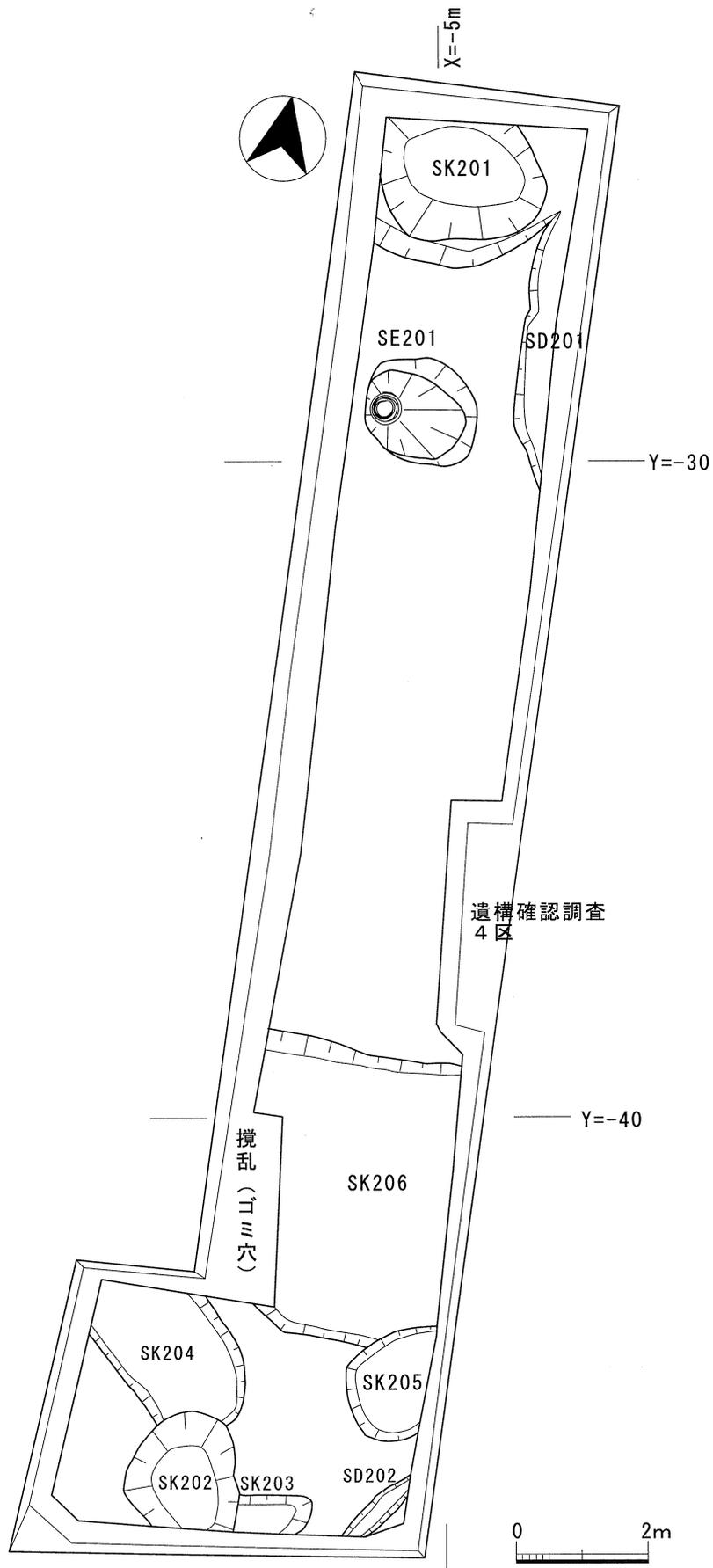
第5図 第1調査区平面図 (1/100)



S K101- 1・2・6・7・8  
 S K203- 3  
 S K204- 4・5



第6図 遺構内出土遺物実測図



第7図 第2調査区平面図 (S=1/100)

S K 102

調査区北西部で検出した。東部は攪乱により削平されている。規模は南北径1.8m、東西径0.7m以上を測る。断面形状は皿状を呈し、深さ約0.35mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質土、オリーブ灰色シルト混粘質土、暗オリーブ灰色粘質土で、鎌倉時代の土師器の細片がごく少量出土した。

S K 103

調査区南西部で検出した。平面形状は楕円形を呈する土坑である。規模は長径1.1m、短径0.6mを測る。断面形状は皿状を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は上層が砂礫を微量に含む灰色粘質土、下層が粘着性のあるオリーブ灰色粘質土である。鎌倉時代の土師器の細片がごく少量出土した。

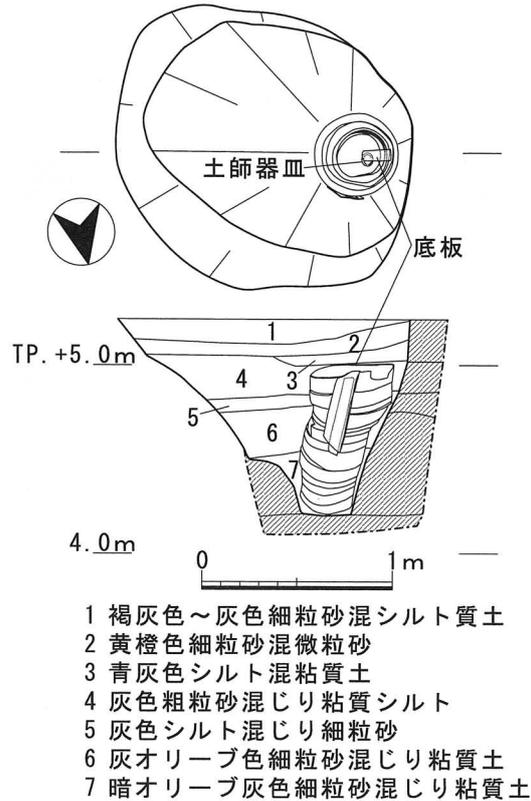
第2調査区

井戸(S E)

S E 201

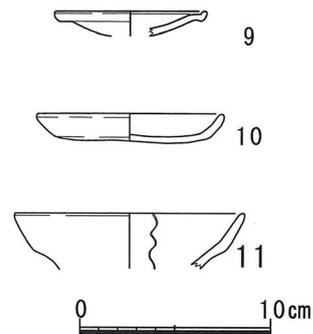
調査区北部で検出した。平面形状はほぼ円形を呈する掘形の中心よりやや西側に井戸側とした曲物を設けている。井戸側(曲物)は上部曲物径約41cm、最下部曲物径30cmを測る。曲物の高さ8~12cmで、厚み5mmである。曲物は14個を積み重ね、やや西に傾いており、上部の径がやや大きく、下部に行くに従い小さくなり内側に入り込む形で重なり合っている状態で検出した。掘形は検出部で、東西径2.1m、南北径1.9mを測るほぼ円形を呈する。

断面形状はU字形を呈し、深さは約0.85mを測る。掘形埋土は上層で褐灰色~灰色細粒砂混シルト質土、黄橙色細粒砂混微粒砂、青灰色シルト混粘質土、掘方埋土で灰色粗粒砂混じり粘質土、灰色シルト混じり細粒砂、灰オリーブ色細粒砂混じり粘質土、暗オリーブ灰色細粒砂混じり粘質土である。埋土内には上層で鎌倉時代の土師器小片のもの、井戸側内埋土で平安時代後期のものと思われる土師器小皿片(9)、さらには井戸側内の中位ぐらいに曲物の底板と思われる板材が出土。その板材を除いた下から土師器小皿(10)・椀(11)が出土した。10は口径9.7cm、器高2.05cmを測る完形品で、11は細片である。井戸側内埋土は灰色細粒砂~微粒砂混シルト質土である。また井戸側外の北側で曲物の底板と思われる板材2枚を使用して曲物の椀木としていたとようである。



第8図 南区S E 201平断面図 (S=1/40)

- 1 褐灰色~灰色細粒砂混シルト質土
- 2 黄橙色細粒砂混微粒砂
- 3 青灰色シルト混粘質土
- 4 灰色粗粒砂混じり粘質シルト
- 5 灰色シルト混じり細粒砂
- 6 灰オリーブ色細粒砂混じり粘質土
- 7 暗オリーブ灰色細粒砂混じり粘質土



第9図 S E 201出土遺物実測図

## 土坑(SK)

## SK201

調査区北部で検出した土坑である。東西長3.7m以上、南北長約2.8m以上を測り、北部・西部は調査区外に至り、東部はSD202に切り合う。断面形状は椀状形で、深さ約0.5mを測る。埋土は褐灰色シルト質土(微量の砂礫を含む)、にぶい黄橙色細粒砂混微粒砂、青灰色シルト混粘質土で、平安時代の土師器、瓦器の細片がごく少量出土している。

## SK202

調査区南部で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、東西径約1.65m、南北径約2.1mを測り、東側がSK203を切り、北側はSK204を切っている。断面形状は椀状形で、深さ約0.5mを測る。埋土は灰色シルト混粘質土で、平安時代後期の土師器、瓦器の細片がごく少量出土している。

## SK203

調査区南部で検出した土坑である。SK202に切られる。長径約1.1m、短径0.6mを測る。断面形状は椀状形で、深さ約0.2mを測る。埋土は灰色シルト混粘質土で、平安時代の土師器、瓦器(3)の細片がごく少量出土している。

## SK204

調査区南部で検出した土坑である。南側はSK202に切られ、北側は調査区外に至る。規模は長径約3.0m、短径1.7mである。断面形状は皿状形で、深さ0.5mを測る。埋土は灰色シルト混粘質土で、鎌倉時代の土師器皿(4・5)が出土した。

## SK205

調査区南部で検出した土坑である。東側は調査区外に至り、北側はSK206を切っている。平面形状は半円形を呈す。東西径約1.5m以上、南北径1.8mを測る。断面形状は椀状形で、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色シルト混粘質土で、平安時代の土師器、瓦器の細片がごく少量出土している。

## SK206

調査区南部で検出した。南側はSK205に切られ、西側、東側は調査区外に至る土坑である。東西径約3.6m、南北径4.0mを測る。断面形状は椀状形で、深さ約0.15mを測る。埋土内で、平安時代の土師器、瓦器の細片がごく少量出土している。

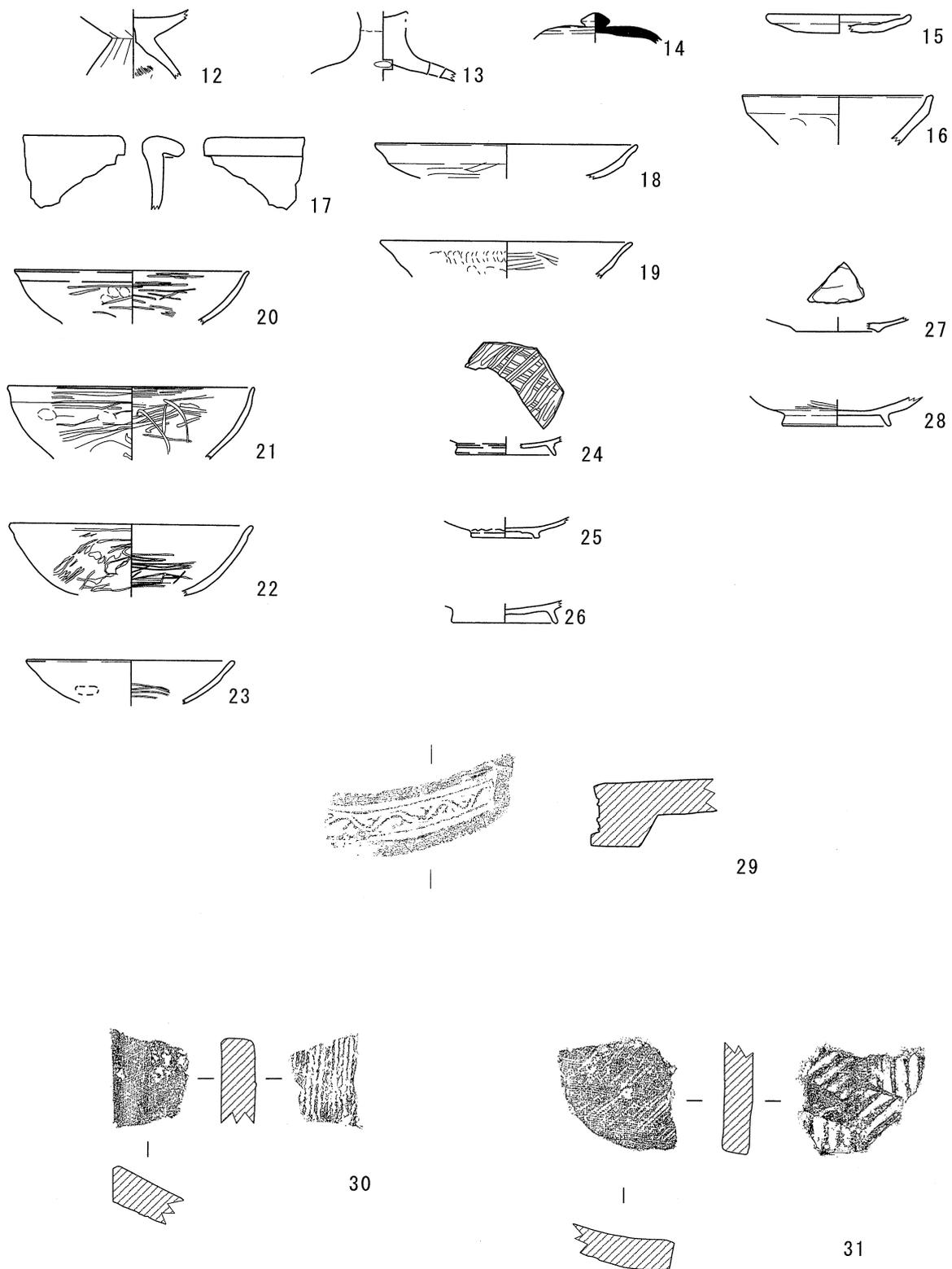
## 溝(SD)

## SD201

調査区の北東部で検出した、南北方向の溝で、北はSK201と切り合い、南は調査区外に至る。検出長4.1m、幅0.7m前後、深さ0.55mを測り、断面皿状形である。埋土は褐灰色シルト質土(微量に砂礫を含む)である。遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土した。

## SD202

調査区の南東部で検出した。南西-北東方向に伸びる溝で、南西・北東ともに調査区外に至る。幅0.4~0.6m、深さ0.4mを測り、断面皿状形である。埋土は灰色シルト混粘質土である。遺物は土師器の細片をごく微量に出土している。



第10図 遺構に伴わない出土遺物実測図

## 4) 遺構に伴わない出土遺物

第1調査区は第6層、第2調査区は第8層～第16層で土師器・瓦器片が出土している。これらの大半の遺物は細片で器種が不明のものが多かった。図化できたものもごく細片ではあるが、第10・11図に掲載した。12は古墳時代前期の土師器の器台、13は高杯でどちらも脚部のみの破片である。14は奈良時代の須恵器の宝珠つまみ付杯蓋である。15～31は平安時代後期～鎌倉時代に比定されるもので、15は土師器の小皿、16は椀、17は鉢。18～28は瓦器の椀で、杯部は深く、高台もしっかりしている。29～31は瓦である。29は唐草文軒平瓦、30は凹面布目、凸面縄目、31は凹面布目、凸面綾杉文タタキを施した平瓦である。

## 3. まとめ

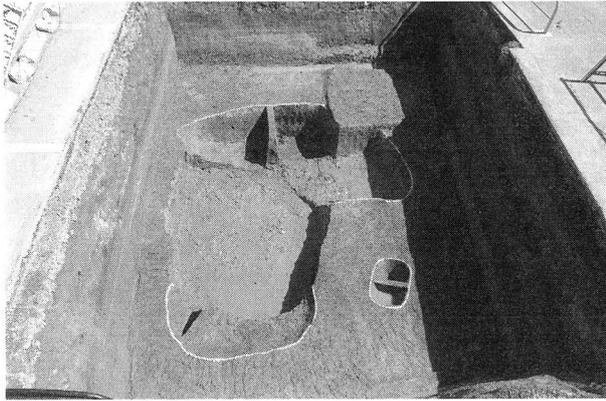
今回の調査では平安時代後期～鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出した。この時期のものは当地南部約150m付近で実施した当研究会第7次調査でも検出しており、鎌倉時代の居住域の存在を想定している。当地も同様、ほぼ同時期の遺構・遺物が確認されており、居住域が当地まで続くものと考えられる。

特に南区で検出した曲物井戸は、生活水として使用されていた可能性が考えられる。第7次調査では3～5段の曲物を積み重ねた曲物井戸が検出されている。今回検出した井戸(S E 201)は井戸側として曲物14段重ねて作られており、第7次調査で検出した曲物井戸の倍以上の積み重ねており、第7調査地の井戸の地下水位より低いものと考えられる。

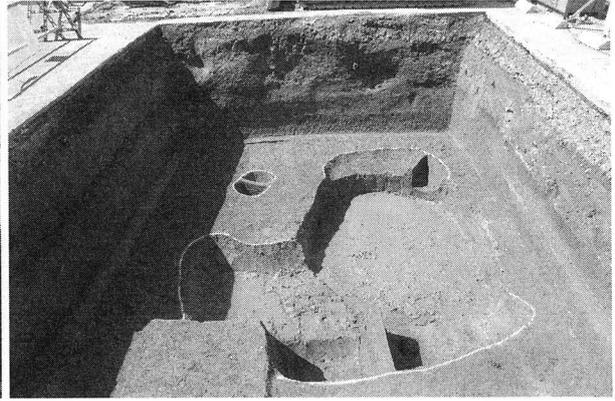
## 参考文献

- ・米田敏幸 1983.3 「第5章 美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・1985 『美園』(財)大阪文化財センター
- ・渡辺昌宏 1988.3 「美園遺跡出土の庄内式土器について」『八尾市文化財紀要3』八尾市教育委員会
- ・岡田清一 1993 「29.美園遺跡第2次調査(MS92-2)」『平成4年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1996 「XIV美園遺跡(第4次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋・岡田清一 2003 「美園遺跡(第5次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会

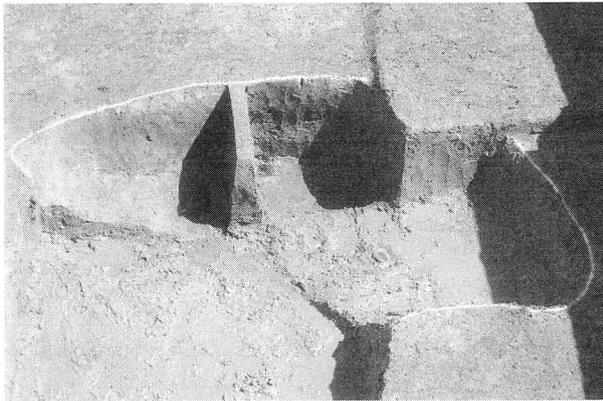
版 圖



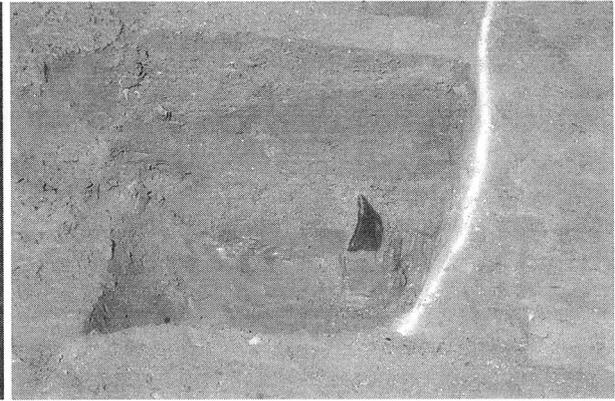
全景(西から)



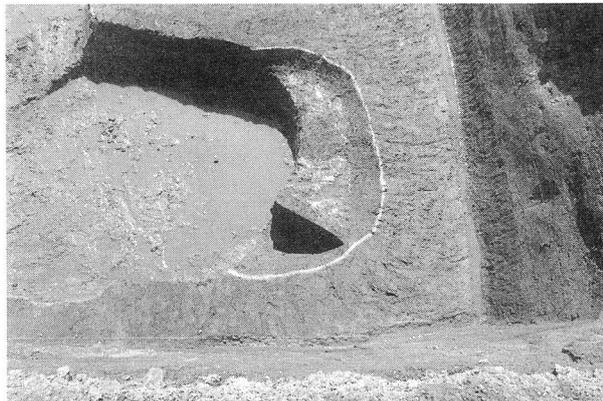
全景(東から)



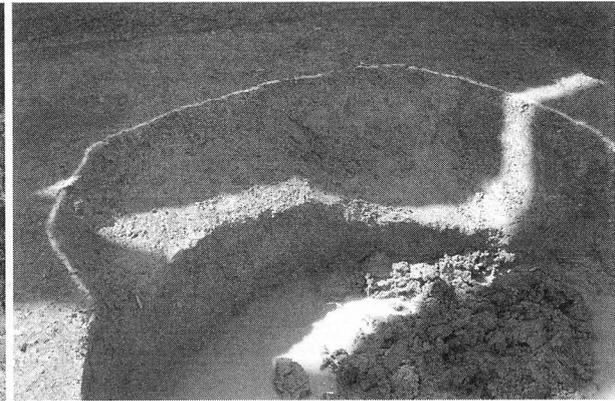
SK101(西から)



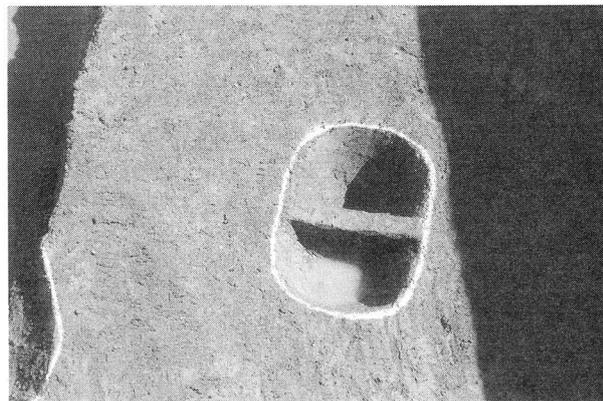
SK101瓦片出土状況(南から)



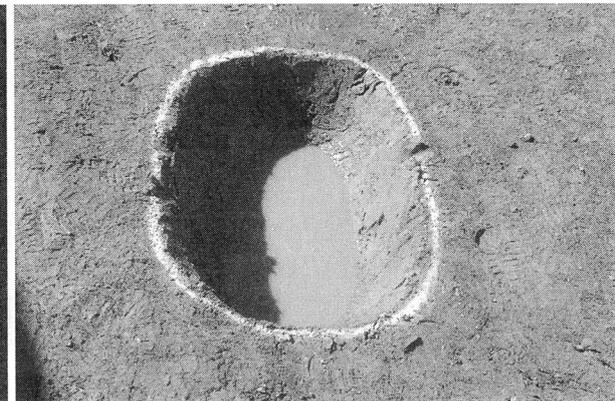
SK102(北から)



SK102(南東から)

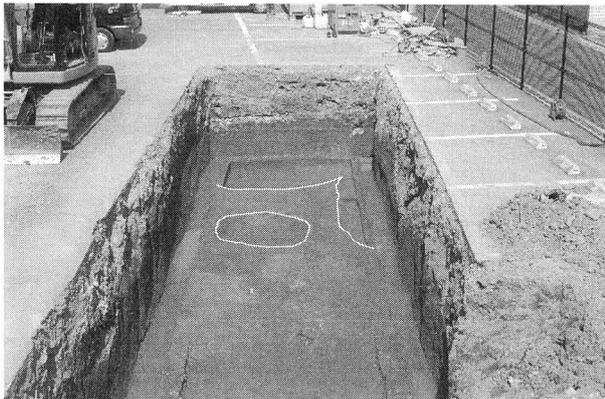


SK103(西から)

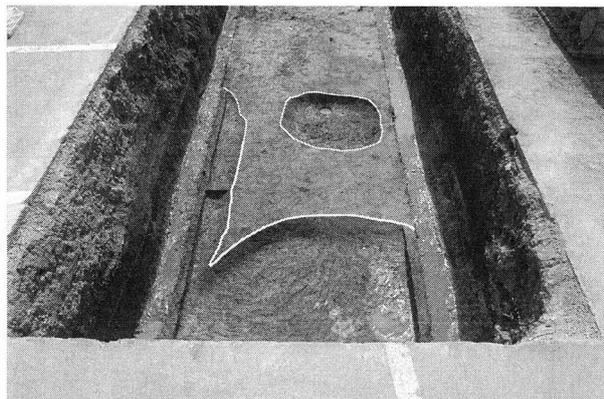


SK103(西から)

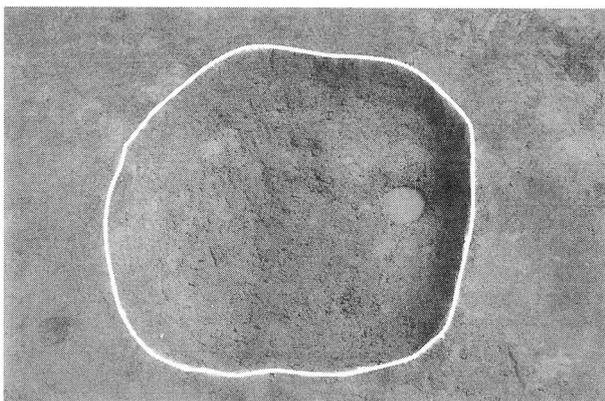
図版2 第2調査区



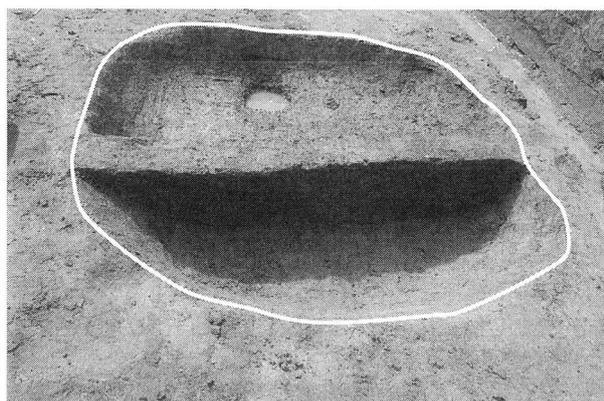
北部上面(南から)



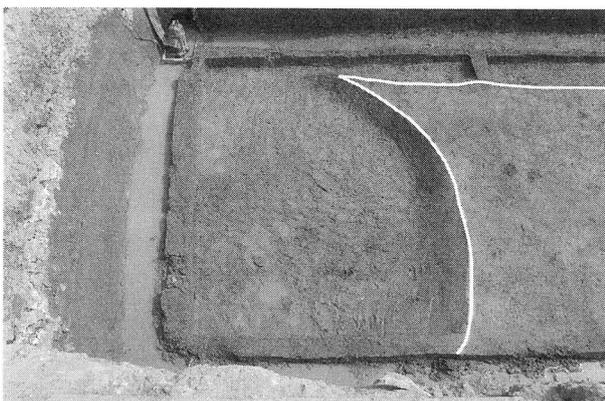
北部上面(北から)



上面 S E 201(西から)



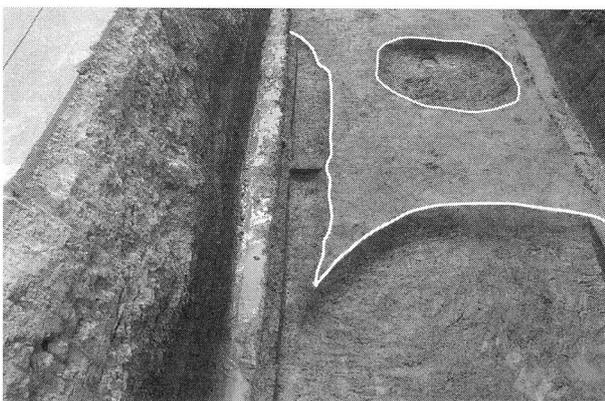
上面 S E 201断面(北から)



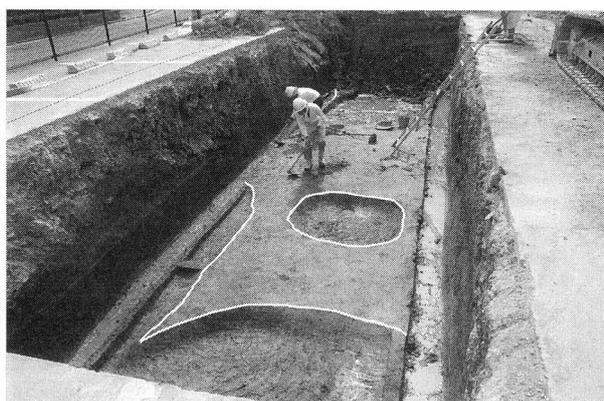
北部上面 S K 201(西から)



北部上面 S K 201断面(東から)



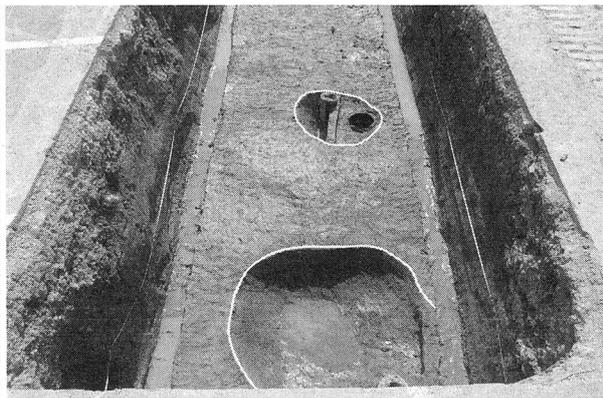
北部上面 S D 201(北から)



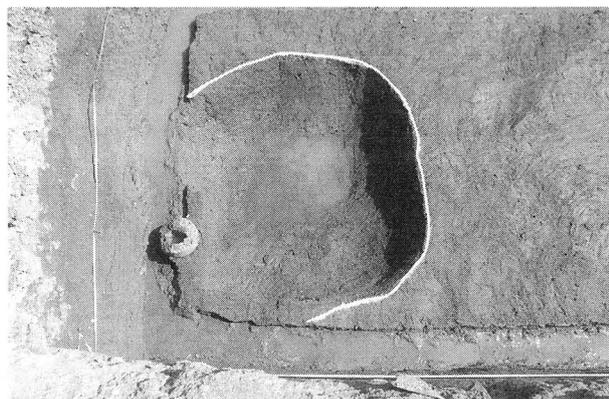
北部上面調査作業(北から)



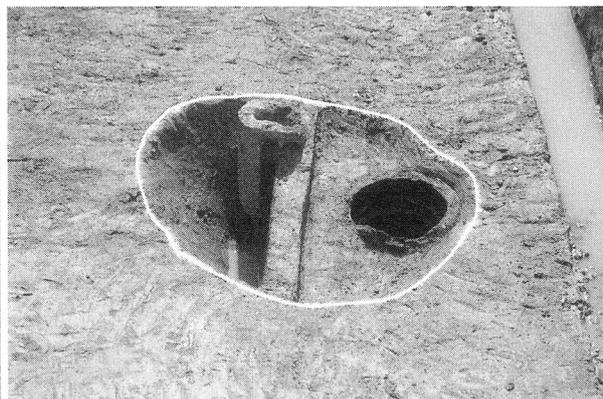
北部上面全景(南から)



北部上面全景(北から)



S K 201(西から)



S E 201全景(北から)



S E 201井戸側(曲物)内出土底板(上から)



S E 201井戸側(曲物)内土師器小皿(上から)



S E 201井戸側(曲物)立割り(上から)



S E 201井戸側(曲物)立割り(北から)

図版4 第2調査区



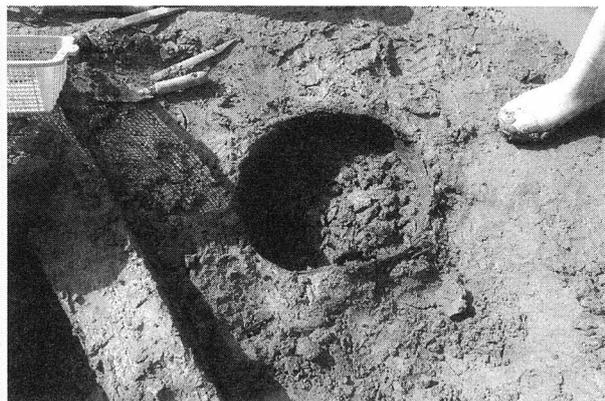
S E 201立割り(北から)



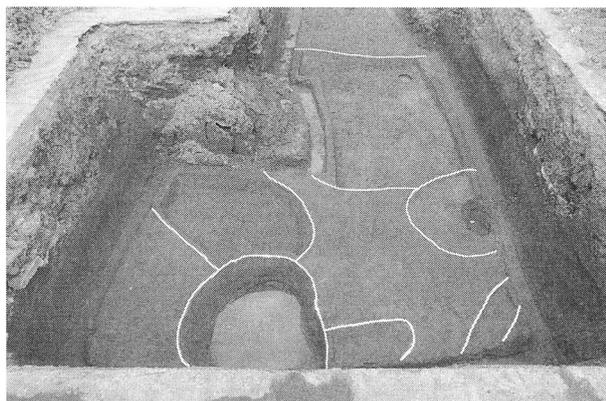
S E 201断面(北から)



S E 201実測状況(北から)



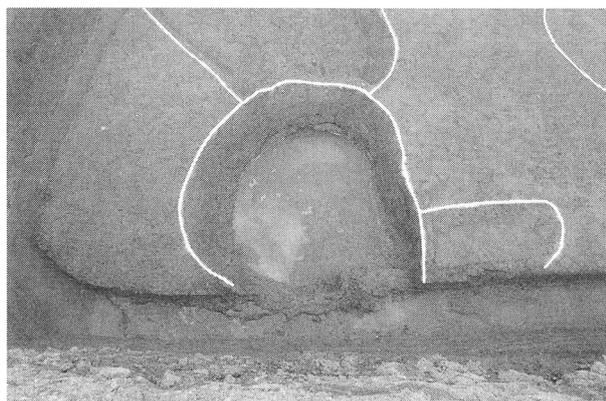
S E 201曲物検出状況(北から)



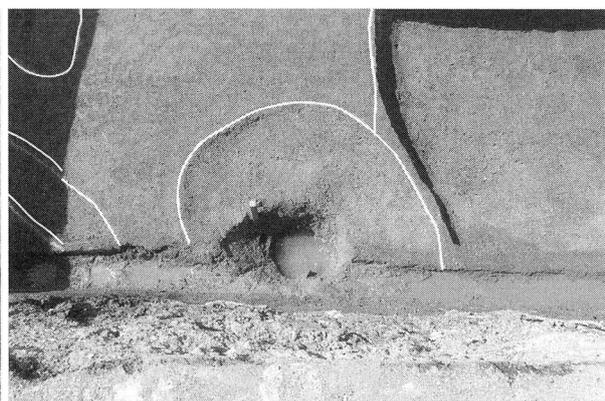
南部全景(南から)



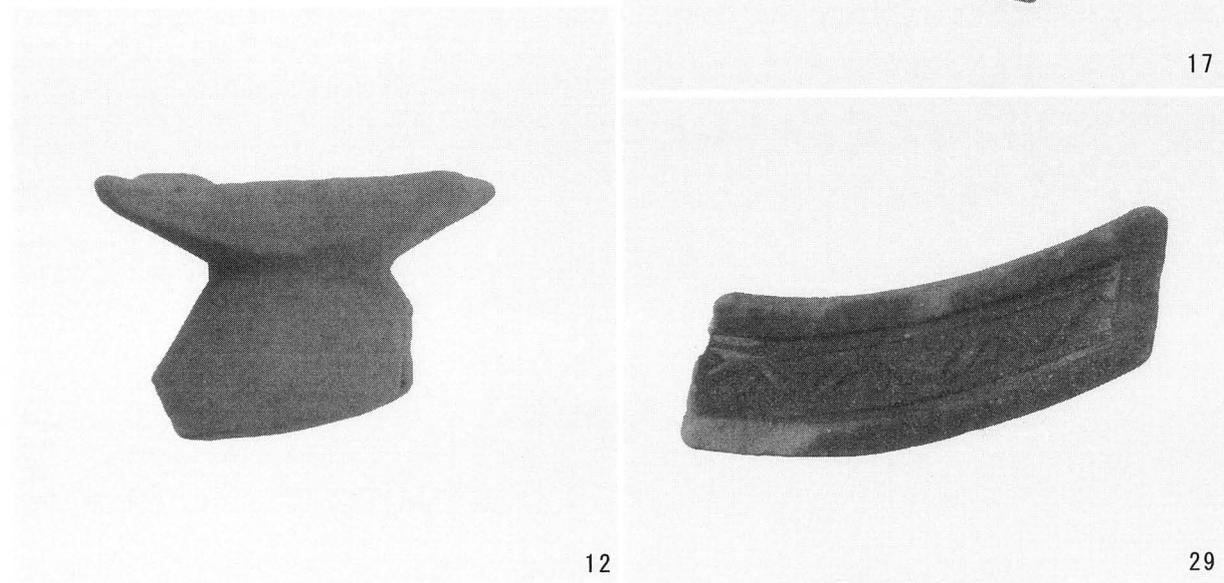
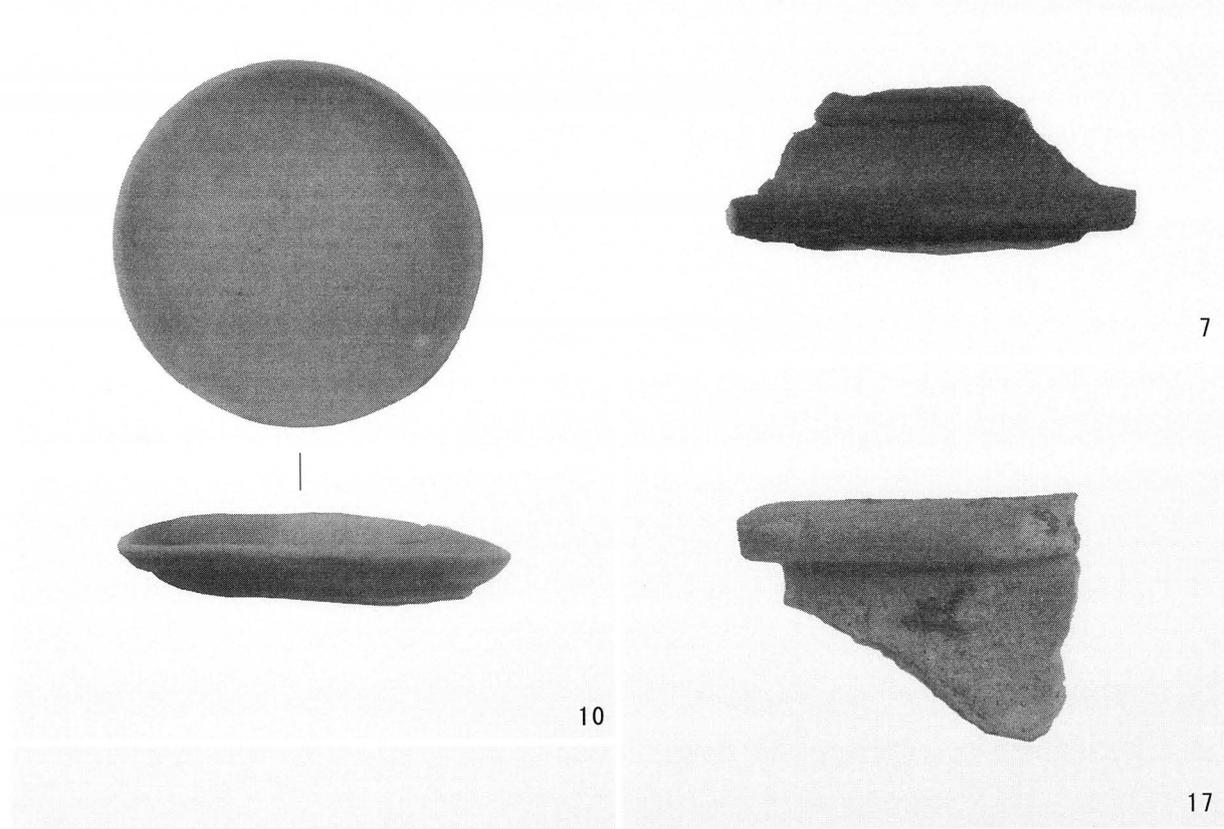
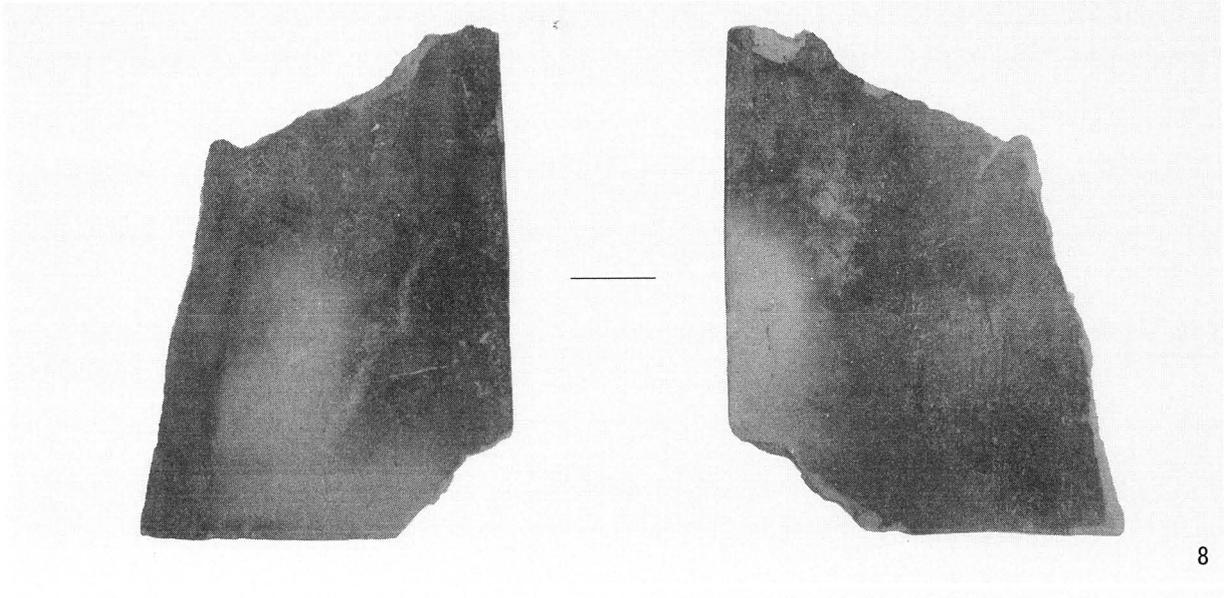
南部全景(北から)



S K 202(南から)



S K 205(東から)



第1調査区 SK101 7・8  
第2調査区 SE201 10  
遺構に伴わない出土遺物 12・17・29

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく137
書 名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告137
副 書 名	I 西郡廃寺第4次調査 II 郡川遺跡第10次調査 III 美園遺跡第8次調査
巻 次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	137
編 著 者 名	I - 西村公助・II・III - 高萩千秋
編 集 機 関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
にしごりはいじ 西郡廃寺 (第4次調査)	大阪府八尾市泉町二・三丁目	27212	30	34度 38分 55秒	135度 36分 16秒	20070122 ～ 20070314	約1,804	店舗建設
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第10次調査)	大阪府八尾市郡川三丁目	27212	26	34度 37分 20秒	135度 38分 26秒	20100706 ～ 20100813	184	介護施設
みそのいせき 美園遺跡 (第8次調査)	大阪府八尾市美園町四丁目	27212	35	34度 38分 20秒	135度 35分 28秒	20100927 ～ 20101014	167	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
西郡廃寺 (第4次調査)	寺院 集落	古墳時代前期	自然河川	古式土師器	
		古墳時代中期	埴輪		
		古墳時代後期	掘立柱建物	土師器、須恵器	
		奈良時代	土坑	土師器、須恵器、瓦	
		平安時代	井戸	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦	
		鎌倉時代	井戸	土師器、須恵器、瓦器、軒平瓦	
		近世	井戸・溝		
郡川遺跡 (第10次調査)	集落	弥生時代後期	井戸・土坑	弥生土器	
		奈良時代	溝	土師器・馬歯	
美園遺跡 (第8次調査)	集落	平安時代後期	井戸・土坑・溝	土師器・瓦	
		鎌倉時代	土坑・溝	土師器・瓦器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告137

I 西郡廃寺 (第4次調査)

II 郡川遺跡 (第10次調査)

III 美園遺跡 (第8次調査)

発行集 平成24年3月  
財団法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2  
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 (株)近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 ニューエイジ <70Kg>

